

難
波
丸
金
鷄

難波丸金鶏

座本 豊竹越前少掾

鎌倉泉岳寺の段

地功成て自功とせず。力を盡し心を忍以仇を復すとかや。小栗判官の廟所。鎌倉泉岳寺の廟前において。其隣敵横山郡領が首石面に備へ置。大星由良助良男同苗力彌。矢間十太郎。竹村定七。院主同宿摩介にて。いづれも焼香事終り。フシ嚴重たる折柄に。吉谷忠兵衛富堀助右。大息ついて立歸り。調鎌倉の大目附へ。右の段々申上。其次手瑤泉院殿へも。右の様子御しらせ申。地只今歸り候と相述べれば。大星點づき。調御苦勞。扱最前より敵の不意に寄るを恐れ。四十餘人の殿原焼香相濟。方丈に入て粥をすむ。則焼香の列書は斯の通り。披見あれと指出し。まつた敵横山が首取たるは。全各忠臣合體せし所。併一番の焼香は。是なる矢間十太郎殿。其故は四十六人の者共。妻子を捨ての憂難も。此白髮首をとらん爲。然るに是なる矢間殿。一番に横山の首とられしは。逃亡君尊靈の。御心に叶ひし所。まつた竹村定七殿は。床脇において目宛もしれぬ横山を。突とめられしは。是二番の焼香。其外は此大星父子を始。列々の其焼香。都合與力は四十七人なれ共。一人は我足輕寺澤吉平。陪臣なれ共忠臣の心ざしを感じ。人數の内へは印たれ共。陪臣なれば殉死の列をばぶき。諸用の言付遠國へ遣はしたれば此席にはあらず。殉死のめんめん四十六騎の焼香。延引ながらとくくと。いふに二人も辭するに及ず。焼香終る其所へ。取次の同宿が。案内と俱に。小栗判官兼氏の御臺所。瑤泉院よりの御使戸田の局。檣姿しとやかに。しづくとして入來れば。大星父子

上座へ進め謹んで。詞亡君の仇郡領が首取たるは。年來の本望。時刻移れば先々御臺所の御焼香と。指圖に随ひ戸田の局。懷中より九寸五分取出し。横山が首の上。てうくく三度押當。詞イヤノウ大星様。女義ならずば俱々に。何れもと御一所。横山が館へ御入有て。眞此様にもと思召ての御歎。大星様の軍術故。念なうかやうに本望を達し給ふ。御使に立し。自迄も大慶と。詞すくなにフシ刃物を納め。詞諸歴々の御中へ。女の長居は恐れ。ホヲ、然らばモウ御退出か。申迄はなけれ共。瑤泉院様の御身の上。地宜しう介抱頼み入。詞我を始め四十六人の者共は。あすは消行けふの雪。山を裂く。力も折て松の雪と。大鷹子の發句のごとく。項羽帳中の遺意有て。其英氣いまだ衰ずといへ共。地最早消行我々が。名残は盡す早お立と。父子諸共の挨拶に。道女のかよはくも。胸迄せき來る涙をば。襦さばきに紛らして。義士にそれく目禮し。フシ館へこそは歸らる。地かゝる所へ同宿一人。あわたし。詞横山の子息太郎殿よりの使者として。清水官之丞斧九太夫。横山の首受取ん爲門外に控候が。いかゞ仕らんと訴ふれば。地住僧すゝんでヤアく大衆等。詞スハ討手の向ひしならん。四十餘人の義士諸共。此山門を枕にせん。と。地墨染の袖まくり上。勇進し有様に。力彌も疎さず刀ひんぬき。ねたばを合し。詞ヤアく僧達。罪作りに各方を頼にせん。我一人討て出。一々に切ちらさん。法師原見給へや。地堺町の芝居にする切合人形の眞似をして。エイヤツトウをして見せんと。につこと笑ふて立たる有様。院主を始大衆迄。フシ一同に笑ひを催せり。地良男押へて。詞ヤアく早まるまい。横山の首亡君の塚へ祭らざる内は山門の固たり。敵打入て無法の働せば。討取に何條事の有べき。左もなき内は出家沙門の旁に。難義をかくるは死後の恥辱。地門を開いて通さるべしと。優々然たる有様は。フシ不敵にも又目覺し。地程なく御使者御入と。もらせと俱に横山太郎の執權清水官之丞。續て跡よりいがみ類。小栗の家を見限つて。直なる道を横山に。媚諂ふて己が身を。獨立ぬく斧九太夫。さも押柄に打通れば。地夫と見れ共智勇の大星。兩人に打向ひ。詞是はく御兩所御苦勞千萬。斯申は小栗判官兼氏が近臣大星由良助。

つゞいて義士の者共。亡君の仇横山殿を討奉り候へ共。高家の御首陪臣の我々が手に。留め置き所謂なし。亡君の塚に手向し上は。太郎殿へ送り申さん爲御入來を待受たり。地御受取下されよと。白綾の小袖一ツ取出し。詞是こそ横山殿の居間に。有合せたるを御首包持歸りたり。此外屋敷の内なる鍵一筋。四十六人の殿原が持歸りし事なければ。後日の爲官之丞殿へ。申入ると指出せば。地九太夫。傍に大口明て高笑ひ。詞ハ、ハ、ハ、李下に冠を正さず。瓜田に杵を入ざる古實。聞はつゝたる大星の淺智。盗人といはゞ手を出して盜べきか。當時盛の横山家へ敵對。跡腹の痛ぬ様に藥喰の鯨とは。ぬらりくらりの瓢箪侍。此九太夫などは。始よくして終も能すと。今横山太郎公へ取入て。執權官之丞殿と肩をならぶる此九太夫。嘸浦山し。地かるべきと。惡口過言聞兼て。大星力彌。詞ヤア案外なり九太夫。恩義有る古主を振捨。敵に諂ふ人非人。地其腮を切下んと。鐐打たゝけば。矢間竹村吉谷富堀。我々が艱苦の内。こたへし生畜生。兩足取て引さかんと。皆立かゝるを大星が。力彌が向ふに立塞り。押鎮むれ共とまらばこそ。こなたの九太夫反打ながら。官之丞が跡に付。寄ばフシ切らんと震ひある。地大星漸押とめ。詞力彌を初め旁。何と心得られしぞ。是迄の艱難も。郡領が首見る迄の事。此上は鎌倉殿の御指圖を蒙る。賢御免の上意たり共。死ぬに定めし我々が。畜生に等しき斧九太夫。何千人切たりと。刀藏に無用くと。地鎮る詞に人々。實も實も長生ひろいて面恥させと。脱詰たる勢に。猫に追れし溝鼠。ちう共フシいはずしよげりある。地官之丞衣紋を正し。詞大星殿を始各の義士エ。速々。誰も斯こそ有度物。大殿を討れ。斯申すは各の勇氣に臆したると思されんが。主人横山太郎の命を受。親殿の御首を守奉るが我等の役目。地イデ右の二品持歸る一札と。フシ硯料紙を乞受て。詞御首一ツ級并に小袖一ツ。櫛に受取申所實正也。清水官之丞。斧九太夫。地兩人書判それ／＼に。首受取の式禮目禮。萬里に羽うつ忠義心官之丞が跡に付。フシ互に別るゝ忠不忠。もろき命の九太夫が。其場遁るゝ危ふさも。東雲しらず明烏。眠の夢は。三重へ覺にけり

住吉霰松原の段

地比は五月末の八日。住吉霰松原に。フシ臂を枕にから鰯漕ぐ。フシ一本の松の朝嵐。地吹起されて蜘蛛が。ばつちり目さめて爰はいづく。詞住吉の霰松原。地燈明かゝげし數多の燈籠。扱は今は夢で有たか。詞ハテ變つた夢を見たよなア。元祿の比。小栗判官の仇横山を討たりし。四十七人の忠臣。大星由良助を始。横山が首受取渡しの折から。斧九太夫を追取巻蝸牛の争ひ。見しは正く鎌倉の泉岳寺。覺たる爰は攝州住吉。扱もかはりし夢を見たるよと。地枕つゝばりし有様は。象牙細工の根付の仙人。フシ立して見たるごとくなり。地傍に茂る松かげに。前後もしらぬ酔どれが。寢言交のフシ高軒。地是はと見やれば一ツの玉。胸の中より出ると等しく。あなたこなたへ飛廻り。かしこに並ぶ燈籠の。石臺にばつたりと。播消す如く失にける。蜘蛛助刺てハレ不思議や。詞隨に是は人魂なるが。誠に夫よ。其魂を呼返すは。聞傳へたる呪と。地伏たる男が下がへの。裾とつまをしつかとくゝり高聲に。詞人魂よ人魂よ。主は誰共知ね共。結び留たる下がへの裾と。地三度呼はる其中に。ふしぎや件の消たる魂。又烈々と顯はれ出。元の體へ飛入しは。フシ怪しかりける有様なり。蜘蛛助は立寄て。臥たる男の肩とらへ。詞エ、此酒臭い事はいの。コレ酔たんば殿くんと。地ゆすり起せば大欠伸。ア、ア、ア、ウ誰じやい。むまい夢のどうぶくらを。ゆり起す胸欲者と。地顔を眺めて。詞わりや蜘蛛助か。エ、あつたら夢の最中を。引ずり起すどう乞食と。地腹立聲にコレサコレ。詞其様に澤山に言しやんな。こなたの爲には命の親じや。乞食呼はり置てもらをと。地いふにこなたも氣色して。詞コリヤゆするなく。遠からん者は鼻でかげ。近からん者は目鏡で見い。忝くも九の喰助といふて。淀屋辰五郎様の。出頭第一の手代てゐるか。イ、ヤ牽頭持じや。其牽頭持に向つて。命の親とはどうじやい。ヲ、其様子いふて聞そふ。こなたは今死だはいなふ。ソリヤ誰に殺されて。サレバイノ。たつた今こなたの懷から。青い

火がぬつと出て。爰らをばふうはふは。蜘蛛の様に舞あるき。いづく共なくつゝと往た。ハ、アあれは慥に人魂じやが。其儘に指置ば。必其人三日の内に死るといふ。ア、いちらしい事じやと思ふて。おれが安倍の晴明より授りし。魂よばひの歌といふ名歌を詠て。貴様のソレ。其下がへの裾が結んで有る。地夫が證據といふに悔り。つまを眺てコリヤほんじや。詞叔はおれは死だかや。地ア、悲しやと泣出せば。詞コレく。そこでおれが咒の歌を詠だ故。貴様は助かつてゐるはいの。ム、そんならわしは死はせぬか。歌で命を助かつたか。コレく其歌はどふてござります。廊中へ弘る爲に。手を付けて諷ひませう。ハテばかりしい。コレ貴様の様に。人魂のぬけたのを見ると。其下がへをそう括つて。人魂よく。主は誰共しらね共。結びとめたる下がへの裾と詠だれば。こなたの魂がふうつと戻つて。其懐へしゆつと這入た。其様に口たくも。此蜘蛛が命の親じや。一ぱい飲して。地下あれと。何かに付て付込は。蜘蛛の巢まとひと見へにける。詞エ、やばらしい。一ぱいそちが呑たいより。あつたら酒の酔がさめた。こつちが一ぱい引かけたい。命の親は恨めしい。エ、まそつと寝さして置てくれると。きよとい夢をおれは見るに。ム、其けうとい夢とはどふてえす。サ其夢は金の山へよち登り。四方を屹度見廻せば。そこら中が金だらけ。どうぞして此金を。引かたげて戻つたら。儕やれ。牽頭持をやめてくりよと。汗や雫と堀てある内。われがむりにゆり起した。ねだろならこつちから。コレ蜘蛛様。夢のかはりに何ぞおくれと。地手を指出せば手の内びつしやり。詞がきの物をびんづりと。塗廻す牽頭口。詞甘けりや付上る。客を剗其かはり。ドレ鹽目のよい此羽織。我等是を頂戴と。地立寄ば飛退て。詞ヤアすないくじやらつくくない。是やるとナ。お客様に呵られるはい。イヤ呵られる次手に。旦那は難波屋に待兼て有ふ。アレく大勢おれを呼立る。ライくくく。九の喰助爰にゐる。地くくと獨打たりじりく舞。蜘蛛の巢廻る飛虫の。フシ跡をも見ずして走行。地後影見てハ、ハ、ハ。詞テモ叔も。やかましい奴では有と。地邊見廻し蜘蛛は。諸手をくんで一思案。詞ム、今あいつが夢咄し。金を堀と思ふたと。ぬかしたは正し

く正夢。今のやつめが魂が。かう出て此の燈籠の下。ム、ウムツウ金の夢は偽りなき物と。世俗の噂にも聞傳へしが。何にもせよ此土中をと。地持たる息杖逆手に追取。土を穿てばかつちりと。當るは幸ひ物こそ有と。兩手を入れて引出し。ずつしり重きはごさんあれと。包ほどけば是はいかに。光り耀く金の鶏。持たる我も軋果。フシ暫し飛退居たりしが。詞ハア誠に佛説に有る空海守敏が夢合せ。悟り得たるは大師の智恵。それは佛説。是は眼前。我にあたふる天の告。有がたし／＼と。地押戴しがきつと思案し。竹枝の先がんと啖。喰したいたる假の筆。料紙は是ぞと身にまとふ。雨合羽を引ちぎり。墨は幸ひ燈籠の。油煙を取てさら／＼。何かは知ず一書を認め。元の土中に埋置。地土をかぶせて押付踏付。件の鶏ふくさに包み。人目草原見廻して。行衛もしらず三重／＼かけり行。

勝間堤の段

フシ幾世經ぬらん住吉の。岸に續し内川筋。勝間新家の堤前。一際目立御座船に。淀屋辰五郎迎ひ迎。花麗を飾る大幕は。大坂一の分限と。フシ人も羨む計なり。地けふは御田の神事連。貴賤群集の其中に。一僕連し深編笠。大小さすがゆがみ道。堤傳ひの向ふより。淀屋の番頭宗兵衛といふねぢ者。夫と互の出合頭。詞是は／＼。ヤホイ是は野田權藏様。いつお下りなされました。サレバ／＼。今日貴殿方へしらせんと思ひしが。急なる事で此住吉へ直様参つた。扱内々文通にて申越は。御邊は辰五郎が兄なる故。淀屋の家を吞たき思案。尤と合體せしが。今度八幡の領主橋中將殿より。姫を淀屋辰五郎へ縁邊の義に付。木津三太夫といふ者。使者として罷來る。則彼が娘お駒といふ容色よし。我等首だけ様々くどけど聞入ぬ故。此度身が主人近江の領主志津摩の頭殿へ。有馬湯治と偽り暇を受。當所へ参つたも彼お駒を手れん爲。地幸此住吉へ参る由。聞付て來りしと。いふに宗兵衛成程／＼。聞兼て申合せし通。元私は辰五郎爲には兄なれ共。前旦那與茂四郎殿が。手代にして置れし故。せふ事なしの番頭役。

所ところに中將殿ちゅうしやうだんの娘むすめと。此方このほうの辰五郎たつごろうと。縁邊えんぺんの言合いひあせは金かねの鷄にわとり。双方取替きりかへる契約けいやく故ゆゑ。此鼻このはなが智恵ちゑを以もちて。彼鷄かのにわとりを盗ぬす出し。人ひとしれぬ所に隠かくしては置おきたれ共ども。若詮議もしせんぎの時ときは科人しやうにんを拵こしらへん爲ため。是これも趣向しゆきやう致いたし置きました。とかく八幡やとこちの家やと。縁組えんぐみ有あては尻持しんもちが重おもなる。夫故それゆゑ辰五郎たつごろうに忠心しんしんの手代てだは。皆みなぼつ拂はらふたが今いま一人ひとり。前旦那ぜんだんなが受出うけだして置おけた野郎やろう上あり。新七しんしちといふ手代てだも。どうやらかうやら辰五郎たつごろうに毒どくを吹ふて。二月計跡ふたつきあきあとに是これも足あしを上あげ。其外そのほかは皆みな。地此宗兵衛ちこのすべゑが手下てしたでござると。地咄ちばなすに權藏ごんざう出來きた。調時々てうときとき金子何かねにかお身みの話わになれば。此恩返しこのあがへ連判狀れんぱんじやうの一筆いっぴつは此權藏このごんざうと。かく願ねがひはナコリやお駒おこまの事こと。出でつくはしたら直ただに奪さらふて退思案たいしあん。奴やつこぬかるな。地宗兵衛すべゑさらば。と權藏ごんざうは。フシ社ふしやの方かたへ歩あみ行ゆ。地跡あきあとに宗兵衛すべゑ一人笑ひとりわらふ。船ふねの脇わきへ歩あみ寄より。松兵衛まつべゑと手てをた。くれば。内うちより出でる下手代てしたて。詞工しこうエ番頭ばんとう様待兼さままちかねた。ヲ、道理だうり。内うちの手番何てがふにやかや。地委細きこの趣向しゆきやうは舟ふねの内うちと。障子引立入しやうしひだていりにける。立たちならぶ。松まつの位の伊達模樣いただもやう。伽羅がらたきとめし白無垢しろむくの。ゆかりは松まつに白鷺しらさぎの。ねくら争あらそふ風情ふうぜいなり。地跡あきあとから追付引舟おひつひきねふね禿たいこ。牽頭けんとうの噲助くわいすけ。二上ふたかみり調子てうし。詞ことコレ吾妻ごさい様さま。お待まちいな。ア、なぜ其様そのやうにせきはます。ヲ、九主早きみすはやう來きておくれ。コレ辰様たつさんが見みへぬはいなア。地早はやう尋たづねて。を聞きて宗兵衛すべゑ。フシ舟ふねより上あり。詞こと是これは。吾妻ごさい様さま。何をきよろ。尋たづねるのじや。サレバイナ辰様たつさんがさつきにな。難波屋なんばやの格子かかしの内うちで。門通かどとほりを見る中に。能男よめおとこが通とほるといふたれば。夫そからふいと腹立はらだて。何處どこへやら往いきなさつた。若舟わかしづなになら。地逢あして。おろ。聲こゑに。フシ頼たのにぞ。地是幸さいさいひと宗兵衛すべゑは。詞ことヲ、道理だうり道理だうり。そふ思おもふて留とどめて置おいた。コレいやも。大抵たいだいや大方機嫌おほなたきげんの悪い事わるいことじやない。ドレわしが挨拶あいさつしてやると。地御座ごんざ舟ふねに乘移のりうつり。詞こと申し旦那だんな。吾妻ごさい様さまが見みへましたが。ナントそこへ遣やましよかえ。イヤ。ならぬ。あの様やうな不心中ふしんちゆうな者ものはいやじやぞ。アレ。あの様やうにいふてじやぞへ。何ぞ又またお前不心中まへふしんちゆうな事こと。イエ。あなたに對たいして何なににも私わたししや。不心中ふしんちゆうな事ことはなけれ共ども。ア、思おもひ出したはいな。アノナ夕部ゆふべ難波屋なんばやの座敷ざしきで。辰様たつさんの寢物語ねものがたりは。明日あすは八幡やから祝言しゆげんの結納なとして。家の寶金たのたけがねの鷄にわとりを取替とりかへ。三太夫みたひふといふ堅かくろしい侍衆さむらいしゆが見みへる。其寶そのたからを取とかはすと。お

れは申將殿の娘と。祝言するが腹は立ぬかと言なかつた。私もあなたが大切故。嫁御のお入なさるはお家の爲。又親
 御様への御孝行でござんすれば。何の陪氣は致しませぬといふたればナ。陪氣せぬは外に思ひ込だ男が有て有ふとい
 ふて。夫故か今朝から機嫌が悪ふござんす。コレ今から陪氣をせう程に。どうぞあなたへ詫言して。地堪忍して下さ
 んせと。譯も涙に伏沈む。地宗兵衛心に打點き。能持かけと横手を打。ア、是は旦那の尤じやが。イヤ申し今の
 様に今度から。陪氣せうといふてじや程に。御機嫌直しておやりなされと。地いふに障りの内よりも。調イヤ／＼
 何ほ陪氣せうといふても。嘘じや／＼。そんなりや向後随分陪氣するといふ。慥な證據が見たい／＼。宗兵衛われに
 任す急度計らへ。ハアこりや御尤。委細我等に御任せと。硯料紙を持添て。吾妻の傍へ歩寄。調コレ今聞んす通り。
 お前が向後陪氣さんすが誠なら。わしがいふ様にさんすか。夫ならハテ旦那の機嫌を直さす。どう成共お前次第と。
 地聞て吾妻は涙をおさへ。そも逢初の其日より。けふの今迄物半日。機嫌の悪い辰様の。顔見た事はないわいな。機
 嫌さへ直るなら。何成とせう宗兵衛様。サアどうせうえ／＼と。女心のあどなくも。佛頼んで地獄とは。フシ我身
 の沈む初めなり。地宗兵衛は笑聲に入。そんならわしがいふ様に。若旦那の念暗し。サア／＼一筆かゝんせと。いふ
 に嬉しく筆取上。詞何と書ふえ。ヲウサア／＼マアそこへ。此間は御めもじなし申さず候。左様に候へば。近々に八
 幡中將様の娘御と。御縁組是有印に。御家の重寶金の鶏を。御取替なされ候由。縁組有ては腹立悲しく候故。お
 前より預り候金の鶏を。人知ず捨申候。ソリヤマア何の事じやへ。ハテマアそうかゝんせ。様子は跡で言ふ。サア
 そんならどうじやへ。捨申候からは縁組の種もなく。わたしとお前と幾千代かけて夫婦に成り／＼。此上け餘の女子
 に。目と目を見かはしなされ候は。忽鬼女と成て喰付。ヲ、こは。そんな事は否いな。サア／＼まあおれがいふ
 様に書た／＼。エ、こはけりや斯じや。鬼になつて喰付吸付抱付。サア是てよいかな。抱付參らせ候めてたくと。し。
 モウよいかへ。サアめてたくと。し。サア書たはいなア。辰五郎様。吾妻。日はいつじやへ。月日でよい。ドレ／＼

よし。サア夫をどうさしやんす。サア。地おれに任しておかせと。やがて舟に乘移り。調申し旦那辰五郎様。此通の一札を取ました。是で堪忍しておやりなされと。障子の内へ投入れば。内には夫と辰五郎が。地ドレヲ、よし。此通随分と惱氣を仕や。アイ。そんなら私もドレをこへ。ア、待ちや。まちつと此文句に氣に入らぬ所が有る。ソレ難波屋へ行て待てや。追付おれもそこへ行と。地いふに嚙助をり立。又もや御意のかはらぬ内。是から直に難波屋へ。旦那跡から宗兵衛様。ヲ、サ。呑込だ。追付そこへ連れて行。早々とおだてられ。そんなら辰様早ふえと。吾妻は小づまかい取て。禿引舟諸共に。難波屋さしてフシ歩み行。地宗兵衛が見送る中。障子をぐはらり引明て。立出るは手代の松兵衛。調何と宗兵衛様どうでござんす。イヤモ出來た。氣疎い。辰五郎の物眞似生寫し。あの様にも似れば似る物か。おれも軋て我が折た。常住ねきに付てゐる。おれさへ聲を聞やいな。ほんまのかと思ふて悔した。何ときつうござんすか。マアわしが物眞似は。石場も平助も叶ひやんせぬ。マア文七又太郎大五郎。女形では金作喜代三。崎之介もやりやんすて。イヤモけうとい。生寫の辰五郎じや。地ドレ。其一通をと手に取て。調是書そふ爲の一作。何ときよといか。首尾よう參つて我等は淀屋の大旦那。此松兵衛は關白職。マア。打ておけ。しやん。氣でせい。しやんのしやん。地踊悦ぶ其所へ。地酒が酒呑む千鳥足。辰五郎は居續の。ふらり。のちろ。目。牽頭は桂元格とて。お手生醫者のかたを杖。謠ましくらひよろ。来るを。地見るより兩人コレハ。若旦那。調なぜ是へお出なされました。追付夫へ參りますのに。イヤ番頭主爰にか。三文字屋に今迄待兼て給過た。ノウ元格老。イヤモウ旦那のこつふにはきける。地いふに松兵衛。調アノ水晶のやかへ。サレバイノ。モあれでは誰もきけるぞ。きけるとは。ヤ吾妻はどうじや來なんだかと。地聞て宗兵衛。サレバ。調あずま主は最前お前を。一遍尋廻つてござんす。が御機嫌が損ねたと聞たが。何の機嫌が。ハテお前の機嫌が。ハレやくたないもない、おりや少々腹が立て。胸がもや。する時も。あづまの

顔見ると。さつぱりと氣が晴る。デモ門通の男を能といふたら。お前は疳癪じや有たげな。ヲ、夫はちつと腹が立た。サア、そこを私が趣向が有る。元格老。旦那聞氣か。聞ふ共。コリヤ文珠め。宜しい。慰なら白狀。サア其ちつと立腹を。大きう立た顔をして。是から直に此一くるは。どつといふて新町の。佐渡明神方へ押かけるじや。面白い。時にどふじや。サ廊中を大寄して。和田酒盛を始めるじや。時に旦那は五郎役。面白い。此宗兵衛は十郎役と。地いふに元格。詞何十郎役とは。ハ、ハ、ハ、コリヤどうよく赦せ。イヤ。宗兵衛十郎よ。かろ。そしてどふじや。所をお前は五郎で荒事。親の敵祐經を討留るが。留て見ぬかといふ所へ。朝比奈が出て草摺引。コレ。其朝比奈は誰じや。そこが文珠が智慧所。誰じや有うと思し召。ムウ元格老か。イヤ。松兵衛か。イヤ。ソナラ誰じや。サそこを朝比奈は。色眞黒な大男。鰯の山を見る様な。男が出ようと思ふ所。吾妻様に素袍を着て。小林の朝比奈。五郎暫くお待ちなアと。夫からが草摺引。おらが一番とめたはいなアと。地直に床入か寢間の睦言。サ、ハ、ハ、ハ、どうじや。と。フシそゝり立れば。地毒氣にそゝる辰五郎。きよとい。詞是から直に行かけふ。吾妻はどうする。あづま様は跡からわしが連て行。松兵衛お供し先へ行きや。地ヲツト心得三枚がた。跡からお出と三人が。うかれ調子に聲はり上。ヨイコノ。難波淀屋の辰五郎様が。廊へござらば雨風霰。雨じやござらぬ辰五郎様の。フシ戀の涙がヤレコリヤ雨となる。ヨイ。ヨウイヤサ。そゝり立てぞ。フシ急ぎける。地宗兵衛は舌打し。此様子を吾妻にと。フシ難波が元へ歩み行。地夏草の。フシさと薫り來る一群は。地八幡の長刀に。フシ心の器量を顯はせり。地同じ道筋道草に。あづまは跡より辰五郎を。待兼爰へ。フシ岸傳ひ。地こなたは見馴ぬ太夫の風俗。若黨。姫目引袖引。ありや新町の太夫じやげな。こちの屋敷の風とは違ふて。をかしい物じやと笑ふをお駒は。ヤレ端たない。姫共。控て居いと呵付。あづまが。フシ傍へしとやかに。卒爾ながらそなた様には。新

町の茨木やの吾妻様とやら。道行人にお名を聞。ちとお目に懸りお近付になり。お咄し申度事有と。地いふにこなたもコレハ。詞見ますればお歴々の御寮人様そふな。わたしに御用とは。何の御用でござりまする。コレ金彌。たばこ盆をと。地いふに氣轉の喲助が。サア。是へと撥けたる。毛氈直に道芝へ。敷ならぶれば。詞サアあなた様あれへお越。マアそもじ様と。地互の辭義。手に手を取てサア一時にと。並ぶ姿の桃柳。咲せてフシ見たる氣色なり。地お駒は衣紋繕ひて。詞卒爾ながらそもじ様は。淀屋辰五郎様と深ふお馴染なされし。あづま様にて侍ふかと。地いふにこなたも不審顔。詞ハアそうおつしやるお前は。マアどなたでござんすへ。ほんにわたしとした事が。人の名を尋るには。我假名よりと申まするに。不作法千萬な。自は八幡の中將の家來。木津三太夫が娘。駒と申者でござりまする。ム、すりや辰五郎様と言號の有る中將様の。ヲ、よう御存。夫に付てのあなたへ御無心。私が父様がお預りの姫君は。漸に十歳なれ共。前與茂四郎様とのお約束。筋目正しき淀屋のお家へ御縁邊。去ながら辰五郎様とそもじ様は。深い中との取ざた故。此度と。様と參りましたは。兩家の重寶金の。鷄を。結納の印に取替ん爲下りました。最前住吉の松原にて。そもじ様の噂を聞。ヤレ嬉しやよい折からのお出合。お前様のお計らひで。早うお輿の入ます様。惡からずお取なし下さらば。家中を始め我々迄。大慶に存じますと。地詞すくなに述けるは。粹も及ばぬ心ばへ。地あづまは暫し詞なく。指うつむいて居たりしが。詞コレハ。結構なお詞に預つて。却て痛入まする。大事のお身の辰五郎様。何しに嫁入の。妨を致しませう様はなけれ共。地夕アも夕アと辰五郎様。嫁入を惱氣せぬ連却てお阿。私迎も親はらからの流の身でもござりませぬ。突出しの其日より辰五郎様のお情にて。終に一度外の客に。詞をかはした事もなし。詞其御恩有る辰五郎様の太切の御縁組。何しに。妨致しませう。何々の誓言にて。早うお輿の入様に。辰五郎様に申ませう。地其かはりには一ツのお願ひ。せめて。姫君様のお髪上。お傍使に遊ばして。辰五郎様のお顔計り。朝夕見せて給はるなら。此上のお情申。お駒様。惱氣心はござりませぬ。婢の衆と名を付て。お傍に使

ふて下さりませと。誠を明す眞實は。勤に稀な女なり。地お駒も手を打テモ扱も。詞見ると聞とのお前の心。傾城の太夫のと。陰ていふたが恥しい。地武家も及ばぬ御貞節。御婚禮さへ相濟は。お前のお身は私が合點。詞慮外ながら實眞の。姉を持たと思ふて下さんせ。コレハ御深切。そんなら私しを妹と。思ふて給はるお心かへ。ヲ、思はいて何とせう。そんなら姉様。妹と。地女同士の深切は。フシちとせも馴染し如くなり。詞かゝる所へ煙冠せし侍に。供の奴が千鳥足。詞コリヤ。能女郎衆がならんだは。色めくときけかゝり。地お駒にひつたり抱付を。突飛して氣色をかへ。詞慮外なる素野郎め。女と思ふて侮ての慮外か。すさり居ふときめ付れば。地酔たんば聲の諸平が。詞ヤア推參なそげめらう。すさり居ろとは慮外なやつと。呵る所を呵りはせない。地サア。お出と柔にかゝり。手を取て引立てるを。武士の娘に慮外など。指込手先を振放し。供の小者が長刀追取。透もあらせずまくり切。案に相違の諸平が。肩先したゝか切下られ。ソリヤ切たはと逸出せば。傍に忍ぶ權藏が。慌て是もフシ逸散たり。地いづく迄もと追かくるを。若黨囃助縫付。相手は逸たお赦しと。押といむれば吾妻はこはく。傍に寄り。詞申し。堪忍なされ。よく。こはかつたやら。最一人達が隠れてゐたが。是も一所に逸ましたと。地聞てお駒がサレバイナ。詞最前住吉の反橋の傍にて。甕に見た野田權藏といふ侍。常々主有私に何のかのと横懸慕。今の様に仰山に威たも。有様は此方がこはさ。又行先で待居ろかと。地夫がわたしも氣遣など。溜息ついだる其所へ。難波屋の男走來て。詞申し。宗兵衛様のおつしやります。辰五郎様は三文字やから直に新町へ。お前は跡から舟に乗て。住半へ早うおこしとの言付てござりますと。地言捨跡へ引返す。あづまは聞より幸ひ。詞どうやら空も曇て來た。何様けふは廿八日。虎の涙雨とやら。道で降てはお前も御難義。新町橋迄あの舟で。地つもの何かの物語。お盃も致したい。詞ホンニナア夫もそう。今の奴に鼻明すコレ甚内。そなたは新家の茶屋へ往て。家來共を先へ歸し。乗物計て新町橋とやらへ迎におこしや。ナイ。とフシ急行。フシこなたの二人は舟の内。サア。酒よ盃よ。たつみ

上りに喰助が。早しやべり出すさわぎ歌。空は五月のさつき雨。北しぶきからそりやくと。歩み引やら三味引やら。雨戸引立權突立。咄しを積て出小舟。跡住吉も遠ざかり。新町橋へと三重漕て行く。

北濱淀屋の段

地淀川の流を汲は人の氣も。大坂一の長者號時の用ひも大川筋。フシ橋も名高き淀屋連。代々續く棟瓦。紋は棠唐迄も。フシ難波の花と匂はせり。地今宵はお客と夕顔の朝顔はんぼり燭臺をはいつ拭ふつ蠟燭の。新季のおすまが。詞ナフお政殿。夥しい雨や雷で。晝のお客が今夜に成たといへば。地點き。詞ヲ、夫いの。そしてアノ奥座敷にござる安立安次郎様と。今夜見えるお客のお駒様とは言號とやら。さつきに隱居様とお咄の時間て居たと。地噂の中の居間よりも。出る姿も尼の名に小庵といふて辰五郎を。産の母御の年はまだ四十の上は四ツ五ツ。盛の花も子の爲に。地折目正しくしとやかに。詞ヲ、皆太義じや。モウお出に間も有るまい。隨分鹿相のない様にと。地言付勝手へやり戸口。詞此辰五郎はまだそうな。早う戻つてたもらいでと。地案じ杉戸へ宗兵衛が。詞ハア小庵様はにござります。けふも且那の跡追て。住吉さんがい異見しに参りました。是も家を大事と思ふから。是程お爲を思ふ私。夫に何じやと。追出して仕廻ふた新七が事は。言出して涙をこぼしてござるげな。ヤ夫はさうと三太夫様が見へぬ前にと。松兵衛を迎にやりました。ハテ是も旦那殿や。お前に魔亡させまい爲。ナさうじやござりませぬかと。地いふた所は忠臣顔。底は魔王に釣を取。フシ欲煩とこそ知れけり。詞三太夫様只今お出としらすうち。地ずつと入来る其仁體。禮服袴の着こなしも。這鱈有る家老職。小庵も會釋出迎ひ。御苦勞様やとフシあいしらふ。詞是は、御機嫌の體。御互に珍重此上なしと一揖し。擬今朝罷下り。直様と存じた所。今日は住吉御田の神事とやら承はり。同道致した娘お駒。參詣致し度と申によつて。其歸りを待合すれ共。未だ下向も致さず。去によつて夜陰に及び伺公致した。先達て書通

を以て通ぜし如く。中將娘を辰五郎殿へ進上の結納。付ては兩家に傳はる番の鶏をも。取替申せと有主人の口上。御子息にも對面致し。納得の御返答も承はり。明日歸宅仕らんと。事詳に相述る。コレハ〱彌御息女を送り下されん固のお使とは。辰五郎が外聞。此母迄いか計お嬉しう存じまする。先お盃お銚子を。ア、いや〱お構御無用。辰五郎殿のお目にかゝり其上。何か申合さんと。地心をせく程小庵は氣の毒。詞辰五郎義は用事に付。ハア他行でもなされたか。イヤ迎ひに人を遣はしたれば。モウ追付ノ宗兵衛。地ハイと返事も不肖〱乗物につく松兵衛が。ハツ、追付兼てすた〱息杖ちんから爰じやとフシ昇すゆれば。地宗兵衛庭へとんきよ聲。詞何て隙を入れてゐた。地サア〱是へと立寄ば。詞イヤコレめつたに呵らしやんな。何が大騒の最中。往ぬ事はいや〱とおつしやつたれど。大切なお客といひ。お歸りなふては済ませぬと。無理に乗まして戻つたと。いふも互に手をかけて。一度に明る乗物に。前髪髪江戸彩色。見かはす顔は逆澤濁。鎧腹巻り〱しくも。矢の根五郎の辰五郎。足ふん反しフシめれん聲。詞けふは五月廿八日。親の敵工藤を討取力だめし。草摺引の相手は朝比奈。吾妻はどこに居るぞいやい。朝比奈が役じやないか。噲助はどこにおる。そこらにいはり木瓜出せと。地口合やらたはいやら。和田酒盛を持かけて。興を覺さす仕掛とは。知ぬ小庵も使者の前。フシ消も入たき思ひなり。地宗兵衛態と氣の毒顔。詞松兵衛も松兵衛。いかに酔てござる連。興がつた此姿。三太夫様の手前お笑止に存じます。ア、いや〱笑止なとはそりか他門の事。結納の使者に參れば。中將殿とは早一家の中。隔心がましい何御遠慮。京都とは違ふて大坂は繁花の地。殊に遊所は諸人の付合。淀屋共いはる〱分限者。人の得せぬ遊興は致されたがよいてや。ナウ御母公。暫く休息なされたら。御酒の酔も醒ませう。御家來同前の三太夫。必心おかれなと。地座席を繕ふ客ぶりに。二人の手代も口あんごり。マアマ奥てお休と。腰をかゝへつ手を取るやら。乗物傍に直させてフシ小庵と共に入る折から。地姫が手をついて。御申し〱三太夫様に御用有て。野田權藏様とやらが。只今はへといふ内に。地奴が死骸を戸板に昇せ。のさ〱入

来る野田權藏。詞三太夫殿是にと聞き。連參つたは身が家來諸平といふ者。ヲ、仔細御存なくば驚き尤。今日住吉の濱邊において。息女お駒殿があゝの如く手に掛召された。身も武士でござれば此儘にも指置れず。大法の通解死人を申受ふと存じ參つた。サア御返答承はらんと地にち掛て。お駒を儕が手に入れる。工としらぬ三太夫。詞仔細承はつて安堵致した。併まだ下向致さぬ娘。歸り次第詮議を遂んといふ所へ。地若黨甚内立歸り。詞お旦那是にと承はり。お駒様御下向に候故。地直様御供申せしと。案内にフシ連て入來る。地姥婢が立かゝり。乗物の戸を押明れば。留木が薰る櫓の裾入文字も千鳥足。姿ははでにしどけなし。詞コリヤコリヤお駒早速聞はふ。あれなる諸平とやらんを何故に殺せしと。地言つゝ顔を。コリヤ違ふたと軋る中。あづまは邊を見廻して。詞ホ、ホ、もう雨はやんだかへ。雷はわしやいや／＼いや。舟の着迄も一ツお上り。又おさへかへ。私しやモウ／＼最上川。否にはあらぬいな舟の。地傾くあづまが酒機嫌。詞吟助主／＼。金彌／＼と地呼聲の跡はころりとフシたはひなし。地三太夫二度悔り。詞コリヤどうじや。お駒はどうした何としたと。地いふに氣の付若黨甚内。とつくと眺めてほんに違つた。詞イヤ申し。今日住吉の濱前。御寮人様と此女中とお出合有て。お歸りは川御座の同船。我々は新町橋へ迎に來よと御意なされ。乗物持せ待折しも。大雨やら雷最中。舟が着やら日暮やら。召ました櫓を目印に乗せましたと存じたが。扱は御寮人様は新町へと。地聞いて權藏高笑ひ。詞ハ、ハ、ハ、歷々といはれた淀屋の住宅。いつの間にやら揚屋に成たと。地嘲る詞に三太夫。詞此女は捨置て。お駒を早く迎へて來い。急げ／＼。アイ／＼とフシ足をはかりに走り行。地程もあらせず廓の吟助。駕に引添高調子。詞コレハ／＼太夫主は爰にじや／＼。サア／＼素と粹との受取渡し。地サア出やしやませうと明る戸に。ヤア父上も爰にじやと。出るお駒が。詞コレハ／＼あづま様も爰によふ寢てじや。一人お目の覺る迄寢さしまして下さんせ。内が扱大盡様の内といひ。我等も今日は草臥。勝手てちつと休ましよ。地よい時分におしらせと。駕籠引連て入る庭前。お駒は戸板怪しみなながらフシ知ぬふりして座に直る。詞コリ

ヤ／＼娘。夫なる權藏殿の家來を。そちが手にかけたと有る。覺が有らば様子を言へさ。アイけふ御田の歸りがけ。
 此吾妻様とお近付に成まして。互に心を打解て。あつちの事も私しが事も打明し。地あの物のしみ／＼と。お咄し
 申す折も折。詞あの者が無體の狼藉。おどしの爲の長刀が。急所に當るは此身の不運。まだそらに仁體な侍が。
 顔を隠してホ、ホ、侍の娘が手ざしに逢ひ。どう堪忍が成ませう。相手が死る上からは。覺悟は極みてをります
 る。殊に此身は安次郎様に去れたりや。生てゐる程恥の恥。地先立不孝は赦して。父が刀に手をかくる。權藏分入
 押留め。詞こなたが今死に迫。諸平が命生るても有るまい。ノウ三太夫殿。命を助て解死人に貰ひたいと申は詞の
 謎。高は拙者が女房に。アイや／＼さうは成まい。トへなせ。サレバサ。一旦安立安次郎へ契約したれ共。仔細
 有て他出の間。立歸る迄預るとの一言。スリヤお駒は殺す事もやる事もならぬといふのか。ソリヤ了簡が違ひ申す。
 此方は家來が敵。解死人は大法。是非受取ねばならぬお駒。死體を貰ふより。作り立た此容色。受取が互の爲。ノフ
 舅殿そふではないかと。地いへどいつかな返答も。始終の様子を宗兵衛が。とつくと聞てずつと出。詞コリヤ諸平殿
 かと立寄て。ヤア兩手の脉がモウ上つた。權藏様コリヤげし人を取らしやませにや成まい。笑止な事が出来ました。
 ガこちの庭へ持かけては迷惑じや。早う埒をなされませ。ヲ、サ望かゝつたお駒返事はどうじや。アイ返事は斯でこ
 ざんすと。地父が刀を拔放せば、フシ其手をとむる親子が争ひ。地ふつと吾妻が目も酒も。さめて驚此場の時宜。
 詞ヤアお駒様コリヤどぶじやへ。何故に死のじやへと。地抱きとむればさればいな。詞譯を咄せば長い事。どうでも
 生ては居られませぬ。地とめずと殺して／＼と。いふに吾妻も、フシおろく涙。地折角心を明し合。姉妹の盃して。
 お前の心にあやかる様にと。取かへて着た此襦。詞サイナ。わたしも又吾妻様の。怪氣妬もない心を。あやからして
 下さんせと。此様に襦を。無心申して着てゐた故。地暗がりでは有雨はふる雷がこはいやら。思はず知す取違
 へ。わしや廊とやらへ往ました。詞ほんにそふでござんせう。わたしも爰へ來た事は。酒に酔てしらなんだ。わたし

も。おまへも此あづまが櫓を召た故。取違へたもお互に。心と心が合たのか。サア申し恥しいは吾妻様。地君傾城といふ者は。うはべ計を着飾て。殿御をだますの何のとて世の噂には引かへて。辰五郎様への深切さ。ほんに女子のよい手本。此櫓を此儘に。お姫様へ土産にして。お前の噂せう物と。楽しんで居た物が。思ひ寄ぬ災難で。わしや今爰て死ぬはいのう。詞とく様跡で此通。姫君様へ傳へてたべ。地死る身は厭はね共。残り多いはあづま様。たつた一人のとく様と。折角こがれた安次郎様。お顔も見ずに別れるのが。悲しいわいのと伏轉び。敷けばあづまもむせび入。今別るゝと知るならば。けふの仰はせまい物。ひよんな事が出来ましたと。誠々を明し合つたふ涙は終箔の模様。付し草花に。フシ露置添る風情なり。地機隔て。辰五郎。母の小庵も心根を思ひやりたる友涙。黙して居たる三太夫。思案極めて立上り。詞左程覺悟極たからは。此親が手にかけてと。地刀するりと拔放せば。マアく待てと留むる吾妻。イヤく放せとせり合あひの廊下口。詞三太夫殿暫くと。地聲をかけてつゝと寄。持たる刀を止むれば。詞ヤアあなたは安立。ほんにお前はお安次郎様。爰にどうしてござんした。おまめな顔見て嬉しやと。詞悦ぶお駒に目もやらず。詞久しう候三太夫殿。一別以來捜せ共いまだ廻り逢ざる故。此奥座敷に逗留し。仔細残らず承知せり。先々刀を納られよと。地ちつ共動ぜぬ其有様。權藏はせむら笑ひ。詞ハ、ハ、宿なしの素浪人何を知て。解死人のお駒が命首にして受取と。地刀拔手を扇ておさへ。詞最前よりの様子委しく承つた。僅の疵に命を失ふ御家來武士の祿を食みながら。兵法不鍛練の誤りから命を落すは一ツ。二ツには女に手をさす誤り。いづれの道にも死損く。死骸を持てお往きやれと。地言れてちつ共ひるまぬ權藏。詞ヤア四も五も入らぬお駒こちへと引立てるを。地コハ狼藉と安次郎。刀拔持りうくく。打すへられて眞倒。庭へどつさりころくく。コリヤどう仕やると宗兵衛が。立寄腕首しめ上られ。詞アイタ、ハ、ハ。ハテばたく羽たゞきせまい。身は此内にかくまはれ。恩有荒屋の庭前に。見苦しきあの死骸。われよりは先お手代殿無難に事を納る筈。イヤハヤ龜相千萬と。嘲りながら突飛し。庭におり立戸

目通に直し置。地三太夫座を改持參の箱の蓋取て。巾紗に包金の雌押並べ。詞抑此番の鶏といつば。其濫觴を尋るに。天竺の月蓋長者佛に三世の誓をこめ。彌陀三尊の尊容を鑄奉る。其餘る所の黄金を以て。雌雄の二ツを鑄させ。鳥佛師が作と號け。長者夫婦が祕藏とかや。此鶏のふしぎといふは。金の最上。印子を以て作りし故。人の害悪怪をしらす事第一の奇特と聞。いつの比か日本に渡り。太閤久吉公の寶と成。文祿年中此家の先祖與茂四郎殿。伏見の城において人に勝れし功有しを。久吉公御感の餘り。雄の方を下されたり。中將家には代々雌を所持せられ。此度の縁邊に取かはすべく主人が望。雄の箱を改只今引かへ申べしと。地指圖に隨ひ蓋取て。開く巾紗のコへいかに。ずつしり重いし扛秤の錘。詞鶏がないコリヤどうじやと。地驚き騒辰五郎小庵も恠り人々も。口を明たるフシ箱の内忙て暫し詞もなし。地宗兵衛がけてん顔。詞サア〜大事が起つたと。いふに噂助。詞申〜其鶏は慥に見たと。地聞て宗兵衛。そりやどこで。サア見た所は住吉の松の中。エ、何をきよろ〜。大切な鶏が松原に有てよい物か。ハテ跡を聞しやませ。辰様のお供して。難波やでの居續。二日酔の術なさに。松の中の燈籠の。臺石を枕にして。寢る共なしに寢た内に。私の人魂がついと飛であるいたげな。夢の内に金の山へ登る〜と。思ふたりや。そうではなうて金の鶏でござりました。傍に居た蜘蛛めが。ゆすり起してかう〜じやと。彼人魂の呪歌。其中に夜が明て難波屋へ往ましたと。地いふに皆々。詞シテ其跡はいつ比の事で有しぞ。アイ今朝の事でござります。どうやら餘りうまい夢。何でも今一度いて見よと。寢てゐた所へ往て見れば。石燈籠のつひ際の。砂の中に書た物は見やしやませと。地紙入から取出すは合羽の破れ。辰五郎手に取て何やら書てと押ひらき。詞何々金の鶏。當住吉の土中より掘出し候故。暫借用致し候以上。持主殿へ預り主。書判迄。コリヤ地どうじやと。フシ又恠りを重ねける。地宗兵衛も忙た顔。詞噂助出かした。何でも詮議のよい手が〜。した之餘り外ても有まい。得知ぬ者が此内へ入込て物欲い儘には。イヤモウ活者に油斷がならぬと。フシ耳こすり。地安次郎は最前より。諸手を組てひかへしが。詞ハ、

ハ、身も浪人の掛人疑ひも尤ながら。今あの者が詞には今朝の事といふ。此安次郎けさに限り。他致した覚もなし。明日は此家を出立つと思へ共。疑ひ受ては氣の毒と。地有合硯引寄て。合羽の書面の文言を。さら／＼と書寫し。詞辰五郎殿は見られよ。此書面は老筆と見へ申せば。お疑ひは晴ませう。併二腰を帶する身が疑受。此儘にも濟されず。此書面を目印に。雲の裏水の底迄も詮議して。追付吉左右おしらせ申そふ。此間の心遣ひ過分／＼と。地合羽をたゝんで懷申しッシ立上れば。地辰五郎暫しととめ。詞お望有身の御出立とどめ申すも本意にあらず。せめて路金の用意をと。地母の小庵が立んとするを。宗兵衛はかぶり振り。詞お屋敷方の御用達いつ何時も知ませぬ。有餘つて有金でも。敵尋に出る人に。いつ戻らやら知もせぬ。費な役には。ア、いや／＼お心ざしは千倍／＼。かたの如く用意も有は申受た同然。忝しと一禮述べ。ナウ三太夫殿。聞捨がたきは御縁邊。鶏の有家知る迄暫して日延は。いかにも／＼。其義は我をよい様に。主人の手前は計らひ申。氣遣有るな。ハそれ承はれば身も安堵。したが古人の詞にも。牝鶏あしたする時は。必家に災とナ。獅子身中に大毒有。辰五郎殿隨分心を付られよと。地宗兵衛を尻目にかけ。ッシ庭へおりしも奥の間に。お駒が聞走付り出。わたしも一所に行たいと慕ふ涙を三太夫。なだめすかして制する中。小庵はあづまを呼出して。夜明ぬ内に新町へ。返す／＼も中ようして。アイ／＼／＼お前も隨分おわもじなふ。詞お駒様おさらばへ。あづま様いなしやんすか。地又の逢瀬はいつか又。名残をしやと引とめる。袖の留木のかほよ花。姿も似たり花あやめ。互に心置土産。さらば／＼の暇乞。點く申を噂助。駕を呼寄打乗て。跡に引添急ぎ行。心靜に安次郎。早お暇と立出る三太夫呼返し。重親父安立安隆の。敵討の門出に。錢別せんと聲を掛け地はつしと打たる手裏劍の。小柄を扇に受留ながら。詞コリヤ某に意趣有てか。イヤ／＼其手際を見やう爲。小栗判官兼氏の忠臣。大星殿の劍術の。奥義を受たる扇の氣轉。打かけし小柄こそ。後藤祐乗が千足猪。來國次の其小刀。心覺の折紙附。路金の用意。ハ、三太夫殿お志。禮には及ばぬ早ござれ。おさらばさらばと別れ行。

天満老松町の段

地常盤なる。フシ老松町に。住て住。淀屋の手代新七が妻のおつるは賃綿の手馴ぬ業も初世帯。そよ吹風に表口。地明て五ツの新松が。一人遊びのやんまひやう。こち返りや。そつちにも水がない。フシ水さへ暑き日盛に。おちよぼからげの伏見笠。軒端くを見廻して。コレくそこな子。調アノ淀屋の新七といふは此邊てはござらぬか。知てなら教へてたも。ムウ其淀屋の新七といふはとく様じや。こな様どつからごんしたえ。ム、新七の息子か。ヤレヤレ嬉しや。京の長次郎といふ伯父が來たと案内仕や。そんなら爰じやござんせと。地内へ這入もつばかは。コレか。調京から長次郎様といふ伯父様がござんしたぞや。ヤレく是はお珍らしい。お暑い時分にようこそと。地あふぐ小山のうちは同士の遠慮も。フシ打くつろぎ。調終に逢ねど聞及んだ身嫁のおつる殿とはこな様か。私は鹽の長次郎といふて。新七が爲には兄でござる。今は伏見の砂川に飯綱つかふたり品玉の茶碗計て朝夕仕廻。是がほんの喰ず貧樂。ちひさい時から新七も私も別れく居ましたが。漸々去年廻り逢様子を聞けば新七は。淀屋殿に手代奉公。妻子も有ると聞いた故。いづそは下つてしみくこな様にも逢ふし。甥の新松が顔も見たいと。思ふた計で貧乏隙なし。今度急用で下つた故。序ながらの入部入。地土産といふも恥しけれど。深草の名物團。夫婦の衆へ一木宛。調次に伏見の番椒。辛うはなけれど煮染て置ば。つまり肴にだんない物。イヤコリヤ坊主よ。そちへの土産は何とよいか深草焼の此牛。何ぼ大坂に虎屋饅頭は有ても。こんな細工の焼物はござらぬ。そして右向の牛は富貴するといふ程に。此牛の寝た程金設して。おもやの淀屋殿にあやかれ。テモ新七によう似た事はい。いかい氣もせて有ふ。イエモウわたしが手一ツで打たり舞たり。殊にきついわんぱく太郎手に合ふこつちやござりませぬ。コレ伯父様にお禮申しや。イエモウ縁はふしぎな物。地新七様にふと馴染。間もなう此子を説てから。お世話でこうしてをり

ますが。明暮お前のお噂計。詞幸ひ主もいつぞやから。内へ戻つて居られますが。今朝とうから出られまして。モウ追付歸られませう。地何はなくとも御晝でもと立んとすれば。詞ア、何にも構ふてくだんすな。私が今度下つたは此中桂元格様といふお醫者から御狀を下され。明日は川口の瑞軒山の邊で。旦那衆が芝居事の慰が有。元格様の思ひ付て此長次郎が品玉や。手づまをお目にかけたい程に早々下れと有る故に。何でもしてこい金設と。夕ア夜船で下りがけ。噂を聞ば瑞軒山で芝居事をなさるゝは。淀屋の辰五郎様じやと聞た故。定めし新七も行かれふさかいで委い様子も聞たさに。地新七の戻りやる迄。待て居るも陰費。詞是から私は元格様の所へいて。戻りによろといふて下され。あつちへいたら定めし馳走。爰な馳走は預けます。地そんなら必お歸りに。詞ヤレ、暑いに御苦勞様や。イヤモウ何も錢まうけ。坊よ行てこうさらばよと。地言捨て。フシこそ出て行。地跡見送りにテモ扱も。詞主とは違ふて氣輕なお方。夫はそうと新七様。地此マア遅い事はいのと。見やる内にもふらりと居眠る新松抱き上。やんまに釣れて草臥たか。ドレ、寝さしてやりませうねんねこくくの。聲もなまめく暖簾の。フシ奥床しくも入る跡へ。地木々に啼。フシ蟬の羽衣肌薄き單羽織に編笠も深き忠義に新七が。フシ思案有げに立歸る。地跡より道具や傳兵衛が申しくと聲かけて。詞是は新七様。只今お前へ參る所。よい所で御意得ました。いか様は幸ひ。サアお這入と。フシ内へ伴ひ。詞呼にしんげた用事といふは指料の此脇指。昔作りて氣に入ぬ故いつそ仕換て仕廻たいが。マア何程に取らしやる見て下されと指出す。地一腰取て打ながめ目釘こちく打はづし。詞テモ錆たは。此身はどうやらよさそうにござれ共。私等が見ては二束三文。身は此儘にお留なされ。柄廻り鏝ぐるめ。お氣に入らずは私が申受たうござります。地外様ではなし大事のお出入。詞しやんきり只今二十兩何とよい直てござりませうが。イヤイヤ夫ては放されぬ。三十兩と思へ共。マア五兩買つしやれ。何の如在申ませう。其かはり何成とお目にとまつた小道具を。小利口にして差上ましよ。是て少々おかげを蒙らにや立ませぬと。地拜倒しの口車。そんならぽんと負て

やらうと。大氣に見せるも下心。入いて叶はぬ急用の金に詰りし切羽際。柄と此身の別坂。後にぞ思ひ白露の。汗手拭でぐる／＼巻。フシ簞箒へ投込。詞ヤレ嬉しや氣に入ぬ物拂ふたら氣がさつぱり。イエモウ私も大慶と。地小道具包懷中し然らばお暇申ましょ。御金は夫に。ヲ、御太儀。御用もあらば重と。フシ小腰かゝめて立歸る。地程なく表へ歩みくる用有けたる深編笠。前後を窺ひ立休らひ。内を覗いて手をた／＼けば。新七邊を見廻して立出れば小聲になり。詞此間御頼の一義。今日迄に残らず調ひ。書付是にと懷中より。地一通渡せばさら／＼と讀より早く卷納め地段々のお世話御苦勞千萬。入用金四十兩の内。當分是に廿兩。お渡し申すと指出し。残り廿兩は晩方いつもの葦屋へ持參致し。其節萬事の相談。然らば夕方御意得ませうおさらば。フシさらばと別れ行。地跡には何か新七が。工夫をこらす表口。歌かはい男に逢坂の關よりつらい世の習ひ。詞ホウ徳市か。ようこそ／＼。そうおつしやるは新七様何やら私に。イヤモウさしての用でもないが。マア／＼這入りやと内に入れ。地爰へ／＼と手を取て膝と膝とをフシ押ならべ。詞奴頼たい用事といふは。此中内分に入用有て去人に金卅兩程借用したが今日中に返す約束。所がおもやが取込で。けふのふり合が出来にくいといふて先も義理の金。つひ斷も言にくい。そこで貴様に頼むといふは。おもやの御隠居小庵様に成て挨拶がして貰ひたい。ハテせりふの高は。此小庵が吞込で居る程に。マア十日程待つてやらしやれ。若新七が濟さずは。こちの勘定場で渡そうとつひ一口いふてたもれば。忽埒の明事じや。地是非に頼と壓狀ずくめ。夫はお安い事ながら。詞先の相手がてつきりと。小庵様を知てをりませうがな。ハテ譯もない、いかな／＼内にござれば奥住居。花見遊山も乗物でなければござらぬ故。小庵様といふは男じややら女じややら世間に知た者がない。ムウそりやマアそうもござりませうが。小庵様は私が様に盲人ではあるまいがな。サ夫も工面して置た。東の町の立木勘藏が所て。細工の目を買て來た。コレ／＼是じやいらふて見や。コリヤ水晶でした物じやが。がんちなどに片目入ると。忽兩眼日月の如く。本の目よりは景氣がよい。是を貴様の目にはめて。旦那の讓の茶縮緬の此羽

織。是を着てのつしりと。物言身振を溫和にやりかけ高上によつてたも。地是を首尾よう仕課せたら。官上りの一番帳じや。詞エ、コリヤ忝ない吞込ました。そこらはぬかる者じやない。仕内を追付お目にかける。地そんならそろそろやりかけふ。アレ／＼あれへ見るが。モウさうじやと羽織打着せむりやりに頭おさへて座に直し。さあらぬ顔して待居たる。地程なく來かゝる件の金貨錢屋の銀助。額の皺より延したる縮緬羽織。かざす扇の夕日かげ。ずつと這入ば新七が能こそお出。こなたへ／＼と。慇懃めける挨拶は。フシいはねど借人と見へにける。詞イヤコレ新七殿先達て用に立た金子卅兩。四五日前にも利足揃へ。忝ないと持て見へねばならぬ筈。但しは淀屋風吹して。わしに足を引すのか。顔に似合ぬ仕方の悪いおさんでは有るはいの。サア／＼其金受取ましょ。地さり／＼渡してやらしんし。詞ア、いかにも／＼。御尤イヤモウ早速持參致そうと心では存じながら。おもやも此間は西國北國の御大名へ。八千八百八十八萬兩といふ先納を包ます故。殊の外の取込。夫故今日の所を。今十日程御用拾に。ム待てくれいといはんすのかそりやマアならぬ。義定した日切の金。身の皮はいでも。取ずに行んでは口が干あがる。金貨仲間てしあんぼの棟梁。鬼神の銀助と呼れた此男。爪に火を燈す様にして設溜た金銀を。こな様達の榮耀遺ひにあてがふ事は。コレ成やせぬ。サア／＼しなされ受取ふと。中々聞ぬ。フシ挨拶に。地徳市そろ／＼身繕ひ。さらば役目が廻つたとせりふ繰出す咳拂ひ。詞ムウ何か。其元は少々の端金を受つしやる。銀助殿といふのか。お近付に成ましょ。手前は定て音にも聞つしやらふ。金銀米錢山の如く。何くらからぬ淀屋の隠居。アイ慮外ながら小庵でござんす。ア、扱はお前が小庵様。初てお目にかゝりました。ムスリヤ其元は小庵を見しらずか。イヤモウ今が初てござります。そふも有らう／＼。ア、ついでに辰五郎がお目にかけたい。マア私に似て目のほりがよい。あれでは吾妻が思ひ付たも無理ではござらぬ。扱と。新七が申通り。おもやも此中はきつい取込。あまた手代共もござれど。新歌の稽古イヤ辨天講の。或は嫁入年忌法事。せがみあるくに隙がござらぬ。そこで新七も金の才覺成にくければ。詞思はざりしに身の恥

辱。そこを貴様が二王門の様に、つゝばつて。狸くすべる様に言しやつても今は野中の二ツ水。濟ぬ金をば中にも暫し。すむは由縁の此小庵。但し貴様は此金を待がつらいか煙がういか。兎角浮世は銀助殿よ。和らぎ給へ。詞ア、いまくしい何の事じや。くらいどれの隠居にや構はぬ。サア、新七金受取ふ。地渡せくと。フシせり立れば。詞ヤアわりや大事の御隠居様をくらひどれとは何ていふた。そふじや新七聞所じや。まだ一ばいも呑ぬ中に。くらひどれと言れては淀屋の隠居が立ぬ。イヤ此新七も立ませぬ。何て隠居に口過した。ヤアしやらくさいどう街。卅兩の金渡せ。サア渡さぬかと新七が。胸ぐら取ば徳市が。詞ヤアさせぬはと腕まくり。擲かゝれば銀助がかはすもしらず新七を。びつしやりげんのみコリヤ已じや。何しやがると徳市を取て投れば銀助が。地あためんどいと突飛す。拍子に入目が。フシ拔落れば。地銀助取上ヤア是は。詞扱こそ儂まいす者。贗盲目じやない贗目明じや。コリヤ新七。わりや銀助をくはんだ仕事にかけたぞよ。地モウ了簡かと兩人が。胸ぐら取てフシふり廻せば。地マア、待と一問より女房おつるは走出。三人を引分、中に立。詞イヤこれ金貨の銀助様。卅兩の金渡しませふ。アノこな様が。ア私が今爰で済ませう。したが預り手形が有かへ。ハテ金貨を商賣にして居る者が證文とらいて能物か。イ、ヤ預り手形じやござんすまい。ソリヤ勤奉公の證文爰へ出さんせ。直々に奉公人が判致しませふ。ヤア、何といはんすイヤお前は金貨とは偽り。島原の傾城屋様で有ふがなと。地いふに銀助新七も。フシ悔りしたる風情なり。地おつるは其偽新七が。胸ぐら取て下に引すへ。詞新七様。聞へませぬ。子迄なしたる夫婦中。なぜ此わしを隔ては下さんす。私も昔は新町で百夜といふた引舟。多くの人に付逢て。人の風俗物ごしを知まいと思ふてか。爪に火を燈す金貨様が。黒縮緬の長羽織緋羅紗の腰さげ。其上古町に住お方が。どうなんせかふなんせ。どうさしんせは聞馴た。京の島原の物いひ。ア、合點が行かぬと思ふた故。坊を添乳の其中にも。地心ならぬはお前の身の上。ほんに今迄わる遣ひ。色狂ろは擬置。紙一枚粗末にせぬ。親方思ひのお前様。よく手詰の金でがな。無氣苦勞に思はんしよと。添

乳の袂の濡る程。わたしやコレ泣いて、フシ計をりました。地わけて不思議は爰へ来て。足かけ五年が其間。四ツを限りに行んだお方。二月餘り以來は此内に晝夜の居續どうやら心にかゝれ共。子中なしてけふが日迄。親子三人添臥して。寒山寺の鐘聞といふは。珍らしいやら嬉しいやら。言出し兼たお身の上。左程詰らぬ品に成。入いて叶はぬ金ならば。なぜ打明て此わたしに。勤をせいとはおつしやらぬ。詞三人ぐるの狂言で義理詰にして女房に。勤をさそうといふ様な。水くさい氣がわしや悲しい。地譬此身はくづおれても。お前に世話をかけまいと。何着たい共。ついいしか言ぬ辛抱が。お前の目には見へなんだか。コレ申し新七様。胴慾なお心とかぞへ上たる、フシ眞實の恨涙に新七が。何と詞もないじやくり。涙商ふ女郎屋も。袖にとくく徳市が。入目もフシぬるゝ計なり。地新七漸涙をおさへ。詞いかにも道理尤じや。何を隠そう先々月。番頭宗兵衛がわんさんにて。淀屋の家を追出された。是といふも辰五郎様。餘りお身持放埒故。段々御異見を申したれば。金言耳に逆ふとやら。追出されるのみならずお出入迄を止られたれ共。そなたに言ふて苦にさすが氣の毒さに。けふ迄は隠して居た。しりやる通りおれが事は。お過なされた親且那のお氣に入。夫故度々廊のお供に行て。其節をそなたにふと馴染。縁でがな今は是子迄有る夫婦中。地淀屋の手代て候と人にもしられた新七が。かう言ふ貧しい住居をさすも。主人の内の塵一本。おのれ我身に付まいと。奉公大事に思ふ故。節季のあてがひも。嘸や不自由と思へ共。其顔もせずしんまくに終に仕付ぬ貧爲業。餘所の手代の妾衆は。女婢下男。さも花やかに着飾て。芝居の初日花見遊山。樂しみ暮す人も有るに。夫羨しい共思はずに。アノわんばくな小坊主抱。達者な身でも有事か。つかへの上に復帶して。日がな一日あつたふた。艱難苦勞の仕飽さす。其女房に何とマア。勤奉公してたと。夫の口から言れうか。詞夫故かうした排事。金の入はも主人辰五郎様へ忠義。コレ手を合す堪忍しや。不運な夫に連添たが前生からの因果じやと。思ひ諦めちつとの内。地勤てたもといふ聲も涙にかゝる、フシ水無月の。胸に氷室や解ぬらん。地有合ふ人も俱泣の。中に徳市目をこすり。詞私はほんばに借錢の。

斷いふのと思ふた故。身につまされて御隠居役。首尾ようやらうと思ふたに。お子迄はおつる様を。アノ島原の勤とは夢見た様な貰ひ泣。ア、お道理じや悲しかろ。お茶でも一ツ上たいと。地間に女郎屋立上り。壺の一杓染付の。地茶碗に汲も見ずしらず。お慮外ながらわたしへとおつるが取てフシ一口呑み。詞コレ新七様さします。死別する時は水盃をするとやら。此世に居ると思ふてはな。夫有身が何とマア。人に肌身が觸られふ。死だと思ふて下さんせ。スリアあの勤してたもるか。ヘテ何いふもお前が大切。新七様モウ新松には逢ますまい。常々あの子はいねが悪い程に。アノ氣を付て下さんせ。何かに付てお前のお世話。申し灸でもすへて随分と。養生して下さんせ。煩はしやんすりやあの子も難儀。酒でもあがつて苦にせぬ様にコレ申。きなくと女の様に。私しやナ。アノ廊は氣が晴て。アノ氣が晴て面白いと。泣ぬ顔する心根を。思ひ廻してハ、わつと涙盡せぬ折からに。詞サアく駕が参りました。一番舟がモウ出ますと。地いふに銀助心得て。年季は二年。身の代は三十兩に極の證文。是に御判と指出せば。夫婦が俱に印判をおしの片羽のとぼくと。子に迷ひ行。フシ小夜千鳥。詞サアく旦那判がすんだら乗ましてと。泣入おつるをむりやりに。世朝鰯の鳥かねを今ぞ別れと思ひ子の。新松ふつと目を覺し。かゝ様わしも行きたいと。わつとなく子を徳市がありや灸じやく灸すへにと抱しめて止むる涙。ゆく涙。残る涙の身の代も。露の形見と取上て。見送り見かへり三重別れ行。

瑞見山飯綱の段

地宗兵衛松兵衛手を合せ。詞ノウ大蛇様御免く。地助給へと泣叫べ。元格はふるひ聲。詞かう大蛇が見入ては辻もこちらが命が危い。物體此海上で鮫や鱈の見入には。めかくが大事の物を。海へ投ると忽に。かやうの難を遁るゝよし。拙者は此比法界寺の開帳で。受て來た地藏様の御守。龍王へ祈の爲と投込。地松兵衛同く守より。二

月堂の牛王を取り出し、フシ投入れば、地宗兵衛は只夢現。おれは佛嫌ひ故。牛王も守も有にこそ。大事の物は此紙入小判や一步も入て有ど。此命にはかへられぬ。なむ大蛇様助てたべと。地件の紙入投込ば。ふしぎや大蛇はよわくと。汐に連て、フシ跡ずさり。調扱こそ奇特が顯はれた。此間に舟を漕退よ。地船頭楫子と三人が。聲をばかりに呼はり。調アコりやどうじや。此舟には船頭も居ず、船かいもない。ハテめんようなと三人が。地忙る中にも、元格が詞ハテ埒もない二人の衆。是はほんまの海ではないわいの。ほんにいか様そふじや。最前鹽の長次郎が。此座敷を海にして見せうといふて。樹木の蔭へはいつたが。忽こんな海になつた。大蛇がこはさに氣を取れて跡も先も忘れてのけた。ヤレ、こはい目に逢ふた。サア、元の座敷にして。飯綱事おいてくれ。長次郎頼むと三人が。誤り入ばど共なく。柏手ばし、聞ゆれば。大海忽ひかたとなり庭の夏草三重おひ茂る。地瑞見山の邊なる。照月庵の一構。渡海作りと見へたるは衣裳入たる車長持。三人つく、其上に。是はと忙果。フシ夢の覺たる風情なり。地宗兵衛はむくりをにやし。詞エ、埒もない元格殿。鹽の長次郎が飯綱を見せふと。京三界から取寄て是が何の氣慰。こちらをいらふて遊ぶのか。地あたけたいなと呟けば、元格不首尾の天窓をかき。詞何を致すも若旦那辰五郎様へのお慰。御機嫌直しに何なりと品をかねてお目につけふ。ヤア長次郎と。地呼れてはつと木影より。羽織袴も慇懃に放下師めかぬ取廻し。松兵衛見るより眼をむき出し。詞いかに飯綱の法じやとて。爰ら邊を海にして。こちらを大蛇に吞そうとは大それた工事。今の大蛇はどうしたと。地まだ半分は夢心地。長次郎くつ、吹出し。詞大蛇の正體お目につけふ。噲助殿と。地よべば傍の下家より。テンテレツクテン。ヒツイヒヤリヒウヤラリと口笛の。拍子に乗て、フシかけ出れば。地三人驚き。詞スリヤさつきの大蛇と見えしは噲助か。いかにも長次郎のいひ付て。大蛇の頭は裂地の重箱。紅の舌と見へしは重かけの紅縮緬。跡へ續し胴體はあづま様の青海纒。金入の此帶我等が所作は此通。頭と尾とをかう持て。テンテレツクテン。ヒウヒヤリヒウヤラリ。つゝと寄たらお前方が。色青ざめてがち

御仁體な顔付で。なむ大蛇様ははねましたと。地いはれて三人まじめ顔。詞そなら最前投込だ三色の物はどこに有る。夫は残らず此方にと。地袖より出し三人へ。渡せば受取る宗兵衛は。紙入の中改め見て。負惜みする減らず口。詞いか様辻放下の目くらまし。あんな事して能いはづみに何に寄らず上おると。地悪口すれば長次郎。詞イヤ淀屋のお手代殿。此長次郎も古は武士の食もかちつた者。放下こそすれ芥子程も盗根生はさげませぬ元來飯綱をつかふ者は吃枳尼天の法を行ひ。欲氣が有ては勤まらぬ。御自分達の身に過だお主の金で榮耀すりや。天地の大蛇に見入られ日月の脚にかゝる。異見の爲して見せた。小盗するとは誰が事と。地呪付たる勢ひに氣を奪はれてもじくと。手持ぶさたをくろめる元格。詞ア、腹立て見せるのも長次郎が飯綱の業。此元格が取持で。辰五郎様へお目見へさそ。いか様爰は喰助が。貰ふといふも飯綱の業。サアくわつさり酒にして。辰様へお目見へと。地いふに長次郎ア、イヤ。詞拙者はちと叶はぬ用事。後刻お目見へ致しませう。辰五郎様へよい様に。地お取なしをと元格に。暇乞して長次郎はフシ旅宿をさして立歸る。地折から庭の飛石傳ひ中居禿が走り來て。詞お三人様へ辰五郎様のおしやりんす。島の内や新町の女郎衆や役者衆が。皆見物に見へました。モウ始めふかとおつしやつてじや。おつと合點呑ただ。モウ口上をいはさせますと若旦那にいふておじや。サアく喰助口上いひ。地おつと爰にとフシ連出れば。詞よし。役人揃ふた皆を装束くと。地樂屋へ打連入る跡に。調子はり上口上も。爰を晴とぞ見へにける。詞とうざい。擬此所は諸人一代道中記の段を淀屋辰五郎いばら木屋吾妻。兩人にて相勤めます。則ち道中記の義は瑞見山を正道山五常の峯になぞらへ。名所くを立札にしるし置。此間を道行の文句に綴り。則ち太夫は。淀屋宗太夫ワキ同じく松太夫三味線九の喰助。七墓廻の修行者に桂元格。其外付添相勤まする様にござります。彌此所が淀屋辰五郎。いばら木屋吾妻。正道山五常の峯より心中谷迄の道行。さやうに御らうじませ。

諸人一代道中記

ふし事

臨聞説行路難は山にあらず海にあらず。人間反覆の間に有とかや。聲を爰に引弓の。矢たけ心もいつしかに結ぶ妹脊の山高き。五常の峯はいづく共。羅衣錦繡の空薫に。踏迷ひ行六ツの辻。學問堂に夜を照す。雪や螢もかげ消て。鼓が瀧や謠ひ橋。舞の袂も花やかに。色取越に名を流す傾城が原衆道坂。フシこの手柏の裏表。誹諸門の摺物は。色や仲居にぜいたく橋。夜あるき川の流ては。浮む瀬もなき十五塚。鐵火が原の。付合も戀故沈む欲が淵。末は思ひの久離坂。宿なし橋にすむ月も。我身の秋や。フシ照すらん。詞申しく。アノ辰五郎様やあづま様のおしやりんす。其様な堅い淨瑠理では道行がどうも出られぬ程に。國太夫ぶして語りなんせといな。地早いこつちやと言捨て。フシ禿はびんしやん走行。詞そんなら松兵衛。口上から言直さど成まい。ヲツト合點じや。東西ノ。サテ此所は彌辰五郎あづま道行の段でござりますす淨瑠理は則ち宮古路國太夫ぶし。兩吟にて相動まする様にござりますす。

道行若葉裳

宮古路國太夫ぶし

地月と花とは同じ詠ても夜半とあしたのふた思ひ。寢ても覺ても忘れぬ。寢亂髪を其儘の。あづまを先に辰五郎が。手を取かはす妹脊鳥。いとしかはいの諸はがい互に見せつ見せられつ。姿のあやめ杜若はんにふたりが此中。どうしたきてふな神様が。結ばしやんした縁じややら。まだ突出しの其夜からふと逢初し床の内。かはひらしいと思ふ程いつそ何にも得言ずに。お前の帯に手をかけて。私しが解た肌と肌。じつとしめたらソレお前が。ほんの事なら嬉しいと其一言が身にしみく。それから今日の今迄も。逢ぬ日迎はなけれ共。只氣がかりは移り氣な。餘所の女中に殺生な。苦をさせまして下んすなと。恨交りに寄添ば。詞男の心は川の瀬といふたは薄雪時代の事。身を打客は多

けれど。客故女郎の紙子着たは。神武以來聞ぬ。アレまだあんな無理計り。地いつたいお前は八幡から。アノ言號の奥様が有るといふ事知ながら。譬まゝたき水汲の。みづし奉公に身をさげても。お傍に居たいと思ふ故。倍氣する氣はなけれ共主よ。夫よと得いはずに。一生日かげの身じや物と。何ぼ心で諦ても。便ないやははかないやら。私しが胸の悲しさを推量して。下さんせ。詞何くどくとよしない案じ。女護の島へ吹流され。女の肌まぶれても。地深いと人に言れたる。浮名に義理も有る物を。愚痴なくと戯れも。フシ目の關に隔られ。袖をかざしの道芝や。裳はらくしどけなく。かう手を引て行ふなら何の恨も夏草の枯果る共二世三世生れ替りて此様にくりくるくる輪廻の車。やどり争ふ夕鳥。若葉がくれにちらく。沖の帆影や入日かげ。あすのうき身を今日爰に。長き仇名の捨所。心中谷にぞ着にけり。詞イヤ申し辰五郎様。お前のお手に掛つて死れば。何にも思ひ残す事はない。お前は何ぞ心残りはないかいな。地イヤ最うさして心残な事もないが。禿の金彌が水揚を。人手にかけるが残念く。地エ、悪性な憎てらしいと。フシ倍氣交りのせりふの中。地鉦ちやんくと修行者が。詞ヤア心中見付たくと。地走寄ば辰五郎。詞是は元格悪い間じや。愁のせりふも言さずに。ほんに氣疎いとちり様と。地三人笑ふが仕組の果口。引舟禿は走り出汗を巾やら扇くやら。宗兵衛松兵衛立寄て。詞去とは出来たけうとい。若旦那の所作事元格殿の悪身。わけて吾妻様見事て有たと。地いふに吾妻はヲ、笑止。詞わしやもう随分笑ふまいと思ふた故。練物に出た時より。暑いめをしたはいなア。イヤもうきつい御苦勞じや。サア若旦那打ませう。しやんく最一ツせいしやんしやん。祝ふて三度しやんしのしやん。地わつとフシ騒の最中へ。地仲居がいそく走り出。詞申しアノ見物の内から道頓堀の役者衆。藤田靱負様といふ女形が。辰五郎様にお目に掛りたいと駕が是へ参りました。コリヤ面白い。サア飲るは。宗兵衛松兵衛呼にやりや。地ソレ吸物よ。盃よと浮立所へ駕昇居へ。フシ内より出る其姿。羽織は空色縮緬に。越後縮の桔梗島。大振袖の若衆方。元服天窓の紫帽子。能々見れば手代新七。ヤアコリヤどうじやと人々は。

フシ顔見合て忙居る。地宗兵衛はあざ笑ひ。詞ヤア珍らしい新七。旦那の内を勘當しられて。コリヤ又役者に成たな。但しは無心か泣事か。旦那のお目通へ叶はぬ。ヲ、松兵衛がつまみ出すと。地肩先取る手を突放せば。辰五郎膝を直し。詞ヤア我前て手向ひする慮外者。ア、イヤ、勿體ない。全く手向ひは致しませぬ。御意に違ひし此新七。お目通へ出まするは。憚りといふ事を存じての此形。地先一通聞てたべと手をつかへ。詞もと私はかぶき役者。藤田小平次が抱。藤田靱負と申す女形てござりました。所に親旦那與茂四郎様のおかげで。身受をなされ手代並の奉公。何が育が育なれば。算用算勘は存じませず。何一ツ御用に立て。御恩を送らふ様もござりませぬ。私が口から申すもいかどながら。律義一遍の役に立ず。其律義をお見込なされ。親旦那の御臨終の時お呼なされて。随分辰五郎が事を頼む。必人に笑はしてくれなと。仰られたお詞がぞつこん此身に浸込で。どうぞ御實體におとなしう。お家相續なさるゝ様にと。神參りしてもあなたの御身の事計り。地其奇特もなく不行義な御身持。御異見申せば御氣に逆らひ。終にはかやうに御勘當。御恩のお家へ足踏ならず。心にかゝるは御身持。閑餘所ながら承れば段々募る害の数々。最早湊屋も仕廻じやと。世間の噂を聞に付け。地情ないやら無念なやら。此新七は男泣に。泣て計りをりました。調淀屋のお家は太坂でも二軒とない家筋。もしもお家に疵が付ば。御先祖へ御不孝御身の恥辱。長ふとは申すまい。どうぞ今年一年。御身持を改めてたべ。御恩を受けて人と成た新七が。昔を忘れぬ此姿。地皆の目からは氣違共恥しらず共思しめさうが。何を申すも旦那が大切。此ふつゝかな此形でやつこ頭へ野郎帽子。かけた心にめんじられどうぞ御心入かへて。ヤレ辰五郎は害がやんだ。傾城狂ひもとまつたと世間の人に言れてたべ。コレ拜みますお情じや。お慈悲じや。慈悲じやと摺寄。むせぶ涙に忠臣の。鏡もくもるしんみの異見。理りせめて。哀なり。詞ヤアコリヤ新七のうそつきめ。左程大切に思ふ物が。なぜ町中へおれが事を惡品に言あるき。アノ金藏に年寄から封印を付さして。此おれに不自由をさしをる。皆是儻がした事じや。此中もアノ元格に家買てやらふと思や。封印で金が出されぬげな。

切角親が始末して溜て置れたあの金を。大事の廓で遣はずに。むぎ／＼家質や大名借に。蒔ちらそふ筈がない。間違ふた了簡で。粹と呼れる辰五郎に。異見立置てくれ。ナント吾妻そうじやないか。サアぐつ共いふて見いと。地しどなき詞に新七は。詞其お心故悪人共の讒言を誠になされ。此新七をお憎し。何のお前のお身持を悪品に申しましょ。是皆傍のわんざんと。地聞より宗兵衛むつと顔。詞わんざんいふとは誰が事じや。コリヤヤイ。儂がみそさどいの様。なちひさい根性に引競べて。何じや。旦那が奢らしやる。こちの旦那が一年に二萬兩や三萬兩遣はしやるは。こちとらが一ばい酒吞より軽い事じや。ごくにも立ぬおとが利ずと。足元の明い中きり／＼とせやがれ。誂イヤきりきりと往ぬまいわい。ア、いといは若旦那。何をいふてもうは氣盛。そこへ付込悪人共。あらゆる奢をすゝめ込。十兩入は百兩。百兩入は千兩にして内證は分取。夫御存じない榮耀育。コリヤ新七。内證で分取するとは此元格へ面當か。但しはこちとら二人が事か。其上旦那をぬけ作と言ぬ計りのぬかし。モウ堪忍袋の緒が切たと。地宗兵衛松兵衛兩方より。誂ぶちに掛るをはね飛ばせ。宗兵衛すかさず立かゝり。詞儂をぶつは旦那の御意じや。ム、旦那の御意とは。ヲ、旦那といふは此宗兵衛。おりや辰五郎が兄じやはい。誂ム、何と兄とは。ホ、様子有て親人が。番頭にして置れたれどおれは主筋。其旦那がぶつが何と。地首筋擲んで取て投。旦那の御意じやと松兵衛も踏つ躰つこな微塵。誂エ、無念なと宗兵衛に。擲掛れば。詞おのりや。是旦那に手向ひひろぐかと。誂いはれて儂松兵衛めと。取てかゝれば。詞おりや知ぬ。旦那の御意じや／＼はいと。誂言れてはつと身を投ふし。エ、口惜い無念なと。齒切きり／＼身をふるはし。何と詞も泣涙。フシ心の内ぞ不憫なり。詞モウ／＼よござる。元格が衣にめんじて了簡なされと。地能氣味顔の挨拶に。詞重て是に懲や上れ。サアうせあがると引立る。誂一間の内より女の聲。詞宗兵衛松兵衛マア待と。地とどむる聲は聞付し。慥に隠居小庵様。なむ三寶といふ中に。襖誂フシ押明立出る。傾城風のだて模様せける色目をしとやかに。フシくるわ姿の八文字。頭に似合め有様は。フシ様子有げに見へにける。地宗兵衛

松兵衛忙顔。詞ヤア是は隠居小庵様。其お妾はと立寄を。地有合杖のたわむ程。はつし〜と擲伏起上る宗兵衛が。胸ぐら取て引ずり引寄。詞ヤイ爰な慮外者め。何じや辰五郎が兄じや。サア兄じやによつて。兄といふたが何とした。イヤ儂はふとい奴じやなア。人聞悪い兄呼はり。新七始め吾妻殿も。一通り聞て下され。身の上語るもフシ取しながら。詞私も昔は新町で大坂屋の大部といはれし身。前與茂四郎殿に受出されて。程なく辰五郎を設てより。淀屋の家の奥様。姉。婢に傳れ。榮耀榮花の其中にも。地あの子一人を大切に夫婦が中の月花と。思ふに付て案じるは稚子の抱瘡。詞八幡守よ岸田堂よと。祈らぬ神も有るにこそ。ある時あの子が乳母が咄し。私が古郷津の國の西の宮近所に。産所村といふ在の天一といふは。抱瘡守の神様故。其一村は抱瘡が軽い。夫故其在の者と兄弟の盃すれば。地響海川隔ても。抱瘡輕ふ仕廻ふといふ。詞夫こそ幸ひそちが在所の。どれぞよさそうな男の子と。アノ辰五郎に兄弟の盃をさしてくれと。其座で直に頼んだれば。乳母が在所でせんさくして。連て来るはアノ宗兵衛。其時の名は三太郎。辰五郎よりも年かさなれば。兄にして兄弟の地盃。夫より程なく輕い抱瘡。テモ咒は有物と。アノ三太郎を不憫がり。詞假にも兄と號た者を。土かぢりはさゝれぬと。内へ引取幼少より。兄弟同前に育上。成人さして今では番頭。家内の仕置で候と。其我儘さどうらくさ。憎いやつじやと思へ共。地死れし主の遺言故。目をふさいで堪忍すれば。段々惡事に實が入て。眞な手代をいぢり出し。家内の者を味方に付。詞あの辰五郎をそゝり上。あらゆる害を勸込。淀屋の家を呑ふとする。思しらずの大惡人。女てこそ有左程の事。しらぬてはなれ共。何をいふても辰五郎が正體もなき心故。若あら立たらどの様な。仇をせうも知ぬ故。けふ迄は堪へて居た。詞此上から兄顔をしておつたら。其儘では置ぬぞよ。夫に引かへ新七の段々の忠節。嗚やそなたの思やろには。アノ放埒が目に見へぬか。母は異見もせぬかといやらぬ心が恥しい。コリヤヤイ辰五郎。今迄異見が言たうても。腹はかり物淀屋の家筋。我子ながら卑下をして。地の氏ない玉の興が。淀屋の家を退轉さすかと。勿體ない事ながら。今では昔受出された果報

がけつく。フシ恨めしい。地醫貧苦にせまつても夫悲しいとは思はねど。親の歎が天へ通じし思へばかばいかぬといふ。
 可愛さ餘つて此母が廿年着ぬ廓模樣尼に似合ぬ紅裏は。さんげの爲の此姿。辨へあらば聞分て。けふより心持直し母
 かかういふ傾城の。昔の名をば下さぬ様に。コレおとなしう成てたも。能子じややらいのと古への。恥を今身に着飾
 つて。子にぎりやます教訓は。わりなくも又哀なり。地始終を聞て辰五郎は夢の覺たる如くにて。調是迄度々新七が
 奢くと申したれど。何の是が奢な事と。思はずしらすの慰が。奢てかなござりませう。御赦なされて下さりませ
 と。地身を悔たるうき歎。あづまも俱に涙聲。母御様の御腹立は皆私から起つた事。モウ堪忍して上まして下さりませ
 せと手を合せ眞實見へたる涙なる地俱にしほる。新七も涙拂ふて手をつかへ。調若旦那おてかしなされた。其誤の
 お詞が。幾億萬の金にも。遙に増りし御身の寶。申し御隠居様。辰五郎様の御身持。モウお氣遣はござりませぬ。ヲ
 ヲ夫は嬉しうござる。そんなら是はあづま殿へ母が土産と。地指出す一通手に取上。調エ、是は。私が勤の年季證文。
 スリヤアノ母様此あづまは。ヲ、いかにも母が千兩で。身受はしたれど是は内證。八幡への聞えも有れば。廓通ひは
 ふつゝ無用と。地聞て二人は手を合せ。ア、冥加なき御情と。嬉し涙に新七が。母御様の御志。あだ疎にフシ思
 し召すな。調イヤモウ母が嬉しさも詞には盡されぬ。コリヤヤイ宗兵衛。新七も此母も。昔の姿で此様に。けふ爰へ
 入込だは。地言合さねど自然の誠。子を思ふ親心と。忠義に心を運ぶのは。か程に割符もあふ物か。調そちも三太の
 昔を忘れず。地義理と恩とを辨へて是から悪心ひるがへし。辰五郎大事に守立て。調松兵衛俱々淀屋の家を。繁昌さ
 して見せてたも。ナニ元格殿もおとなしう。此上は療治計りて出入をなされ又新七は此母が勸常赦して以前の通。勸定
 方の手代役。松兵衛宗兵衛兩人共言分は有るまいが。段々の不調法。千萬誤り入ましたと。地辰五郎始手をつけば。
 母は悦び。調ヲ、合點が行たか嬉しう。ハア此新七もおかけ故。御恩のお家に歸り花。サアくめてたいくと。
 地浪風立す此場をば。丸ふ納る發明は。ういめつらいめ功を経た。フシそれしやの果と見へにける。地折からいさせ

き九の噂助。表口より走り込。詞私は最前拔そして。徳やに吞てをりましたが。何やら詮議が有るといふて。侍衆が大勢爰へ見へますと。地聞より皆々うるたへ眼。新七表を打ながめ。詞アレ鐵棒の音がする。極めて是は此所で。人寄なされたお咎ならん。小庵様や辰五郎様は。足弱連て岸に有る。座舟に召まして。早ふくと氣をいらてば。地怪我なされなと引舟禿。あづまも俱に落しやり。詞サアマア是で落付た。そんならわしらも一所にと。地宗兵衛先へ進出すを。詞ア、コレどこへ。爰に居て言譯召れと。地言れて四人がかツち。フシうるたへ廻る其中に。捕た捕たと捕手の大勢。所の代官九條彌藤治。詞淀屋辰五郎は何れにをる。其外の者共も是へ出て承れ。此瑞見山において。諸人一代道中記とあの如くに札を立遊び所に致す事皆辰五郎が奢の餘り。其上小栗判官より。淀屋へ傳る太切のかけ物。照月の二字を取て庵號とせし事。一々具に聞し召れ。繩打て引けと有るお上よりの御謄意。サア遁ぬ所じや辰五郎。爰へ出て繩かゝれと。地聞より新七すゝみ出。詞此儀は全く辰五郎が存じた事ではござりませぬ。此ざしきを拵へしは是成手代宗兵衛が業。人寄致した頭取は。そちらにをります桂元格。諸人一代道中記を此山に取組しは。次にならびし松兵衛噂助。あづまと申て此新七。かやうに女形の姿に成。アノ噂助を辰五郎に致して様々の遊び事。皆辰五郎が名をかつて。手代共が内證。主人に科はござりませぬと。地身に引かぶる忠義の白狀。喩ヲ、神妙なる申譯。ソレあいづらに繩打と。地いふより早く一時に捕たくとくより上。詞四人の奴等は繩付ながら此所に預置。ソレ村の者共番をせいと。地厳しく言付家來を呼床に掛たる一軸はづさせ。淀屋に傳はる大切の重寶。御前へ持參と家來に持せ。詞様子をしつたる手代新七。御前へ參つて白狀せい。ソレ引立いの聲に連。ひかれ出たる繩付の。跡に四人は新七様。どうぞ御前でお取なし。頼まするも泣聲の。羽がいじめなるうき姿。後の哀を。三重へしらま弓

天神お旅の段

地天満神の御旅所鳥居通の夜の雨木影はくらき對の挑燈家來を先へ九條彌藤治合羽の袖も紅葉がさ。繩付先に追立て。はいく／＼の通り道。こかげへ寄て新七が。繩解ほどき傍を見合せ。詞首尾能參つて重疊く。ホ、十郎兵衛殿段々御苦勞。皆の衆も太義で有た。イヤモウ久しぶりの太郎仕事。何と代官と見へませうが。見へる共く。此新七も驚入た。かういふ事を頼んだも。辰五郎様が手放した奢をばさつしやる故。四十兩で貴様を頼。皆の者が縛られたと聞しやつたら。元臆病な生付。是からたとへ宗兵衛や元格がおだてても。よもや合點はさつしやるまい。スリヤおのづから今迄の。奢も直ろと思ひ付。貴様達へ苦勞をかけた。マア宗兵衛や皆のやつらを。ちつとの間でも縛つて置のが。以後迄のこらしめ。私は是から内へ行んで。跡の様子を聞合す。サア最前のかけ物を早ふ渡して下されと。地いふに十郎兵衛。詞其かけ物とは。何の事じや。ハテ下やしきに有た照月のかけ物。あれは大事の重寶故。あゝして置が氣遣さに。けふの序に取て來てと頼んだ故。はづして來たてはないかいの。サア其かけ物こつちへと。地いへど諸も空うそぶき。詞ヤいあんだらつくせ。アノ照月のかけ物は。小栗殿から淀屋へ渡つた。大切な重寶故。大名に指上て大金にするはい。そこを見込でけふの様な。ぼくの高い仕事をしたと。地いふに驚き。詞ヤア何と。スリヤアノ基屋で頼もしそうにいふたは。あのかけ物を取ふ爲じやな。イヤあの掛物計じやない。名高い淀屋の下やしき。金銀でも有ふかと。搜したれど鏢ひらなナア皆の者うつそりとした頬を見い。此仲間へ五十兩や百兩の目腐金。ふてうすると僅宛。ア、こんな事では水も飲れぬ。ム。スリヤ皆くるになつて此おれを。エ、口惜い。地取換さいで置ふかと。飛かふりしが。詞ア、いかにもく。其元方は商賣なら取しやるは無理でない。取れたおれがあほうから。其かけ物を盗まれては。今迄盡した忠義もむそく。夫がなうては生ても死でも。夫さへ戻して下さつたら。縦此身をづだ／＼に刻れても。御恩は忘れぬ十郎兵衛殿。十郎兵衛様拜ますと。地兩手を合せ惣々に。腰折かゞめどうぞ申し。申し／＼と降しきる。雨も涙に伏拜む。フシ心ぞ思ひやられける。詞ハ、ハ、コリヤ。こりややい哀や義理を辨へ

て。此商賣が成物かと。地立蹴にはつしと蹴倒せば。起上つて。詞スリヤどうても掛物は。ハテ知た事くだつくなど。地聞よりくはつとせき上て。掴掛るを引ばづし。フシもんどり打せ。詞ソレ皆の者片付いと。地其身は傍に腰打かけ己が身過の摺火簾。ごちく打出す石の火の。命惜まず新七は五人を相手に根限り。くんづころんづ手を碎けど。多勢を相手に只一人。踏つ躰いつ引ずられ。雨にひつたり濡驚の聲も涙にひいく。詞どうぞ情に掛物を。コレおまへ方頼ます。戻して貰ふて下されと。地又伏枕めばヤアめんどいまだばやくかと引倒し踏よ躰けと。フシひしめく所へ。飛脚挑燈足軽く。新松連てとつばかは。來かゝる鹽の長次郎。それと見るより新七か。詞こりや何ひろくと飛かゝり。地左右へ投退ほふり退。新七かこひ立たるは。フシ心地よくこそ見へにけれ。詞ア、兄者人遅かつた。夕べ咄したおどしの方便。裏くはされてあいづらに。大事の掛物盗まれた。ヤアく。あの掛物を取れたか。よいく。コリヤく。新松よ。とゝが傍に付て居い。夫でも私はこはいはいの。だんないく。伯父が居るぞ。コリヤ氣遣すなく。サアどいつも動きやがるな。ヤアちよこざいなと兩方から。取てかゝるを地はり飛し。無雙負投腰もじり。しめ上しめ付。投倒し。雨の足邊や亂足。踏するやら轉るやらさらに分ちはなかりけり。地長次郎が強力に。打付られて皆ほうほう。命からく。逃散たり。後に忍ぶ十郎兵衛が。だまし討に切りかくるを。心得かさにて丁ど受とめ。詞ハ、ハ、ハ、刀ひらいたは盗人のふるせよな。イヤほざいたりと切込む刀。傘さつと眼潰し。持て開いて抜合す。地女の光りちらく。星が澤邊の螢火の雨に漂ふ。フシごとくなり。地透を窺ひ盜賊が切込刀を引ばづし。付入受たる挑燈の。明りに顔を見合せて。詞ヤアわりや阿波の十郎兵衛。そういふわれは。ホイ。地南無三寶と挑燈はつしと切落し。跡くらまして逸參に。フシ飛がごとくに逃て行。詞ヤア十郎兵衛め遁さぬと。地追かけ行をコレく。伯父様。詞とゝ様。息がせぬはいの。ヤアくくくと氣も狂亂。詞新七く。エ、どんなと。地用意の氣付取出し。口に含て。詞コリヤ新七くく。ヤアイと。地呼生られて。フシ心付。詞兄者人。エ、無念にござる口惜い。とは言ながら掛物は。又取か

へす事も有ふ。こなたにもしもの事が有ては。坊主やわしは何としませう。相手は仲間の有奴等。どういふ方便も計れずと。地いふに長次郎涙をうかめ。詞そなたや坊主めが苦になる故。詮議の有十郎兵衛を取逃した。地エ、残り多いと打見やり。詞ヤ。コレく新七。淀屋の内は大騒動。ヤアく。シテ其騒動とは。サレバく。辰五郎様の身の害。金の鶏の紛失迄權藏がわんざんにて。八幡の中將様へ聞へ淀屋の内は大騒動付立る共戸じめ共取々の取沙汰。辰五郎様やあづま様は行衛も聞ず。安治川筋は役人衆が櫛の齒を引ごとく。宗兵衛初め悪者共。召捕に行との事。それをそなたに知せたく。新松連て来るあの龜井橋の上で大勢の聲はする。合點がいかにと見合す内に遅なつた。まだ能所へ來合したも兄弟の縁つきぬ印。辰五郎様や小庵様の様子をも聞合せ。品に寄たらマア當分。おれが所へ同道せうと。地始終を聞程新七は。かういふ事が出来ぬ先と。女房迄にうきめを見せ。何ぼう心盡せしに。何をいふても水の泡。數代續きし淀屋のお家。成行末が思はるゝと。わつと歎けば子心に。涙催す貰ひ泣詞おりやかゝ様の傍へいつて。地寝たいわいのと泣出せば。詞ヲ、道理じやく。アノかゝはな。伯父の所へ行て居るはい。頓て逢そう泣なよと。地我身の上のつらさより。子の心根を思ひやり秋の小男鹿夜の鶴。同じ思ひに聲立て。泣ぬもつらき長次郎。詞ア、コレ新七くちなく。皆是浮世の定まり事。千騎萬騎の大將でも運盡ぬれば主従親子。別れくのうき難義。こつとら風情にや有内じや。何がなしにマア砂川へ。誰憚らぬおれが内。又島原への手寄も近い。地サアくおじやと弟を。脊にしつかと甥が手を引ど引るゝ後髪。親はお主を思ひ草。子は又母を戀草の。袖は露草忍ぶ草。おのが宿りの深草へ。打連てこそ 三重へ急ぎ行。

木津川堤の段

歌きりくす鳴や。霜夜と詠たりし。地歌にも似たる身の上や。嵐はげしき木津川の。堤にならぶ辻君が思ひく

の戀衣。往來の袖を妻結び。フシ引ぞわづらふ風情なり。詞イヤコレお十様。そこに居やるおいもや私は。每晚つないだ錢見せぬと。親方がごろつくさかい。此寒いのに夜がな夜ひと。寝たり起たり米俵同前。おまへは又親方殿の娘御故。此帳場へ立んしても勤も心の儘に。安大盡様が舟に乗て牽頭衆連て毎晩お通ひ。したがほんに此四五日は何としてやらお出んなア。サイナ。私も氣が濟ぬ故。待兼て居るはいなアと。地聞よりおいもが。そんならこちらも捨てられぬ。詞夫はそうとこちらの親方程欲面は有まい。お十様の傍ていふは悪いが。晝は一日山猫廻し。夜はわたしらが跡付。地何とえらいじやないかいのと。フシ咄半へ。地山猫の貂八といふ。爪長親仁。咄付様に目を光らせ。詞ヤイコリヤそこな賣女共。又寄たかつておれをくふな。そう客留すに貰ふては。食櫃が天上する。アノ娘のお十もお十じや。此中からよい客が付て。毎晩揚詰にするといへど。花代は目に見せぬ。コリヤいつ渡るとふするのじや。サアどう成とするはいな。サア其どう成とが氣にくはぬ。どふても間夫とひろぐそふな。よい後うせおつたら。直々に立引する。イヤコリヤそなおいもおたこ。己等を一ツ帳場に置と。ぞはくしおつて錢にならぬ。地こつちへうせいと山猫は。フシ二人を引立たち歸る。地戀風にフシ吹送られ笹小舟。安立安次郎清重はいつかお十に馴初て。思ひも深き木津川の岸を。フシ目宛に漕寄る。比しも廿三夜の空。まだ宵闇や胸の闇。お十は一人濱際に。思ひ有身の獨言。詞我計物思ふ人はあらじと思へば水の下にも有りけりと。地吟ずる聲に舟よりも。詞みな口に我や見ゆらん蛙さへ。水の下にも諸聲になく。ム、そう言しやんすは安様かと。地走寄くる岸傳ひ。たいこの與八はそり立。詞ヤアお十様やつちや。君を待夜の疊さん。お前方のは菰さん。夫よりつらいは枕元へ。犬のくるのが迷惑じや。と是不調法。御免。地サア。お乗と舟漕寄れば安治郎。ア、あぶないくと。抱抱てフシ舟へ乗せ。詞扱此間は御げんならぬ。ドレ久し振顔見よふか。是は暗ふて戀の闇。與八挑燈早う。地ラツト任せと弓張の。盡ぬえにしと火を移し。さらば是から御酒宴と。取持聲も高時繪。友治の盃旦那からいざお始と夕露に。濡の開山浮舟の。

フ昔増りと騒立。地ぬる井一人がむせう呑。餘念たはひもなき折から。のさく来る親方の。山猫はいかみ聲。調コリヤイお十。エ、そこに居るか。花代拂はぬならず客。又喰込にあふのかと。地いふにお十は氣の毒がり。調コレマアと様。揚代はわしが吞込で居るはいな。イヤ吞込でも嚙込でも。こちのは現銀かけ直なし。サア。花代をおくれんかと。地せがみ立れば安治郎。紙入とくく金子取出し。調此中よりの揚代三兩。地受取めさと指出せば。貂八は憐れし。エ、ソリヤ小判じゃ。へ、へ、へ。シヤほんに。人にけなけながらす様に。但しはほんぼにおくれるか。ムウ。そちはアノお十だ爲。眞實の親とな幸ひく近付に成申そふ。身は安立安治郎といふ浪人者。ふとした縁でお十に馴染。妻に致す簡なれば。身請を致そふと。地聞て貂八ぞくく踊。娘が悦ぶ仕合より。此親父が設事。身の代はたつた百兩。お求なされてお徳な者。いかにも百兩承知した。先明日迄我等が揚詰。今宵は直に身が内へ同道して歸りたい。イヤモウ夫はお安い事。したがお前のお所けな。此川下の三軒家曲とのかけ造松を印。尋てお來やれ。ヲツト合點吞込ました。明日迎に参りませふ。コレ姉。随分とお氣に入て。彼百兩をはづさぬ様。エ、孝行者では有はいの。娘さらば。地旦那お暇くと。ほたくいふて立歸る。地跡に二人は指向ひ。與八くとおこせ共。傍にころりと白川夜船。フシ前後もしらぬ高軒。お十は何と言寄ん便も波のヲ、寒と。フシ風を便に寄そへば。調ナントお十。今宵はつもの物語。是から内へ連歸り。約束の通女房にする。戀は曲者ふしぎな縁に。そなたを始めて堤て。見初し夜半の其寒さ。テモいとしやと思ふより。ふと綴たる其時の發句を。アイ。其時の御發句は。鐵にしても女ぞ橋の霜と。地情のこもるお詞がよるべにて。草の筵の假枕。一夜が二夜と重なりて今は夜も日もうかくと。お前の事のみ忘れず。斯迄思ひに沈め共。廊や南の全盛な公界勤る私なら。譬お前がつれなく共末はどうしてかうしてと言たい事さへ身に恥て。いはぬ色なる山吹の露ならいつそ今爰て。わしや消たいと指うつむき。身をしる雨はけんぼうの袖に誠やこもるらん。調ハレヤレ夫はよしなき悔。吉野の櫻は有筈と思へばさして珍らしからず。藪のこ

かげに咲花は。奥床しきも人のならひ。殊にそなたの心ばせ。よし有る育と見し故に。姿はとも有れしほらしい。そなたの其れ心をば。女房に持はいの。地僞ならぬ我證據と。小柄拔持刀に押當てうくく。金打すればノウ申し。調そんならほんぼの夫婦かへ。ハテ知た事。地ヲ嬉しと思へどどうやら勿體ない。そしてお前は内方に奥様はないかいな。有もしたれど離別した。そんならしかるお方もなし。エ、忝いお志。ドレお足でもさすらうかと。總寄添妹育は。定家の歌に五文字付。フシ繼合せたるごとくなり。地たいこの與八は聲を上。詞アイタくく。ヤアく。どふした何とした。イヤモウお前方の滯事て。○○○○○○。夫で頭を。アイタくくと。地顔をしかめて起上れば。安次郎は立上り。詞與八是からお十を連れて。身が座敷へ先へ歸り。釜でもかけて持て居い。地身共は用事仕廻次と舟と陸との聲々に川風へ凌ぎ別れ行。地跡見送りて安次郎。堤に立て兩手を組。詞百兩といふ金子をば。貂八に渡さねば。あのお十は我手にいらす。といふて急に才覺する術もなし。ハテ地どうがなと思案の内。向ふより來る小挑燈。六十に近き侍が立とどまつて家來に向ひ。詞道々思案して見る程。娘が病氣きづかひな。そちは是から引返し難波村へ立歸り。あすの朝迄お抱せいといふに。地家來が。詞イヤ申。夜道と申此暗に。殊に大まいの金子をば。お肌につてござりますれば。ヤツぱりお供致しませふ。何さく。年は寄てもいかなく。めつたに不覺は取申さぬ。金逆繰百兩計り。案じる事は少しもせい。夜が明たれば娘をば三軒家へ連れて參れ。地ナイくくと。フシ家來は跡へ立歸る。地旅人は火繩打ふりく。歩む傍に安次郎拔身片手に兩肌ぬぎ。申しくと聲かくれば。立展りてふしぎそふに。詞何拙者めに。御用かな。いかにも左様。御覽の通り様子有て。只今生害仕る。近比そつた事ながら。お侍と見受ました。地御苦勞ながら御介錯。お頼申すと言かくれば。詞いか様見ますれば御生害の御様子。品に寄たら。不調法ながら。御介錯も致そふが。アマ様子を仰聞られい。コハ御懇意の御挨拶。千萬祝着仕る。何

をか包まん拙者が主人。傾城狂ひに金銀を費し。其上右の傾城を。身受致すに極られ。其金の才覺大方に調ひしが。
 引残つて百兩計り。調達に行詰り。主人へ不忠の言譯に。腹かつさばき相果る所存。何卒借て呉そうな人さへ有ば。
 何のく痛い腹は切ませぬ。世間の武士の切腹は。十文字がお定り。拙者は傾城故なれば。八文字に切ます。御苦
 勞ながら御介錯なむ阿彌陀佛と。地拔身追取。既にかふよとしかけても。見向もやらずしろりくはん。又南無あみだ
 佛と二三度四五度ゆすりかけてもいかなく。工合の悪い出来合鑑。フシくはぬくと見へにけり。調ハレ世の中
 には様々のたはけも有ばある。地よしない事に隙費と。言捨立て行んとする刀の錆しつかと取。詞コレサ侍。武士に
 大事を明さして返答もせずどこへお行きやる。イヤこな大盗人めが。ナント盗人とは。サレバサ。命も捨る程の忠臣
 が。主人の放埒間はす語り。跡先詰らぬ詞のけしん。ムウこりや今はやる盗賊街。そんな術に乗る様な。親仁ては
 地おりないと。又行過るを立ふさがり。詞ヤ盗賊の惡名を。付るからは毒喰ば皿。懷中に有其百兩。御無心が申
 たい。ホウいかにも金子は此財布に。應ほしからふ。マアならぬ。盗賊なんどがなまくら刀。侍の骨は切にくい。ヲ
 ヲ切ぬか切るか取て見せふと。地闇はあやなしさぐる足ねらひ寄て懷中の。財布に手をかけ引出せば。さしたりと
 刀の稻妻。上段下段に切結ぶは。危くも又目ざましき。地空は折しも雲暗て。廿三夜の月代に光り照添水の双。旅人
 は受太刀跡すさり。たちくく身を引きずみ。切先取て我と我。腹へぐつと突立る。驚ながら付入手先。しつか
 と捕へて。詞ヤ安次郎。暫く待と。地いふに仰天。詞ヤアくく。我名を知しは何者と。地頭巾取捨すかし見
 て。詞ヤ貴殿は舅三太夫殿。地コハくくいか何故と驚き騒げば押しづめ。其身もほつと一息つき。首にかけたる
 財布より。金子百兩取出し。詞何安次郎尊に聞は此邊に塾居と聞き。今宵尋て参る所。不慮の對面應驚き。早速なが
 ら申そふは。貴殿の親父安隆殿と契約の通。娘お駒を其元へ遣はしたい。是が則ち嫁入の拵料。金子百兩御受納有
 て給はれと。地思ひも寄らぬ一言に。詞イア申し三太夫殿いかにも言號の御息女なれ共。御存じの通り敵討のお暇受

いづく定めぬ旅の舎。あすをも知ぬ我命。此縁組は御用捨に預りたい。殊更貴殿に手紙を負せし某。縁を組ては舅殺し。エ、思へばく而目なや。人も多きに貴殿に向ひ。先刻からの始終のしだら。嘸貧苦故非道の金銀貪るかと。おさげしきも有るべきかと皆迄言せず。調イヤこれく。其言譯には及び申さぬ。御親父の敵討さへ済んだら。娘お駒と夫婦に成て給はるか。いかにもく。敵の首を提て。親安隆が位牌の前で。めでたふ祝言仕らふ。ヲ、忝しと。地腰下の手拭取て腹引しめ。居直つて聲はげまし。調去年八月十五日。楠葉堤の川岸において。汝が親安隆を討たるは。外でもない此木津三太夫と。地聞よりヤアと飛退しが。調ハ、ハ、ハ、ハ。息女お駒殿と縁を結ばん爲。紛はしい敵呼はり。但しは慥な證據ばし候か。ヲ、遺恨のあらまし一通物語らん。元來貴殿の親。安隆とは竹馬の朋友故有て浪人と成此地へ登り。互に立身競せんと。契約して別れし後。そちが親安隆は。程なく出世の簪を上。此大坂と堺の間に新田を開き。十町四方の主と成。其名を直に象て。安立町と號しは世の人のしる所。夫より段々威勢の餘り。二條家に取入。終にははきくの難掌と成て。何がな禁裡へ追蹤に。泉州堺の妙國寺に。隱名高き八保の蘇鐵を。觀覽に備へんと。二條家迄取寄しが。ふしぎや夜毎に彼蘇鐵。妙國寺へ往なうく歸らふと。心なき草木の古郷を慕ふは諱しき連。公の下知に寄て。始のごとく妙國寺へ送り戻す其道中。時しも八月十四日。八幡宮の放生會。勅使儲は我主人橋中將殿。我も其時陪從せしが。彼淀川に御船を繋ぎ。暫く月を御覽の折節。地秋雨しきりに降かり。黒雲紛れの川上より。水主楫取船權をならべ。エイサくと押切はづみ何とかしけん。繋置し勅使の御舟の綱の上。彼大船を。フシ乗上れば。調御馳走役人聲々に。勅使の御舟へ狼藉者。さがれくといふをも聞ず。是は安立安隆と申す者。泉州堺へ蘇鐵を送る下り舟。私用にあらずといひ様に。地天上人への恐れもなく。御舟の綱を押切く船を早めて下りしは又上もなき傍若無人。調夫より漸舟を繋。放生會は済だれ共。地安隆が慮外の段々聞にせつなき此三太夫。聲舅の中なれば中將殿へ願ひを上。調穩便の御仕置を一向に願ひ課せ。直様明の十五日。密に安立を呼出し。其方一

人切腹すれば子孫の爲と。様々にいさめても承引なし。是非なくも其座にて。三太夫が手にかけしも因果と因果。地皆是そなたが大切といふも娘につながる縁。敵と名乗て手にかゝり。そちが武士を立ふとすれば。現在娘が縁の切目とやせん角やと此年月。心の内のせつなさつらさ包忍んでけふの今宵。我本望は、フシ達せしぞや。詞ム、スリヤ我父を討たるは貴殿で有たか。ハ、ハ、ハ、ハ、地はつと計りにどうと座し。前後涙にくれけるが。詞ア、是非もなき此身の上。地現在親の敵ながら。討に討たれぬ御恩のこなた。討ねば不孝討ば不義。能も武運に盡果しと。悔歎けば。詞アうろたへしか安次郎。そちが刀で此ごとく。我腹へ突込だれば。敵をしめし通し。他人と他人は是迄。契約のごとく娘共。夫婦に成て下され。此百兩は其方が難儀をすくふ祠堂金。又來年の弔ひは。孫の顔をば。地手向てたべ。頼むくの詞さへ。次第によはる枯蘆の。末葉にとづる薄氷。フシ消て跡なく成にけり。地ヤアこれ申しと取すがれどかいも浪路の捨小舟。御恩の数も百兩の。金もさへ行朝嵐明ては人目いぶせしと。舅の死骸を。かき抱流れも早き川岸に。沈むも涙聲曇り。詞出離生死頓生菩提と。地向回をなして。三重へ立歸る。

三軒家貸座鋪の段

歌いやな男を摩つて行なし好た男を擲て囀で。とめて添寝が勤かへ。ほんにそこらが勤かへ。すき上さした櫛巻髪も。とけて身儘の延鏡移れは水にかけ造。三軒家の貸座敷。爰に安立安次郎。辰五郎あづまを匿ふて。世間に心奥底も。フシ夏より冬と暮しける。地鈍井與八が朝箭の棚元膳を片手に。詞是は扱お十様。モウお上りか。差くべに行かふと思ふ間に。大方おれが苗字のような。イエ〜ぬる事はござんせぬ。ずんど與八様でござんした。コリヤ口合てきました。アレ〜旦那のアノ高軒。祝言の験が見へるぞへ〜。お前のおひへも豆燵にかけて置ました。着かへて早うナ。夜食は晝でもよい物じやと。地笑へばお十も。詞ホ、ハ、ハ、ハ、與八様とした事が。餘りちやつて下さんすな

と。地赤らむ顔は湯上りの。フシ浴衣はらゝ入にけり。仕地切座敷の障子さへ。フシ人間を忍ぶ辰五郎あづま諸共立出れば。調是は御用があらば手を叩はなされいでイヤ別に用もなければ。夕べから安次郎殿に逢ぬ故。さうでござりませふ。イヤもう祝言やら打たり舞たりもて返しておりますと。地いへば吾妻が是はしたり。調アノ安次郎様がお内儀様を呼しやんしたかへ。サアお前方が其様に。明も暮ても比翼連理が羨しく。堅くろしい安次郎様のやつし事。きだんの名はお十様。お引合せ申しましょ。ムン夫は重疊ノウあづま。そなたも物いひ伽が出来て嬉しかろ。アイ嬉しい段か。與八様嘸聞しかる。其お十様とやらモウ来てかへ。アイタベ舟で迎ひに行て。盃もざつとざぐんざの酒機嫌。まだ枕が上りませぬ。ヲ、そんなら道理後に緩りと悦びいふ。アノ安次郎殿は大分願ひの有る身の上其事は色にも出さず。纏の間もおれが内て世話に成た恩が有ると。我々を此様にかくまふて下さる上。此あづまの身の難儀も。番頭の宗兵衛めが工から。今では命の上にも及んで有故、一寸も外へ出すなと。別座敷に隠し置。眞實の親にも勝る大恩。地いつの世に忘れうぞ。調おれはおれじやが。たつた一人の母上小庵様。永々戸じめ遠慮のお身。地不自由な事は苦にもせず。不孝なおれが事計。調煩ふては居ぬか。難義して居るで有ふと。泣て計りござるで有ろ。地勿體なやと伏沈めば。あづまも俱にフシないじやくり。調其お悔を聞に付。不孝の元は私故。此夏お目にかゝりし時。地お情深いお詞が身にしみゝと忘れず。思ひ出さぬ日はなければと言出したら其様に。身のくづおれにならふかと。泣たい所を笑ふて居る。心を推量してたべと。聲も涙も忍び泣。調是は扱私迄けむたい。お悔も御尤。大名暮しの淀屋のお家。其餘情を蒙つて安樂な牽頭持も旦那のおかげ。昔のくはつくはに引かへて御不自由なお住居何事も時節じやと諦てござりませ。悪人方の宗兵衛殿も。段々首尾が悪いげな。安次郎様が聞しやつても氣の毒アレ足音が致します。お二人ながらお炬燵へ。爐に炭でもなされて。挽茶も切たらお慰にナ。茶臼もちつとよござりましよと。地沈むを浮す茶筌より鈍井與八がぢやは。口。ちやつと。勧められ。ふたりは座敷へフシ奥の間よ

り。地お十はしんきな顔付して。詞與八様與八様。なんぼ起してもこそぐつてもお目が覺るこつちやない。ハテ夫を與八が知た事か。お前の心に覺えがある。エ又惡口をいはんすかいな。イヤ申お前は爰て留守番なされ。わしは言付られた買物。船場から天満の邊。かけ廻つて參らうと。地裾はづし出かゝる所へ。山猫廻しの貂八が。首にかけたる箱の内。兩手に遣ふ指人形。ちやん／＼／＼聲はり上。歌おしやれ連だと足代(あしろ)の山へ。かゝは先へねんねこせい。晝寢の寢言いふたをかしさは。詞通らしやれ。歌ならの都を出立て。返り三笠の山を越へ。詞コレ／＼手の隙がない通つた／＼。ヲ、通れとは忝いと。地ずつと這入れば。詞ア、これ／＼通れとは外の事。物囃が人の内へめつさふなど。地いふにお十が。詞ヤアと様ござんしたか。ハア扱ハタベ見たおぎう殿じやの。夜は濱に立つての。劔。晝は門に立て山猫廻し。きつい精の出し様じやの。ヲ、扱爰の内には祝言が有た筈じやがナ。娘よ。入込したからわりや爰のお内儀様。婚禮の有る門へは。座頭の坊に猿引山猫廻し。祝ひを取に來る作法。人に先越れぬ内祝儀をせしめ。酒も吞ふと思ふて來たと。地いふに與八が忙顔。詞アノお十様の親御なら現在の舅殿か。ヲ、てや。舅入やら娘が身受の百兩を受取ふし。分一の片口錢。まだ有てや。舅入の祝儀庭錢も有。七曲の餅代夫も生樽がこつちの勝手じや。ヤ。まだ朝飯も喰ずに來た。祝言の五ケ日は鯛の焼物に鯛の汁。結構にして居い。ハテ一人の娘に濱立させ。むさう鯛て清う喰へといふじやないか。ハテこな男は何をきよろ／＼。爰の埒が濟だ前垂島勘助島。湊々の掛り船へ廻らにやならぬ。娘よ早う居ぬかい。サアわしじやてゝまだ勝手もしらず。安次郎様の目の明迄。ム、待てくれといふ事か。餘所外でもない犂の内。もぎどうにも成まい。そんなら一息みしらそと。地傍に直す箱よりも風呂敷包取出し。さげて一間へ娘が案内。フシ舅顔して入にける。地跡をながめて。詞テモ扱も娘に似合ぬ瘦親父。鳶が産した夜鷹じやと。地一人つぶやく表の方。ラシ爰も難波の蘆垣や。短き日脚急がれて。お駒は一人と／＼と笠を片手に尋來て。物問ませんと音信る。詞ホイ何でござるといひいひずつとテモ見事じや。詞はいいつて様子を。イヤ申し

此邊に安立安次郎様といふ。御浪人のお座敷はと。地半分聞てゐてごんす。詞どれからお出てござります。イヤまあ所が知て嬉しうござんす。若今朝から六十計な旅の人が。地爰へ尋て。詞ハア、成程／＼六十計な親父なら。たつた今見へて奥へ行かれました。夫は嬉しや落付ました方其名は三太夫と申ませうがな。サア名はしらぬが。山猫廻して夜はぎうをしられます。娘を嫁におこした故。舅入じやといはれました。ハテ心得ぬ。山猫廻しの何のとは。地すつきり合點のいかぬ事。其お人は侍でも。詞けもない事／＼。物囉の親仁でごんす。ハアそんならば人が違ふた。扱はまだ見へぬよな。地何はとも有れ嫁入の舅入のとは實正でござんすな。詞何の嘘を申ましよ。しかも大まいの金出して受出した花嫁御。ム、受出したとは。扱は道の者でござんすか。テモ根問する人じや。忝くも惣州でござんす。惣州とはへ。夜はつ。夜はつとはへ。ハテ。歌夜鷹けころばし舟まんぢう。地其舟まんぢうの蒸立を。炬燵の〇〇〇〇〇ける。詞何と託た祝言でござんしよがな。其舟まんぢうとはへ。ハア扱はかへ名を御存ないか。素ていをなら濱に立た辻君。夫で濱邊惣かん様と申ます。エ何のかのと隙が入て買物を忘れて居た。ドレ一走行てかうと。地跡聞さしてフシ出て行。詞ノフこれまた尋たし事が有と。地いへどいつかな跡影も見へぬは父の三太夫様。どうして遅いと心の不審立門口の人影は。どなたとお十が聲かけて勝手へ出る詞の鹽。詞イヤわたしは八幡から参りました。安次郎様の女房でござんすと。地はいる姿の爪はづれ。こなたもふしぎ立ながらようお出共言兼て。互に挨拶お駒は傍へ。詞アノ申。安次郎様にお内儀様が入しやんと聞きました。お前様でござんすかへ。アイいゝえ。わたしはつい近所の者で雇れて参りましたが。お内儀様は去れさんしたじやないかいな。サア夫ても言號の女房とは。わしより外にない筈。マア今も聞は夕部祝言の有たは。さもし勤した者とやら。いかに浪人なされた辻。濱に立た女をあられもない。お前も近所の懇なら。能様にいふて早う去して下さい。頼ます／＼と。地夫とは知らぬ挨拶を。お十は氣の毒何のいな。詞さもし勤すれば辻。濱に立て能物か。そりや人の悪口といふ物でござんせふ。わつけもない。イエ夫でも

るは。取も直さず大きな難風。そこへおれがぬつと出て浪風をしづめたは。舟辨慶が珠數尤より我等が口先。大望か
 かへた此安次郎。お駒を去つたは。芳野の山で静を見捨し義經同然。武勇烈しい大將でも。色故にこそ九郎判官、迷
 ふも道理可愛らしい此お十。地此手のつめたい事はいとじつと引よせ懷へ。お駒はしゆらくら湧る茶を茶臺に乗て
 フシ指出す。詞ヲ、用はないあつちへ行け。アイ夫でもあんまり。あんまりとは何が何と。今いふた靜が、譬此内を追
 出そか。めろくと述懷涙いまゝしい。地立てうせいとつごととなる。詞の角びし立上り涙を拂ふ。澹の紐さへほ
 そき胸の内。思ひを隠して入にける。フシ見送るお十も女氣の其様に呵らず共。御合點の行様に。いひ聞して下んさ
 せ女は相見互といふ。お心根がいとしばいと。涙くみたるフシ其風情。詞ハテ氣の弱い。是程むつまじう楽しんで居
 る中へ。ゑしれぬ女がうせおつてそなた迄泣しをる。去こつたお駒。地遠慮も何にも入る事か。安立安次郎が女房
 お十。コレ嬉しいか。但はいやかとフシ寄添ば。詞ナア二いやかおふかは。地枕して。二人寝たのが二世の縁。ふ
 と馴なじんだ其時から。身を任せた添たいと。眞實心から身を打たはおまへの心に覺が有筈。夫に今更いやかとは
 まだ疑ふてフシ下さんすか。詞イヤ疑ふじやなければ共。目の前お駒と縁切て。地一生添ふと思ふ物。念を入ねば落付か
 ぬ。詞ハアテ君が一夜の恩の爲には妾が百年の命でも。ヲ、忝い落付た。其百年のそなたの命。安次郎が貰たい。
 エ、ム、いや其惻りではまだ女房とは言れぬと。兩手を組だる思案の體。お十は胸迄せき登す。涙押へてイヤ申。
 詞私風情のさもしい身を大まいの金出して。身受なさるゝ御心底深い様子が有ふとは。地辨へしらぬ女の淺はか。
 千年も添様に思ふて來た事じや物。惻りしたは心の外。堪忍して下さんせ。ハテおまへに任した此體。お心に入る様
 に安次郎様。逆もの事に入譯を咄して聞せて下さんませ。詞ヲ、いかにもさつばりの返事過分。問迄もなし。地語
 つて聞んと座を改。詞何をか包まん身も一トとせ軍術に鍛練し。其軍學の師範と頼みし御方。故有て此世を空しくせ
 られしかど。忘箇の女子一人。今漂泊の身と成て。剩命にかゝりし大事に及ぶ。其師匠の娘の命。助けずんば

師弟の恩義立がたし。去によつてそなたの命トいふも中々安次郎が。武士を師匠と頼んだる。義理といひ世の人口。
 地其師恩を報ぜんには恩愛の女房お十。假初ながらふとした縁。そこを頼むはよく／＼に。通れぬ事と諦めて。夫が
 爲に死てたも。フシ頼む／＼も涙なる。詞ヲ、御尤のお咄。其又お師匠とおつしやるはとなたの事でござんすへ。ヲ
 ヲ小栗判官兼氏の忠臣。大星由良之助良男殿。エ、アノ由良の助様の。ヲ、其娘のお大殿。小栗公落城の後。人商
 人に勾引かされ。今茨木屋のあづまといふ傾城奉公に身を沈。縁でこそ有れ今大坂に隠れなき。淀屋の世取辰五郎。
 是も小栗家には出入の町人。突出しの其日より互に語る由縁と由縁。地外の客には消さじと揚詰の大盡。災難といふ
 は爰の事。詞八幡の領主橋の中將殿。一人の息女を淀屋の嫁に送らんと取結び。縁邊極る印には。金の鶏雌
 雄を取かはし。婚禮の規式早調はんとせし折節。淀屋の重寶金の雄。俄に紛失。其本はといへば吾妻殿。祝言の妨
 し鶏を盗出し。失はせしと證據の一札。指當るあづま殿直筆なれば是非もなく。夫より淀屋の騒動と成る。此安次
 郎も淀屋の家に恩を受。かぶり振れぬ辰五郎の難義。其あづまといふも。師匠由良助殿の娘。二人共に此座敷に忍ば
 せ置。傳を求め中將殿の内意を聞ば。鶏の失しもあづま故。盜賊の法に任せ早く。首討て送れとサアのつ引ならず。
 詮ずる所はあづま殿。何と命が取れふぞ。地とやせん角や當惑に。笹原あるく足の裏。木津川堤でそなたを見て。年
 恰好も幸と。馴染かけしはそなたの不運。世の中の無心といふに。此上の無心は有まい。様子は斯の通ぞと。いへ
 ばお十もあい／＼の。始終お駒は暖簾のかけ。涙に袖もしほれ出。詞何事も聞きました。そうとはしらいて暫くも格氣
 したのが恥しいお十様。地得心なされたお身がはり。横合から異な事を。支るではなけれ共。由縁の薄いお十様を切
 ず共。私を殺してかはりに立。氣に入ず共其功には。未來は夫婦といふてたべ。折角親の言約束お前の便を聞迄と。
 袖は詰ても齒は染ず。一生殿御の肌しらず。され共御恩のお師匠の。お爲に成て死るのが。せめて夫婦のかたらひと。
 聞よりお十がそりや何おつしやるお駒様。詞お前は御縁が切たれば由縁かゝりはござんせぬ。サア安次郎様。わたし

を殺して。イエ〜。此世の女夫はお十様。わしは來世で女夫に成る。イヤ御未練なお駒様。やつぱりわしを。
 イエ〜私しを〜と。道を立ぬく娘同士。フシ奥床しくも哀なり。地夫も漸顔を上。詞尤の願ひなれ共。お駒
 はどうも殺されぬ。ソリヤ又なげにへ。ヘテ縁を切たりや他人と他人。三大夫へ義が立ぬ。逆も此世で逢れぬ舅。言
 譯の仕様がな。ム、何此世で逢れぬ舅とは。ヲ、サ其義は追ての事。先指當るはお駒が年ばい。といひ中將家に仕
 へし娘なれば。顔見知れた其方。犬死させて益がない。サアお十覚悟がよくば物見せんと。地懷中より百兩包證文
 を指出し。詞其包は貂入へ。娘を貰ふ命代。受取の證文爪形の判を仕や早う〜。安次郎様曲がない。わたしや金で
 命は賣ぬぞへ。ムウ何がなんと。今に成て命が惜いか卑怯者。這は賤しい夜發の女。地命入ぬと立上る。コレ待て。
 詞尤親の爲とはいへど。腹の内から勤の身でもござんせぬ。夫に何ぞや卑怯げに。金に命を賣たとうたはせ。死だ
 跡迄恥さらせか。地お駒様の手前さへ微塵も思はぬ心底づく。惚た計で死る身に疵付て下さんすか。ウン判ては仕
 やせぬ〜。此儘殺して。詞イヤサ心底は満足ながら。親貂入の手前といひ。判がなければいつ迄も。イエ〜夫で
 も何ばても。地いやじや〜と詞の爪判。りうとひゞくは染羽の矢先。お十が胸元血は瀧津瀬。是はとお駒が介抱に。
 驚きながら安次郎。く〜り添たる矢文はいかにと押ひらき〜。詞娘お十が命。金子百兩に賣申所實正也。安次郎
 次郎殿へと讀終れば。ヲ、其得心の印形。夫へ參つて仕らんと。地障子蹴放し立出る其形相。狹々緋のぶつき羽
 織。忠の一字の胸當に。甲頭巾立附迄。只者ならぬ頬がまへ。大小道半弓を。弓手に狹み立たるは。フシ興さめてこ
 そ見へにける。詞ム。イヤ。面はかはらぬ山猪貂入。姿は武士にも恥ぬ出立。得心の印形せんとは。地心得がたしと
 言せも立す。詞ヲ、不審尤なり。渡世の爲にあらぬ假名は付たんなれ共。今こそ實名を顯はさん其爲に。斯のごと
 く出立たり。唐土天竺はいざ知ず。今日日本において。英名雷神のごとく響渡つて。忠臣の第一と呼ばれたる。大星由良
 助が心に逆らひ。不忠不覺の名を取し。斧九太夫がなれる果てござるはいのふ。ヲ、驚尤。其由良助良男を以て。

師範と頼し安立安次郎。地師恩を忘れぬ義心の程。誰も斯こそ有るべけれ。我は夫には引かへて。一人の娘さへ。金に代なす大欲心。おこがましくも此姿。不審の條々言聞かんとどつかと坐し。詞主君と仰ざし小栗殿。不時の横死に果給ひ落城の砌も過ぎ。大星我を近く招き。亡君の爵賞。修羅の朦霧を散せんには。敵横山討にはしかじと密談せしかば。我もさこそと思へ共中々たやすき敵にあらず。討損じては恥辱の上ぬり。汝は汝が思慮に任せよ。我は我が愚案も有と。夫より良男にフシ引別れ。地我一人が手柄にして。大星に鼻明せんと。夫より貪る金銀利欲。城下の在々町人迄。ぶち打擲にあふたれ共。恥共杭共此類に。面をかぶらぬ計にて。國を遁れ吟ふ中。横山が館へ入込。阿諂ふ大侍。詞腔氣と呼ばれし大星は。四十餘人の徒黨をあつめ。念なう本望遂たりと聞たる時の口惜さ。忠義の先を越れしも我偏屈のなす業と悔むにかいも。地ながき月日の今日只今安次郎の志残らず聞て此九太夫。六十年は夢の夢覺てのけふは手にかけて。娘を殺す無得心。命の價を食るも。心に一物有ての事。像は侍心は鬼の山猫廻しの貂八と。世に落ぶれしも主君の罰。恥しの。身の懺悔やと始て明す物語。お駒も俱に安次郎扱はとフシ計聞居たる。フシ隔つ障子に。こまぐを聞て驚く辰五郎。あづまを連れて走出。詞コレハく聞及んだ九太夫様。稚い時の事なれば。御顔は見しらねど。母の小庵が噂に聞。先御堅固てめてたやと。地手をつかゆれば吾妻とお駒。此夏逢て夫からはお前も私もけふの今。悲しい事が出来ましたと。あづまは手負の傍に寄。詞申九太夫様。大事のくお十様。わたし故に命を。エ、忝ふござります。コレ申お十様。始終の様子あれにて聞き。死ふとせしを指留られた其中に。ひよんな矢疵も此身故。地いとしやのふと取すがりいたはる其手をフシ取かはし。詞扱はおまへが由良助様のお娘様お大様。安次郎様の節なるお頼。お前にかはつて死れば嬉しい。必歎いて給はるなへ。大星様は忠義の名を上げ。私が父は引かへて。臆病者卑怯者と。人の議を受給ふも。不忠なされた其報い。此身を捨てさもしい勤して居たも。お主様へかげながらの申譯。地是に付てもと様は。生れ付の我慢心。どうよくなお心と死る今はの際迄も。是計りが苦に成

て。恨歎いて居ましたが。アノ本心を聞上は。潔ふ死まする。詞ノウ申し安次郎様。必未來て待まする。お駒様は佗言して。此世で添て下さんせえ。言置事は地是計りといふも苦しき息づかひ。コレの方今が臨終かと。吾妻もお駒も身を添て。介抱等閑なかりしが。地いづく共なく鶏の鳴音に安次郎耳時て。地ヤア扱こそ。像は立派な武士呼はり。底意のしれぬ斧九太夫。人面獸心の侍畜生。盜賊の證據は爰にと。詞懷より合羽の墨付取出し。詞佳吉松原の土中に有し此手形。金の鶏暫く借用致し候以上。コレ矢文に付たる此一札。二通共に同筆同書。今又時ならぬ鶏の音もお十が誠のなす所。サアさつぱりと白狀。ヲ、盜賊と疑ふは此事かと。地懷中より出す巾紗物。包開けば金の鶏辰五郎興さめ顔。地是こそ尋る家の重寶。どうして貴邊の手に有しぞ。地子細いかにとあづまも俱に。膝摺寄せればフシ少しも騒がず。地ヲ、せかず共様子を聞れよ。詞我手跡を見るからに思ひ出せば夏の比。月は五月日は廿八日。住吉御田の曉方。朝風涼しき松原にて。間眠共なく寢入し夢。所は鎌倉泉岳寺の境内。四十六人の殿原。敵横山が首を掲げ。亡君の御塚に手向ると見し夢心。此九太夫は横山が家臣と成。首受取て行んとす。ヤ二心の斧九太夫。アレ討留よと罵る人々。中にも大星由良助。殿原を制しとめ。我を助し正夢の。覺たる所は元の住吉。傍に臥たる者有て彼も夢を見し折か。胸より出たる人魂を。取留てとらせんと玉結の歌をよみ。起せば是も夢咄し。邊に立たる石燈籠。其根にて金を拾ひしとの物語。欲に眼の光る此九太夫。堀出し見れば正夢の。印は金の印子づくり。コレ鶏こそ有たんなれ。身の幸ひと嬉しくて。預りの一紙を残し其場を立退。逆も不忠と呼れし九太夫。金銀をわき溜し。コレ因縁謂を見せんずと。地肌にかけたる守より紐をとく。取出すは。尺餘の紙に石碑の差圖。割斧を抜持て手早く傍に。押ひろげアレ。見られよ。旁。詞左の上座の卵塔こそ。大星良男が。營し亡君小栗公の地石碑なり。法諱は則ち禮光院朝散太夫吹毛玄理大居士の。御墓を始とし。其外四十六人の數の石碑を九太夫が。營建ん心ざし。詞次の最初は大星良男。富堀迄に十一基。地續て子息力彌を始。大鷹源五て是十人。詞次の九人は神咲より矢間迄。

右六人は赤垣鹽田清左衛門。中の十基は大野寺群松。地合せて四十六人に。詞主從都合四十七基。劍と刃の認號の揃ひも揃ふ。フシ和國の勇士。地猶此後も良男を始。四十餘人が譽を傳へ。忠臣義士を顯はす爲。義臣傳を書綴る共詞コレ此九太夫が身の上は。大欲無道の人非人と書殘し。人に指さし笑はるゝが却て此身の罪亡し。徒黨の勇者はいつ迄も。武士の鏡と傳へなば。地草葉のかけ成人々も。嚙満足に思はれん。是に付ても九太夫は。よつく武運に盡たよな。小栗殿の叱近には。大星か此斧かと。一二の席を爭ひしに。中間小者商人にも劣たる世渡り。蜘蛛蜘蛛と迄成下り。娘には漬立させ。雪霜露に顔さらす。夜發物嫁の木綿物。君傾城のお大には衣服に綺羅を着飭て。辰五郎の寵愛も。由良助の忠義心。天に叶ひし因縁づく。コリヤくお十。こらへてくれと抱抱へ。眠れる花の死顔を見上見下し髪かき上げ。器量も人に負ぬ身を。寒いめ憂めが見せたらいて。親が手づから矢先にかけ。此死さまの可愛やなナ。兄郡兵衛も。無慙の最期。詞コリヤ娘そちを殺したも此親が心の取置。欲心に凝塊る九太夫が子孫連はナ。いつかな一人も殘さぬ存念。身の代の百兩も。石碑の料に入ん爲じやはやい。又此鶏も何者か盗出し土中には隠せしぞ。幸ひ我手に入ばこそ。今又無難に返す嬉しさ。身の欲と見せたるも。助力他力を受まい爲。コリヤ地娘まだ魂が有るならば。此理を聞分て。必恨んでくれるなえ。石塔残らず建終らば。其眞中で腹かつさばき。主君を始四十餘人の旁へ申譯は未來でせんと盟たる。詞を違へず年を経て。追腹切たる侍は。フシ此九太夫が事なりける。皆々はつと感涙に安次郎も安堵の思ひ。詞其本心を聞上は。お十が首を申受。あづま殿の首にして。鶏諸共送りなば。辰五郎殿の言譯も。淀屋の門も明らかに。特奇を見する鶏と。地巾紗に包めば又一聲。鳴に惻りコハいかに。ふしぎくと見廻す内。親子の縁を引汐の水にゆられて流れ寄る。地お駒が見付てヤアと。様三太夫様の死骸じや。悲しやなうと立騒ば。人々是はと驚を。安次郎押とめ。詞お十が身の代才覺せんと。木津川の堤において。往來の旅人を待折から。舅としらぬ暗紛れ。エ、。扱はお前が手に掛けて。ヲ、サ子細は追てといひしは爰。あしらふ奴も其身の覺悟。是

ひなく立寄る其時しも。廿三夜の眞夜半の。月に見合す舅の顔。なむ三寶と介抱ながら子細を聞け。詞そちが親。安立安隆を手にかければ三太夫。今宵汝に討るれば。敵討は是て濟。我も討ねば父への不孝。討は現在我舅。とつゝ置つも健氣の老人。一旦他人へ成たれば用捨は入ぬ敵討。跡で頼むはお駒が身の上。此百兩を持參と思ひ。コレそなたが事迄言死にと。地聞にお駒が猶涙。夕べにも今朝からも。どうして見へぬと思ふたに。扱は覺悟の御最期かや。わたしを連てお前に逢。夫婦にせんと宣ひし。其嬉しさに跡先も死目にさへ得逢ず。討れ給ふも金故かと。包を取て投付る拍子に破れてばらばら。飛ちる中より出る一通。九太夫が取上て。詞何々。安立安隆を討たる某。一子安次郎に討れ相果る者也。此後本領安堵者においては。娘お駒を婦妻に連れられ。木津の家相續頼入奉り候。コレしかも慰斗迄添られしと。地巻納れば安次郎。何から何迄舅の執配。父安隆を討れしも安立の家を思ひの餘り。夫故に又身を捨て舅殿の志。無下にさせては義も立ず。詞今より木津の苗字を繼。三太夫の三の字と。お十が十を一ツに寄せ。木津三十郎安隆も。父安隆が訓と音。お十が亡執舅が修羅の魂魄を。弔も黄金の百兩包。石碑の料に入られよ。實に尤と九太夫は。地娘が髻かい擱。首に刀を指付けしが。這親子の別れ際まぶた洩くる。血の涙よはる心を取直し。詞コリヤそちが價のアノ金で。石塔供養の功力を受。佛に成て南無阿彌陀。地ふつと首をかき切て。渡せば受取目も涙。地此鶏と諸共に。我は是よりお駒を連。八幡へ急ぎ中將殿の。安否をしらす夫迄は。詞新七が兄の長次郎。伏見の里砂川に住居と聞。兩人共暫くはかしこに越る道すがら。人目包むは幸の九太夫殿の置土産。山猫廻しの此箱をと。地いふにあづまが心得て。夫が肩にかけさせてすぐに此家をてこの坊。九太夫は小判の數を拾ひ集めて取入る。我が子が身の代黄金の島の財布を肌につけ。詞我は是より鎌倉へと。地娘が軀かき抱き。フシ川邊に折しも。柵に三太夫の亡骸も。一ツに乗る通ひ舟もやひを解て押出す。さを投るまや是や此。此東の千日寺淀屋の借屋と世の人も。夕邊の烟けさの露無常をしめす經文の如渡得船も目下。三十郎が涉とて。今に其名を舟よばひ。なき魂よばひ慕

ふ身は。お駒が父に泣別れはいく／＼と鳥が鳴。あづまを先に辰五郎。名残涙に水増て。爰も弘誓の渡し舟。死出の山猫うたかたの。聲もあはれも艀拍子に。三津の難波を漕連て歸りみかさの出小舟。さほの雫に。かき濁す。エイ／＼ヨホンホホンホホ佛の誓なむ阿彌陀供に涙に暮六ツの鐘を開捨て行

伏見京橋の段

地伏見より都に通ふ京橋や。髪結床も西東立別れたる暖簾に。ひいき／＼の紋所。豊といふ字を染込し。床の主計三右衛門留守を預る砂川の。新七が身の置所。世渡る業も剃刀の。刃を渡るよりあじきなき。地床には大坂豊竹の初日の噂取々に。京川東の連中が轍を下りがけ。舟を待間の高咄。詞ナント新七。今度のかはりを當さしたいのふ。噓三右衛門は機嫌て有ふ。イヤモウ機嫌の段じやござりませぬ。夫故今夜の夜舟を待すにけさ陸を下られました。大方大江橋の傳兵衛殿と一所に行積てござりませう。是は嚴しいゑらい／＼。大坂は一面にひいき連中が多いげな。おれも豊竹忠兵衛といふて川東でのひいき組。轍持て下る故。どうぞあした道頓堀へ夜の明ぬ先乗込たいが。イヤモウ一番舟なら能かげんでござりませう。何と近年東は當目が多いじやござりませぬか。ム扱は貴様もひいきじやの。地コリヤ咄せるとひいき口。向ひの床は西びいき皆口々に寄たかり。詞アレ見い東の芝居へ轍を持ていきをる。けたいじや／＼。何ぼばた／＼しおつても道具は筑後にや叶はぬと。地いふに忠兵衛が。詞ホウ道具とは何じや／＼。ヲヲ近年ではあいこの山の段。ちよん／＼と拍子木打と舞臺が一めんに手摺に成た何ときつい。ハ、ハ、ハ、こちの東の信仰記。金閣寺アノ大さうな三階造。せり上せり下。棧敷の勾欄へ挑燈と簾が一めんに出た所。サアぐつとでもいふて見い。イヤ置てくれ置上れ。地た／＼と立騒。わい／＼は大入の。フシ木戸口見るがごとくなり。地新七中に分入て。詞兩方から水かけ論にいふてはいつ迄も果しがたい。是の三右衛門は人に知られた東ひいき。るすの内

といひ爰は我等が貰ひます。元東西は水破のごとく。ひいきは芝居の花なれば。御ひいきがなふては立ませぬ。シマガ申。能といふ時には御連中がなふても町中が引しやります。御連中といふ物は。ちつとめてな時に見てやらしやるが本の御ひいき。又太夫操方も。東西鎬を削て精を出すも御ひいきを受ふ爲。あこひいきのない證據は。竹豊故事と申す本に。東西残らず夫々の褒美を仕分てござります。アノ書物が評判の鏡でござります。とかく狂言のはづむ時は幕引迄が上手に見へる。又不評判な時には花やかな場もめいる様に聞へる物で。とんと善悪は時のでき物。したが近年は御見物がめい人で。大がいてはお氣に入ぬ故いかふ案じにくいと申ます。とにかく芝居は東西共。立ふとふせふと町中様次第なれば。まんべんに御ひいきをなさるゝがよさそふに存ます。地拙者が公事の捌方あらゝ斯の通りじやと。フシ口から出次第言廻せば。地兩方手を打是は尤。詞ア、新七は物しりじや。自今は互に別懸にと。地いづれも中能辭義會釋。詞サアゝこちらは大坂下り。地舟いそがふと身拵。詞ソレゝ幟大事にせい。曲持して互落すな地皆いゝと立出れば。こちらも一遍問屋中。廻つてこふと西びいき打連。てこそ立歸る。地跡に新七大あくび。詞ヤレゝほつと氣上つたと。地見るや向ふへ新松が。詞とゞ様晝飯持てきた。ヲ、寒いのによくきたナ。ドリヤ茶を沸そと手を引て。地親子臥猪の床の内。のれん押入上跡へ。うかれ出る難波。都に隠なき其名も鹽の長次郎が。身に踏鹽の荷ひ賣。歌おてゝこてんゝ。すてゝこおてゝこおてゝこてん。殿御の心と同じ事。ちるかと思へば咲のが早い。おてゝこてんゝ。すてゝこおてゝこおてゝこてん。きよとい物じや。詞ヲ、イゝと。地呼聲は所て名うてのいがみ者。火皿の頭六が蚤取眼。詞ヤイ馬盗人の長次郎。今吞やがつた馬戻せ。戻しやがれと。地ねちかゝれば。詞是はいかな事。其馬は吞て見いと吞ておいて。よう思ふて見さんせ。いかな女中でも吞込ぬ。アノ大きな馬をからだぐち吞事じや。大てい息のはづんだ事か。夫てわしはアノナ口に疵をしましたはいの。ヤアちよぼくるなゝゝ。戻しやがらにやえらいぞよと。地荷を引戻しフシ争ふ所へ。地新七立出押隔。詞コレ兄者人おとなげない何てごんす

ぞいの。イヤさつきにあちら町で品玉取で。小刀や茶碗を吞て見せなければ。此馬吞を吞て見いとむりやりに吞して置て。今又戻せと無理いはるゝサア吞したは吞しましたが。あの馬は三十貫で買れた親方の馬じや。あれがなうては口が乾あがる。われおこさぬと家主へ斷るぞよ。イヤ頭六殿そりや悪い。こなたが合點で吞しておいて。そふ權柄にいはずと佗言して貰はしやれ。イヤ何のあいつに佗言せふ。シタガ吞したおれも悪い。貴様挨拶して貰ふてたも。おりや豊後屋へ送り荷を聞てこふ。そんならよごんす。跡でわしが能様にしていやりませふ。そんなら頼む。あたけたいな。地あたぶの悪いとばやき立てフシ橋向ひへと急ぎ行。詞こな様もよいかげんに戻してやつたがよいわいの。イヤサあんまり口が過た故。夫でぐつと吞てこました。ほんばにこな様吞したか。ハテそこが長次郎が飯綱の法。何ときよといか。きよとい序に兄者人。大坂の沙汰はどふでござんす。思ひ出すと胸もはり裂け。湯水も咽へ通りませぬと。地打しほるれば。詞イヤモウ方々で聞合すが。宗兵衛始惡者共は牢舎をしたといふ事計で。委い様子はとんと知ぬ。けふは師走の廿五日。モウ落着が有そな物じや。ハテよいわいの。きなく思ふて煩ふたら何と仕やる。随分患災で居て。辰五郎様の御せんとを見届るが肝心じや。ア、氣の弱いわるでは有。ヤアどれ／＼鹽の詠を持って向側迄いかにやならぬ。やつとこせふと荷を擔げ。コレ坊主め連て早う戻りや。地アイいでござんせと口輕に。いふもしんみの兄弟中。フシ思ひを胸に別れ行。地見やる日脚も八ツ下り。かごを昇せていつきせき京の肝煎佛市兵衛。詞おつと待てと鶴立させ。三右衛門殿一ツして貰ふかい。ハイ親方はけふは休まれましたが。私でもだんなかなされませ。サア急に大坂へ下るがあんまりばらつく一ツたばねて貰ひたい。地サア這入んせと床の内。髪結かゝるフシ世話咄し。詞大坂はどこへござんす。イヤアノ堀江へ。島原から仕替の奉公人が有て。ハテナア。大方其仕替も虫が付てといふ様なこつちや有ふ。そんな事ならえはいの。此夏島原の親方が。安い物じやといふて大坂で拘てわせたが。ア、きついでどうみやくじや。突出しから十日も働かぬ間に。ぶら／＼病て果ぬ故。夫で仕替にやりますと。地聞もどうやら

心かゝり。詞其女郎衆の年ばいは。大方廿五六でも有ふか。世帯崩れて有たげな。ア、勞咳にならねばよいかと。地いふより胸にぎつくりと若女房のおつるかと。案じる内に表なる。かごの内より手をたゝき。詞誰ぞ駕の衆湯があるなら一ツほしいと。地聞て新七は幸ひと。詞コリヤ新松よ。ソレ其土瓶ぐち駕の女中へ持て行て進ぜ。アイこりや重たいと。地いひつゝ茶碗を持添て行も親子の縁と縁。かご押明てヤアかゝ様といふ口を。袖でおさへて抱しめ。かはいや爰へどうしてと。胸の思ひをフシ目に忍び。地テモよい子やといふ聲が。洩聞ゆれば新七が是はと櫛で頭くはつしり。詞アイタ、い、こりや何とするぞい。ア、是はく。根をかためと思ふてすつてに櫛を。御免くんと紛らかし。根取にかゝる其中も。我ぞと駕へフシしらせの詞。詞ホンニまあふしぎな縁で思ひも寄ぬナア申。こな様の髪をわしが結ふのも。ふしぎな縁じやござんせぬか。ヲ、そんな物かい。こちらが商賣は猶縁づく始の親方で氣に入いても。仕替にやれば思ひの外。先で繁昌するが何ぼもござる。あの奉公人も大坂で有付てくれればよござるてや。イヤ申。何とあの奉公人を撞木町へやらんせぬかい。廿五六な弱々しい。涙もろい女郎が有るなら世話やいてくれいと常常の頼じやが。何とそこへ向そうな。むく共く最究竟。瘦さずて弱々しい。其涙もろさといふ事は朝から晩迄泣通し。割符の注文じや。貴様世話してくれぬかい。ソリヤモウ口錢の取る事。そんなら私に預さんせ。一兩日の内に有付てやりませう。夫は逢たり叶ふたり。大坂迄速て行きや。飯代の舟賃のと。よつぼどの失却。そんなら貴様に預ましょ。シタガ貴様の所はどこじや。わしは砂川の長次郎が弟の新七といひます。いかにも砂川の團扇屋の東隣。そんなら貴様世話にして賣立て下され。ヤレく嬉しや。ざつと濟だと表へ出てこれく。聞しやる通りあの人の世話で。撞木町へ入込む筈。こなたも大坂は顔もさそふし。幸ひな勤所。聞日前に来て逢ましょ。サアくかごの衆太義ながら出戻りじやと。地いそくすればおつるも嬉しく。詞馴染もないにかお世話。かごの衆休んで下さんせと。地餘所に取なす挨拶も。フシしらぬが佛の市兵衛は。そんなら新七頼ますと。氣も空蟬の空駕を。かゝせて京

へ立歸る。フシ跡に二人が夢心。詞新七様か。おつるかと。地わつと計に抱付。泣入く引しめて暫し涙に詞なき。詞さつきにから鴛の傍であの子にぼつ／＼聞ましたが。今はおまへも兄御と一所に砂川にござるとやら。そういふ事なら文でなりと。なぜ便りして下んせぬ。イヤモウかふいふ難義の身の上。そなたに知して苦にさすが氣の毒さに。イヤ申。夫はそふと悲しいは其お姿。上張に腰巻帶。夫が淀屋の。地新七様の形かいのふ。見ればお顔もしよげ／＼と。詞いかめ苦勞をさしやんすそふな。コレ新松。鳴が居なんて淋しかつたか。アイわしや毎日戻らんすかと。門見て計居ましたはいなふ。モウ今度から灸も居ふし。悪い事もしよまい程に。どつこへも行て下んすな。夜は寝る時淋しいはいのふ。ヲ、そうで有る可愛／＼。モウどつこへもいきやせぬぞや。何と是が片時も。此子に別れて居られふかいなア。コレおつる。何にも知ずにあれを聞きや。そなたの行きやつた其晩は。おれも夢やら現やら。夜が明てからの其淋しさ。此かゝ様はどこへやつたと。坊主めはせがみおる。針箱や簞笥が目にかゝると。やつぱり内に居る様で。何ぞのはづみにはおつる／＼と。名を呼だの幾度か。夫から段々おもやの騒動。夫故夏から坊主を連れて。砂川の兄貴の内へ掛り人。何を渡世の術も知ねば。思ひ付た此髪結。そなた迄に苦勞させ。あげくの果に其病氣。食はくやるか。氣色はどうじや。テモまあきつう瘦やつたのふ。イヤモウ瘦いて何としませふ。鳥原には新町の一ツ家衆が有故。淀屋のもめの噂取々。夫聞度に私が案じ。老松町へ幾度か文を下せど有家知ず。若巻添にお前迄。悲しい所へござりはせぬかと。けふの今迄も生た心はなかつたはいなア。最前思はず新松が顔見た時の其嬉しさ。内にはお前の聲はする飛立様に思へ共どうした障が有ふも知ずと。見合す暫しが千時の心。此氣じや物どうしてマア。地伊達や浮氣な色里の勤の中に居られふか。推量してたべ新七様と。夫に寄添子に縋り嬉し涙や溜涙。わつと一度にむせび入。袖は流の淀川や。フシ車も沈む風情なり。フシ折から表へ走來るあづまは涙かた息に。跡を見先は爰そふなとかけ込顔は。詞ヤアあづま様。新七殿かおつる殿。地是はどうして何故と心ならずも尋れば。詞サレバイナア。三十郎様

がお世話故私が事も首尾よく済。御夫婦は八幡に御出道迄同道しましたが。わたしら二人は八幡で別れ堤傳ひに来る道で。大勢の馬士が。アレ／＼うさんな者じや。權藏様へ連れて行と。取巻所へ鹽賣殿が來かゝつて惣々を追ちらし。京橋の東詰髪結床へ早う行けとの指圖故。地爰迄逃て來ましたと。フシ咄も涙の震ひ聲。詞ハレヤレ夫はひやいな事。其鹽賣は私が兄貴。爰には暫しも置まされぬ。おつるは是からあづま様を連立てまあ砂川へ。コリヤ新松。こちの内へ案内せい。地早う／＼とすゝめられ。そんなら跡から辰五郎様も。おこしましてと言捨て。フシ皆々打連急行。地程もあらせず辰五郎はこけつ轉びつ走込。詞コリヤ若旦那。新七かと。地いふ間程なく長次郎が跡に火皿は聲高に。詞ヤア鹽賣め待やがれ已等が世話やく二人のやつらは辰五郎あづまに極つた。權藏様に此頭六が頼まれて居る尋者。引く／＼つて連れて行きや一廉の出世するはへ。ハ、ハ、ハ、此長次郎が息有る内にびつとでも障つて見い。ヤア馬盗人のどうずりめ是をくらへと拐追取。地擲かゝるを引たくり。諸脚ないで連枷がち。うんと計りに火皿の頭六フシやにを亂して死てけり。詞ヤアこりやごねた。脆いやつと。地聞て新七辰五郎も走出て仰天し。詞コリヤマア兄貴。相手が死れば解死人が。サア／＼よいてや。騒ぐまい／＼と。地納屋の下よりフシ馬引出せば。地二人は驚きこりやどうじやと。いふをも聞ず頭六が死骸。鞍にしつかと括り付。詞コリヤ最前おれが呑だ火皿めが馬。飯綱の術で呑だみと見せ納屋下に繋いで置た。種がなければ品玉も取れぬ。有こそ幸ひ。ヲ、それ／＼。吉田一保が講釋で聞て來た。彼等の相仲といふわろが。跡先知ぬ雪道を馬で我家へ行んだげな。年比馴し頭六が此馬。儕が宿へ連行と。地拐り上げ追立れば。眞一文字にかけ出す。こなたも蹴立る砂煙。砂川さしてぞ三重へ急ぎ行

深草砂川の段

フシ齊はやしの組に向ふ七日は七色の葵。祝へば災難もないぞ七瀬の砂川に。渡り兼たる浮世川。地辛鹽屋の長次

郎。掛人連二女夫。氣も春風は吹ながら。フシ暖ならぬ暮しなり。地新七が妻のおつる。襷袢取あへず。詞コレハ

コレハお二人ながらお手のきめのあれるに。モウよしに成れませと。地姐直せば。詞イヤナウおつる。是程の事に手が

荒てよい物か。病弱いそなたも。其様にしほたらと。柴薪の干入。少なと役に立かと思ふて。ほんに珍らしい所で正

月をする事じや。來てからモウ十日餘りに成るけれど八幡から便もない。シタガ三十郎殿のいかる世話に成たナワあ

づま。夫いな。此間から新七殿夫婦の衆に咄して。又涙を拭しましてござんす。わしが爲に死て下さつたお十様の中

陰。落所は門松の七五三飴のといふけれど。地私はやつぱり此様に。袂に珠數を放しませぬと。又思ひ出す涙聲。お

つるも俱に女の情。そう思召すが身の冥加。随分御回向なされませ。詞ソレ／＼其冥加で思ひ出した。おれも此様に

艱難をするはしか。アノ新七が陰に成陽に成異見したおれが放埒。身に成た新七を追出し。仇敵の宗兵衛めに欺され。

廣い大坂にも得居いで。先から先へ世話に成る人とは言へば。勘當仕た新七が兄貴。親の冥加には盡果る。今では新

七が冥加によつて。此命が續と思へば。是迄に主顔して呵つた事が恥しい。おつる詫言をしたもと。地打しほるれ

ば。詞ア、勿體ない事御意なざる。そんな事根葉に持。新七殿じやござりませぬ。此間からも長次郎様の世話助と。

毎日／＼京橋の床へ。けふも助に行かれました。夫はそうとあづま様。どうした事やら長次郎様が物を言しやると。

顔ふつてござりますすがかう一所に居る私共。傍から氣の毒に存じます。マア様子を聞して下さりませ。サア其事には

たんと様子が有事なれど。モウ問ずとよいわいの。アノ長次郎の世話に成ながら物いはぬは。よく／＼の事が有ると

推量して下さんせ。イヤコレあづま。おれもすつきり合點が行かぬ。その様にいはれぬといやるからは。どうでろく

な事じや有まい。コレそなたに手でもさいたと。いふ様なこつちやないかや。イ、エそんな事じやござんせぬ。まそ

つと大それた事がござんす。ヤア大それたとは大抵のこつちやない。どうやらおれもむつとが來た。様子はどうじや

早ふ言や。サア私しやどふも言れぬはいな。イヤそふいやる程聞にや置ぬと。地俄に詞もつめ立。むしやくしや腹

を辰五郎。おつるもなまなか言出して。格氣にこけ込込場の品。詞申。餘所の聞へも氣の毒なお二人ながらマア奥へ。ヲ、行く。地。とかい立て。明る襦もぐはつたびし。詞テモきつい肝癢の。おつる睨見て下んせ。何ぞいふとあの様に。サアあれもお前が大切から。いて御機嫌をお取なされ。地ヲ、そうせうと立上り。詞ホニ此新松はどこへ。アイ長次郎様が通て萬歳に。ム、萬歳とは。ア、イヤ萬歳を見せる逆通立て行きました。ム、夫で顔も見ぬ筈。地アレ忙しない呼しやんと。フシとつかは一間へ走り行。地おつるはそこら片付てよつぽど日脚も傾いた新松も戻りやる時分。暖な物拵よと。棚からおろす米炊の。桶には露のフシ薄しめり。詞ほんに長次郎様も留主といひ。打蔀の用意もなし。地一向宗の内なれば神棚は元より。正月のかちんさへ留ぬ棚元走元。マア茶の下と指くべる。もずへの柴にくゆる火の煙も細き門口へ。新松先へ長次郎萬歳出立のかけ烏帽子。鼓ぼん。内方にござりまするか。有けうがりあら玉や。年立返る戻りがけ。ホウこちの内じやと。つと這入ば新松が。詞コレか。様。足がつめたい寒かつた。地飯喰たいとフシおど。震ひ。詞ヲ、寒かる。ひもじかる。地道理。と抱しむれば。詞コリヤ。伯父が買て喰した焼餅。まだ腹はえい筈じや。おれも一杯引かけたりや中々腹は跡へは寄ぬ。けふは鹽の得意衆へ廻つたりや。テモ可愛いらしい萬歳じやと。祝儀もお鏡も米もたんと囃ふて來た。ヲ、夫はでかしやつた。見事よう舞つたか。舞た段か器用な坊主め。ア、新七やあなたに見せたかつた。シテお二人ながら機嫌はよいか。アノ新七もまだで有る。サア。祝ふて舞ふかい。ヲ、わつけもない。今朝から歩いて草臥てござんしよ。そして餘所でも有る事か。めんめの内へ戻つて置て。ホ、。イヤ。おつるそうじやない。去年の正月は浣屋の内にござつて。嘉例の萬歳がめてたい盡し。今年は此渡草の侘た所て嘸屈託。そこを思ふてあなた方を祝ひますのじや。コリヤ新松よ。餘所て舞た様に合點か。地あいと黙く小萬歳。伯父は鼓をしやに構へ。二人徳若に御萬歳とや。君も榮へまします。卯月の末の花笠。思ひ。の玉だすきつぽに入て田を植。田歌謡ふて植給へ待ふ。あつちやつ

ちやこつちや。田歌を謡ふて。ハツアイヤぞんぶり。ちよちよんぶりちよんぶり。山田を植
 れば。蛙が腰じや。腰をふつて。蛙が腰じや。腰をふつて。蛙が腰じや。腰をふつて。蛙が
 腰じや。腰をよつて。田歌を謡ふた。ハツア。イヤエイ。ヤア。シテ詞大和の國のあふせ餅。ねばい今の江州篠原餅。
 ねばい。いかに聞か早乙女。ヤア。ハア。打たり舞を見まいな。正月の始は。
 齊太郎が孫ちやくし。鹿に馬鹿に立出て。大のぶり。削らせ。はまの毬打打上。エイヤツトモ打たりな。打たり舞
 を見まいな。二月はきさらぎ。八幡山の御神事。御かぐらを参そ。鈴をふつて。しやんこ。鈴をふつて。し
 やんこ。鈴をふつて。しやんこ。鈴をふつて。しやんこ。鈴をふつて。しやんこ。鈴をふつて。舞時
 は。大鼓小鼓。ヤアハアドウ。と打たりな。打たり舞を見まいな。四月は中の申。七社の神の御興を。船に乗
 せ奉り。テウサヤサツサ。テウサヤ。千歳樂萬歳樂。詞ヤイ。今日は江州滋賀の郡。山王坂本の大祭。
 常には打ぬ大鼓なれ共。お家御祈禱御繁昌の爲。一拍子しらべて見やうか。ズド。ズド。ズド。ズド。サツ
 サなもてや。サツサなもてや。サツサなもてや。大太鼓ズド。ズドドン。サツサズド。ズドドン
 共打たりな。打たり舞を見まいな。八月は駒迎へ。牧お出しの荒駒。連銭羣毛にさび月毛。烏黒の月額。いづみ
 轡の白みがき。がんしとかまして。サツサ馬に乗た。ハア。シ、ハイ。シイシハイ。シイシハイ。腰の鞭迫
 取て。かけや行共打たりな。打たり舞を見まいな。ヤア。ハア。ヤア。シテ詞十二月は大どし小どじこさん迎。
 節分の夜に豆を煎時は。鬼は外福は内。地打出の小槌打入て。四方に四萬の藏を建。樂しかれ共祝ふた。詞サア。く
 めてたい。かふ舞た所が取も直さず淀屋のお庭。お手代新七様のおゑ様。そこらに盆が有る並べて下さりませ。
 盆が足らずば。姐でもよごります。あなたのお臺所の。姐は二間四方。大釜の下を焚火吹竹も一間餘りも有た故。
 何でもいつかい物を見ては。淀屋殿の杓子じやの。淀屋壁の淀屋橋のと。名を残された長者殿。唐の咸陽宮も時節到

來。コレ此お鏡は辰五郎様とあづま様。此三重は新七おつる新松。長生を祝ふ長次郎が寸志ずいとすへて下され。扱飯米も心置すと。コレ其升と桶を。地爰へくと。袋の口から桶と桶。詞一升。二升。三ツ。地四ツはいつしかに。手品もゆらに計込。八ツ九ツそれ一斗。詞何ときつか。始末せずと潤魁たきや。ホウ新松めもころり山椒軒が出る。冷さぬ様にしてやりやと。地いふにおつるが。イヤ申し。詞新松計じやないお前も嘸草臥少横にと挨拶の。半ばにあづまが襖を明。よう祝ふて共嬉し共長次郎には目モやらず。詞ヲ、新松は寝やつたか。此路ぬぎやる事はいと。地蒲團をさせる烟草盆。フシさげて傍に押直る。地長次郎手をついて。詞申あづま様。イヤお大様。今日は七草の壽。御夫婦を祝ひまして。少分ながらかちんのお備へ。御機嫌を直され。長次郎とふせいかうせいとお詞を下されなば。地此上もなき仕合。コレおつる。俱々にお膝をと。疊に額をさげにける。詞アイ先程も留主の内。お佗言を申たりやひよんな間違てナ。辰五郎様の御機嫌が。ホ、夫は氣の毒。私めも申上たい事が海山。殊にけふは奥様母御様の。月こそかはれ御命日。此様な穢い所に置ましお顔を見るも。昔の御縁の盡ぬ印。物おつしやる事がおいやなら。たつた一筆書て成共ナ申。ヲ、書て見せるに及ばぬ。不義者に向つて言出す詞はないはいや。ム、私を不義者とは。ヲ言出せばかゝ様のお名が出る故夫ていはぬ。ム、かゝ様のお名が出るとおつしやるからは。ハア、成程。一途に申し召せばお腹立は尤。申たいとは爰の事。是には段々様子有共。何をいふ共お聞入は有るまい。コレおつる。そなたとつくと聞てたも。此長次郎が其昔は。アノあづま様の親御。大星由良助様に仕へし足輕。寺澤吉平と云し者。御本國開城の後。諸家中残らず一黨なされ。敵横山を討んとの御企。某も御訴訟申。何とぞ連判の人数に御加へ下さらば。有がたからんと願ひしかば。大星様の仰には。斯連判一味の旁。本望を達しなば一人も生ては居ぬ。死後に至て判官が家臣共。兼て譜代舊恩の者と思ひしに。敵を討人数が足りて。陪臣迄加たりと言せては。大殿小栗公の靈魂迄の御恥辱。汝が忠節を感じ。連判に加へてとらせん。ガ中々供には叶はぬ。其方が心底の神妙さ。妻のお石娘の

お大を預る。但馬へ送り届よとの御頼もだし難く。幸ひ阿波の十郎兵衛舟が便船にて。國を立しは巳の五月上旬。地思はざる難風に出合。名もしらぬ一ツの島へ吹寄たり。詞ソレ覺てござりませふ。お前よりは母御様。正氣を失ひ給ふ難義。所て船頭十郎兵衛が申すは舟中には陸へ上り。暫く歩が樂じやと申故。奥様に我等が付。舟より上つて御介抱。地せめて水を指上んと。邊を捜せど一滴の水もなく。漸山奥に分入。谷の峯を汲持て歸りし所に。奥様は深手の苦しみ。なむ三寶と氣も狂亂の様に成。元の磯に走つて見れば。お前を乗た舟はなし。又立歸つて様子を聞ば。十郎兵衛が所爲と計。急所なれば事切て敢なき御最期。其時の心の内は。どの様に有ふと思ふて下さる。詞ソレ悲しいかお前も泣しやる。まだ跡を聞て下さりませ。お死骸は土中に葬つても。寺もなければ何一ツお備申物もなく。私が阿彌陀經や御利讀て。お甲ひ申す内も。心にかゝるはお前の事。憎くいは十郎兵衛め。どうぞして此敵を討うくと思へ共。離島の事なれば舟の便は元より。多き物は狐計り。地栗や稗を朝夕の糧として。三年餘居る内に。多くの狐に顔見しられ。詞陀枳尼天の法をば習ふとなしに覺込。飯綱の法にて漁船に移り。お國元へ行て聞ば。大星様には鎌倉にて本意を遂られ。御生害と聞た時は。嬉しいやら悲しいやら。奥様の敵は阿波に居ると聞て。四國の地を捜せ共行方知す。此上はお大様を尋なば。十郎兵衛が有家も知ふと思ひ。此深草へ來ても鑑ひらなか。何をどうとの身過もしらねば。國元の由縁を頼み。赤穂鹽を賣してもろても仕付ぬ業。地長次郎と名をかへて覺た飯綱とまぜこぜに一升の鹽も一斗に量り。町中をあるけ共。詞長次郎が鹽は遣おけない。高い物じやと取々の噂故。地春に成て商はなし。ほんに貧すりやどんな萬歳。詞ヲ、ほんに夫よ。去年の夏大坂天神のお旅で。阿波の十郎兵衛に出合しが。新七はたつた一人打辯にあふては居る。雨は車軸しだらでん。弟をいたはる其間に。見失ふた十郎兵衛。大坂にも居をらぬ故。地夫から山科四條の道場。大星様の住てござつた所々。お前様を尋るやら敵めを捜すやら。大徳寺から朝野の稻荷。狐馬に乗た様にきよろしくした長口上。申さねば身の明りも不義者でない一々次第。御得心がいきました

かと。我身の上にしむ鹽の。うき難難の物語。あづまも扱はと疑も。目迄腫たる涙にて。そうとは知いて此年月。そなたを不義と思ひし故。明していへば噺様のお名を汚すが悲しさに。夫とは得いはず心の内で。恨て計り居ました。いかる苦勞をしやつたなふ。コレ手を合して拜ます。堪へて下され吉平殿。今の咄で何もかも。思ひ合する事がある。詞わしは舟に居た故に。かゝ様の御最期も。何にも知ぬ波の上。地風に任せて大坂の川口とやらへ舟を着け。十郎兵衛が言事には。詞由良助は敵を討に行てなれど。まだ一年も二年も隙が入。其内には何やかや金が大大分入る程に。親御へやる金の才覺。おれが言様にせよといふ。地わしも年はまだ行ず。とゝ様の爲に成金の才覺。どふぞして頼んだりや。詞直に新町へ連て行て。傾城にやつたはいのふ。今わがみの言やる通。かゝ様さへ殺す大悪人。身代もとゝ様へは大方やりは仕をるまい。ナフ吉平。地思へば情ない。とゝ様もかゝ様も同じ双て果給ふ。命日忌日の弔ひも餘所になしたる其罰が。報ふて今の難義かと。身をかこちたる憂涙。おつるもつたふ貰ひ泣袂を。フシ絞る計りなり。地長次郎は泣ぬ顔。詞此身の言暗が立たれば。モウぐわらりつと夜が明た様な。ホ夜が明るとモウ日の暮。おつる。何ぞ焚やらぬか。地あいと以前の桶の内。興さめ顔にコレ申。詞さつきにたんと有た物が。ラ、其筈。一升程有た米。一斗に見せたは此鹽の長次郎。ソレ盆に乗た餅も見や。ほんに是も皆違ふた。サア近江燕の一番物。株を放して入て戻つた。マア祝義もさつと濟だ。只何事も七日七草。内裏様にも粥を参る日。其無を粥柱。齊の藥早ふたきや。地アイとおつるが走元。手桶をさげて水汲に。あづまはおびへる新松を。ねん／＼ね／＼叩付。詞サア吉平も奥へおじや。ア、申。吉平は穴賢やつぱり私は長次郎。ほんにそうじや。地こなたの忠義の志主に咄さばお悦び。詞サア私も出た次手。六條様へもお禮申。御法事にも合ました。とかく佛法と藥屋の雨は。外へ出ねば知ませぬ。殊勝な咄はマア奥でと。地打連一間へ入相の。フシ鐘より心兼合の。角行燈もほのくらき。障子の内へぞ伴ひ行。地爲業仕廻て新七が。戻る姿も垢付し。木綿の引ばり兩の手を。萬歳二人が聲高に。詞昨日もけふも付

込て。とつくりと見届た。名も聞て置た長次郎といふ者。萬歳の街事。國元へ連て行て。法に行ふ爰へ出せ。サアノ申。道々もお佗申通。ちつと様子がござつて。イヤサ様子も絲瓜も重ての見せしめ。佗言聞ぬ引出せと。地わめくも内へ氣を兼て。調サやりましては私が顔が。立ぬといふのか。こつちは猶顔が立ぬ。代々御用を勤る大和萬歳神道佛道の二村から。毎年の正月五日。今年の様に間が有ると十三人。只の年は十二人。禁中の役を勤る此顔が。サアお顔を立ましての佗言。禁中公とやら。物事が和かに町人も及ぬ。素袍袴に掛烏帽子。強はつた手に鼓の鳴音。イヤはや器用な。お結構なと。地手を摺詫れば付上り。調佗言も只はならぬ。佗代出すか。ナア捻右衛門。ヲ、元良兵衛がいふ通。佗代は銀二枚。ア、成程佗代て了簡有ば。出しませうが只今はどふも。イヤ今出さねば了簡せぬ。サアそこでござります。萬歳の街して。歩く程の身代。二枚といふ金が有ば。何しに贅事致しませふ。どうぞ明朝迄の御了簡。ム、いか様。そんなら今夜は待てやる。明六ツがごとと鳴と。地取にくる。捻右衛門こいノと。フシ肩臂はつて立歸る。地跡を見送る向ふから。手桶をさげて。ノフこちの人。調今を殘らず聞て居た。ハテえいわい。内へ入ては兄貴の手前。わつばさつばも氣の毒。一寸廻に行なした。地マアノこちへと夕暮過。フシ戸を引立んとする所へ。地爰じやそうなとずつと入。調ホウ新七殿内にか。是は島原の市兵衛殿。ようこそお出と。地おつるが挨拶。調コレお出所じやござらぬ。京橋で逢た時。そちらに口も有やうに言しやる。連ていんでも病身者。藥よ。鍼よ。口が付て廻る上。油元結小遣も。取かへねば成ませぬ。預ていんだも勝手づく。萬字やからせがむ故。埒しに來たどふさしやる。ハテどうといふたら病身なあの人。卅兩の立金したら。ハテそりや勝手次第。其金は今出ますか。今とふいては。サそんならやつぱり外へやらねば。サア。外へやれば今迄に。能口も聞ふけれど。所詮あの弱い人を見ながら。イヤほんにそうじや。病者からおこつた仕替。世話しても談合はできまい。立金さへ出る事なら。サアどうぞあすの朝迄。イヤノノ。せりノノとにえ返る親方。一寸も待ぬ。コレノ申。貯が有程なら。女房寛

は致さぬ。才覺といふても今夜中。翌の朝は違なふ。ム、よい。そんならこなたの内儀じやの。ハテ男どしの立引。違も有るまい朝日來ふ。然らば左様急度待ます。ヲ、證文も懷に有れば。京へいぬる迄もない。今夜は撞木に泊て。朝早々。フシさらばと出て行。フシおつるは夫の顔打守り。調あの人といひさつきの萬歳。朝といふても間のない事。どうぞ。地用意がござんすかへ。調ハテ夫を安じる事か。おれも去年から爰へ來て。顔見しられた一徳。京橋邊の旦那衆が。賴母子をして下さる筈。此身に成て商賣こそ賤しけれ。心は昔の新七。目くさり金の卅兩や五十兩。賣残した鎗身の刀。何時でも金になる。きなくと思やんな。まだ顔の色も悪い。坊主が傍てモウ休みや。アレ墨染の鐘が鳴る。更ぬ様でもモウ四ツ前。奥にも皆休んでか音もせぬ。兄貴にちよつと逢たいが。是も寝てか。アイ。晝の草臥。大事な事なら明日でも。ヲ、さうせう。ソレ足元の冷ぬ様に。コレよう着て聞え。フシ隔の一間。別れ入さの宵月も。傾く枕の添臥に夢と夢。フシとや詰ぶらん。と。更渡る灯火のかけさへ。フシ細き心から。新七は兼てより。かゝる用意を死出立。麻上下に白無垢の。片手に刀右の手に。何か様子は白紙に。フシ墨黒々と晝置を。竹に挟んで拂て。疊の間に指足も。心靜に押直り。地妻と我子が寢姿を。見まいとする程目に洩て。胸迄せぐる苦しさを。堪ゆるつらき憂涙。フシ袖に餘りて見へけるが。調ア、迷ふたり何事も。此晝置に残すれば。跡で同向を頼ぞと。地刀追取給くつろげ。ぐつとさしもの覺悟にも。苦痛にせまる一聲は。妻子が夢共現共。調ヤア新七様コリヤ何事。何故に腹切しやんす。地譯はどふしてと。地紐敷けば新松が。調と様はアレあの様に。葬禮を着て居やしやるが。こちの内から葬禮が出るのかや。夫でか。様も泣しやるか。どうやらおれも泣たなつて。目が明れぬと。地ぐわんぜ泣やら悲しむ聲。耳に入てや辰五郎。あづまも俱にあはて出。調コリヤマア何故どうしてと。地取々いたはる介抱に。新七くるしき目を開き。調女房何をうろたへる。死る子細は其晝置。いはれぬ聲を立た故。あなた方のお目を覺させ。見苦しい此有様。見せまして恥しい。ア、是も何て益ない事。御免されませ。ヲ、身を揉やんな。

コレ氣を慥にと手に取上。地しばたゝく目を押拭ひ。詞申譯の爲書残す一札。此新七と申者。幼少より御惠を以て。成長たる御恩のお家。憚も顧ず御諫言申上度。阿波ノ十郎兵衛と申者を頼。置侍を拵。候事。假にも上を輕し。みたる越度。其御咎より家の騒動と罷成。漂泊の御身となし奉り候。アレ聞たか女房。泣ずとお佗申てくれ。アイ。わたしじやてゝ今更。何とお佗の仕様が。わしよりも長次郎様へ。頼んで置て下さんせ。地起しましてと立上り。明る障子の佛間には。灯明かゝげ香くゆらせ。りん打かける肩衣に。彌陀成佛の此かたは。今に十劫を経綸へり。法身の光輪際もなく。詞新七てかした。潔ふ死てくれ。世の盲冥を照すなむ阿彌陀。詞ア、コレ申。お前途が其様に。ヲ、此辰五郎が讀からは。佗言も入ぬわいの。ヲ、そうてござんすと。地あづまも俱に手に取上。詞漂泊の御身となし奉り候。付てはお家第一の寶。小栗様より拜領有し。照月の掛物を失ひ。何とぞ尋出し。再び御手に入度候へ共。今に有家知不申候。御申譯の爲と讀さして。へツエ是程の事なら死す共。ナフあづま。アイ死て賣が。出るかいのうおつる殿。サイナ。早まつた事して下さんしたと。地取付歎けば長次郎。一心不亂に南無阿彌陀佛。南無阿。地こなたも苦痛の手を合せ。詞死ぬ先から回向の文。知識長老の引導より。來世の土産兄者人。嬉しうござる。忝い。有がたいは辰五郎様。御介抱を受けるに付。地思ひ出せし昔さんげ聞てたべ。詞兄者人も此新七も。元中國の生れにて手一合も取た武士。故有て親子國を立退。兄吉平殿は大星家へ奉公。我は親と諸共に大坂に忍ぶ内。二人の親は病死の跡。地十歳そこの我なれば。寄方もなき身なりしを。詞藤田小平次といふ人に養育せられ。後者修行の歌三味線。新部子といふ憂難難。つらい物は冬の空。寒聲には橋の霜。二階の窓から顔出して。洗磨は藝の道。地藤田靱負と改て。十六の初舞臺。詞霜月の顔見世に。座附の口上いう中も。見物の顔見るに付。一人の兄貴はどうしてぞ。似た顔もない物かと。親の事迄思ひ出し。俯いては涙を隠し。コレ泣て計をりましたはいのふ。其年も暮明の春。大旦那與茂四郎様お目に入しは御縁と御縁。大分の金にかへ。此身をお家へ引取て新七と付給ひ。物書算用算盤の粒一文

錢きなか。金銀の出し入迄。われに任す大事にせよ。末々には立身させん。辰五郎が事も頼せと。御意の詞も道言と
 成上つたる此身の程。地お情御恩を忘兼。あれでは家の御大事。かうでは家の爲にならぬと。異見の爲にした事が。
 却て仇と成たるも。若氣の一途に跡先へ。心の付ぬ無調法。詞親兄者人の顔迄が立まいと。思ひ餘りて此有様。最期
 のさまは科人の。仕置も同じ心にて。地此紙帳の書置が。家代々のお位牌へ。せめて此身のフシ言譯そや。詞コレ申
 し兄者人。先立は不幸ながら。何事も頼申す。何とぞ寶を尋出し。小庵縁辰五郎様。あづま様のお身も納る様。新
 松が事おつるが事。頼むくも。地思切し。次第による深手の苦痛。願以此功德。平等絶一切同發菩提心。往生安
 樂國。地南無阿彌陀佛の聲諸共。主に忠義の梓弓。フシ此世の弦は切果たり。地皆々わつと泣聲に。新松がおろく
 涙。詞コレと。様いふのと。様と。地ゆすれと甲斐も亡骸を。見ては泣立ては泣。足摺したるいちらしさ。伯父も佛
 間を走出。新松を抱抱へ。詞道理じやく。かゝ様く泣慕ふた母親。戻りやつてから嬉しそふに。悦んで居た物
 が。又て。親があの如く死て行。兎角親に縁のない者じやなア。かはいやく。シタガ新七出かした。追は侍の胤
 じや。立派な死際。見事じやく。いつやら歌舞妓狂言を見た時。アノ坂田藤十郎がナ。まつ此様な形て切腹した所
 めい人じや。上手じやと。譽も有。泣も有た。其芝居事は外でもない。おれが内でおれが弟が。立派な切腹。なむ
 阿彌陀佛く。御開山の掟には。此世から助つて居るとの教なれば。新七は死だのじやない。此世の苦を助つて行の
 じや。新松も悦べ。おつる泣やんなく。おれはこれ笑ふて居るはいのと。地餘所目つかふて泣顔を。隠す心は中々
 に。フシ泣よりぞ猶節なけれ。地内の歎に鳥の音も哀催す朝嵐。門口に案内させ。詞八幡より使として。木津三十
 郎來つたり。爰明られよと音なふ聲。地スハ吉左右のしらせぞと。悦ぶ中にも悲しむおつる。フシ立て門の戸押開け
 ば。地家來に何か言含。しづくと打通り。詞いまだ未明の時分といひ。旁の爲體。心得がたしと邊を見廻し。ヤア
 ヤア何新七は生害せしな。エ、今一足遅かりし残念く。辰五郎殿には我々が便無待遠。掬先悦ばせんはお大殿。お

十が首を以て。其元が首なりと鶏に添。辰五郎殿誤りなき一々次第。中將殿へ申せしかば。早速詮議落着有て。野
 田權藏に合體し。放埒をすゝめた。科のおこりは手代宗兵衛。一味の者共以上四人。千日寺にて獄門のお仕置。付て
 は徒屋の家屋敷沒收せらるゝといへ共。元來科なき辰五郎。契約の通り。中將殿の息女に娶せ。八幡において二百石
 の分地を分。近々婚禮取結ばんと有間。嬉しくも思はれよ。お大殿には願ひに任せ。表は立ねど妾分。何か逼迫の折
 から用意も有まじ。拵の料黄金三百兩。是は中將殿の御心付。今日身が屋敷迄。迎の乗物持せたり。地それくと詞
 の下。はつと昇込乗物の。疾しや遅しと立出るは。詞ヤア母人か。小庵様か。ヤレなつかしの辰五郎やと。地互に手
 に手を取りかわし。有し事共つどに。いふも語るも嬉しさに。フシ先立物は涙なり。地三十郎重て。詞三太夫死
 後の願ひ。お駒共夫婦と成。木津の家相續すれば。中將殿にも殊ない悦び。萬事悦ばせんと思ひしに。地早まりしは
 新七。最期の子細は是成かと。書置取て讀内も。小庵は分て心根を。思ひやりたり主従の。悔歎に目も春の。フシ夜
 はほの／＼と明にけり。地鐘を相圖に二人の萬歳。約束の佗言代。二枚の銀はサアどうじや。詞出来ずば長次郎引立
 ふか。どうじやの／＼の催促半。市兵衛がいつきせき。詞おつるの身の代三十兩。サア受取ていかいと。地口々わ
 めくも指當る。おつるが當惡長次郎。詞エ夕部も夫と知たれど。弟が身にかへて。かばふてくれた志。才覺する内
 暫くと。地言せも立すヤア萬歳の賢者め。速て行ぬるサア來いと。引立かゝるを三十郎。透さず寄てき腕摺。フシ右
 と左に投付られ。地コリヤどうすると起上。額へばつたり二兩の小判。詞小言いはずと早いなぬか。ハイ／＼。二枚
 の銀に小判で二兩。エ忝い。是がほんの徳若に。御萬歳とフシへらず口して立歸る。詞イヤそな男はおつるが身の
 代卅兩。地ソレ受取れと投やれば。詞ホイ有がたい。踏れうかとかゞんで居たが。物敷いはずに能仕合。アイ證文も
 お戻しと。地數改めてうちがいの。フシ島原さして歸りける。地人々はつと一禮を。詞ア、いや／＼。何事も是より
 八幡へ同道せん。急いで用意と勸れば。地お大は願ひと手をつかへ。詞私は八幡へ行事。ム、いやといふは心に入ぬ

か。辰五郎の妾には。ア何のいな。夫は私が望の通。忝ふござんすが。討ねば叶はぬ敵が有る。ム、其敵とは。アイかゝ様を殺したは。阿波十郎兵衛と申者。何と。海賊の張本。十郎兵衛はお石殿の敵よな。したり。其敵の十郎兵衛。近江の領主に仕へ。今の名は麻柄一角。まだ幸ひの事こそ有れ。新七が奪はれし照月の掛物。きやつが手より領主へ指上し由風に聞。當十九日お弓の神事。一角が代参にて。其時に其かけ地。改の爲持参の筈。我も迎に出合なば。萬事手引は指圖せん。ハ、ハ、嬉しや忝やと。地悦ぶお大長次郎も進寄。詞我本名は寺澤吉平と申して。大星殿に仕へし足輕なれ共。元來は武士の勲。弟新七がさいこの願ひ旁。助太刀の御供にと。地頻て願へば尤。御供は貴邊が心任せ。お大殿への餞には。幸の此刀と。地死骸の一腰手に取上。血押拭ひとつと見。詞叔こそ。此銘は葵下坂。下坂の讀有連。武家に賞翫せざれ共。故有て葵の古文字を居かへ。當代に是を用ゆ。併商人町家の手に觸る時は。必其身に祟るといふ。今町人と成たる新七。祟は眼前アノ切腹。お大殿には又格別。父大星由良助殿。晋の豫讓が例を慕ひ。漆をさし炭を呑ん計。心を碎き義を盡されしは。今日日本武士の鏡。其武名を受傳へ。敵に葵の吉左右めてたし。追て本意を遂られよと。地刀を戴きお大に渡し。見るや表の戴垣の。フシ竹をすつばと切放し。地庭に突立コンコン。お大殿。詞漂泊の暫しが中。遊女と成た手の内にも。敵に出合其時は。ナコレ眞劍づくの勝負と勝負。覺有やと諫る詞。地アイと猶豫も生竹の。節をかけて切放し。是てはいかにと詰寄れば。詞ホ、通々。皮目を残して切たるは。介錯の作法迄。道は良男の篋ぞと。地仰ぎ立れば悦ぶ吉平。残りし竹を追取のべ。詞四十餘人が本望の。御供には洩たれ共。一角に出合なば此竹鐙の直焼奴。定七殿が横山を。突留給ひし吉例は。此。地吉平が手練に有と。勇立たる主従二人。頼もしくも又フシ潔きよし。地時刻移りてよしなしと三十郎が裁配に。新七が亡骸を涙と俱に辰五郎。母の小庵も取々に。かいて乗たる乗物の。跡におつるが新松に。持す位牌はお真向の。彌陀の光りは灯火に。焼て捨たる書置と。おつるが手形も残りなく。死出の門火と諸共に。消行露のフシ野邊送り。

自力他力本願文。佛の教澤草や フシ敵を討に出る門此世を遁てれ出る門、親子は出世の花門徒。跡を伏見の門送り別れくに出て行。

八幡敵討の段

歌雪降れば。木母に花ぞ盛なる。地武士は八幡に返り咲。木津三十郎が一構。けふ代參を設の庭。奴二人が飛石の。フシ雪かき退る掃掃除。地主三十郎が妻のお駒。姫引連しとやかに立出て。詞コリヤくそち達。掃除がよくば勝手へ行。酒でもたべて休足せよと。地下を憐む詞の内。フシナイくく入にける。地かゝる所へ野田糺藏。奴諸平召連て。挨拶もなくのし上れば。地お駒は會釋し。詞コレハく雪の降るのに御苦勞に存じます。サレバく。今日は八幡のお弓に付。主人しづまの頭殿宿願の事有故。代參として手前の屋敷の新參。麻柄一角上使に罷立。次手ながら身が主人の重寶。照月の掛物は家隆の直筆に紛れなきや。三十郎殿に御改め頼ん爲。今日はへ持參致す。夫に付右の上使代參濟だ跡で。此館にて御馳走致し度との事。先達て某へお頼故。右上使迎ひの爲同道に參つた。サア三十郎殿はどれにござる。イヤ只今園に居られます。ドレ呼まして。イヤまあく御待なされ。エ、此手の暖な事はいの。此ぼんじやりやはく。ぼじやくした此手の内へ。コレく心盡せし此玉づさ。地ナ、これさくと抱しむるを。突退て狀打付。詞三十郎といふ主有る身。又してもいやらしい。日外にも懲りもせずあだしたるい。是はくお駒様お心づよい。いかにも日外佳吉にて此奴め。長刀で髑を切れても。膏藥代にもならない。あげくは戸板の宰領役。假令戀なればこそ身が旦那が。お前様へのしなだれ聲。此奴らさめは元朝にも聞かない驚聲。夫を無下にはお胴欲。奴だまれ。主が主なれば家來迄がイヤ推參。奴だまれ。イヤ推參な。コレサく彼にはおかまいなさいな。一度ならずばモ、ちつとく。たつた半分。地くくとフシしなだれかゝる有様に。持餘したる後より。つもと

出たる三十郎。袴がみ纏んでフシ投退れば。地コレハきつい力じやと。振返つて惻り仰天庭に奴もうろしと。フシ穴を尋る計なり。地お駒は嬉しく。テモよい所へ旦那殿。詞又してもくわしにマアく聞しやんせ。イヤく奥。今日は御上使おもてなしの爲迎ひに参る所。ソレ圍其外花掛物杯も。念を入たがよいぞや。イ、エイナアあの權藏が。サアくはて扱。人には目も耳もないと思ふか。何もかも知てゐる。ハテ女といふ者は。をかしい所へ智恵を廻す物じや。譯もない。イヤ何權藏殿。いつの間にはへお出。今日は御上使御馳走の爲。貴殿同道下されいと。先達て頼遣はしたが夫故のお出か。成程左様ハア今日は残の雪の雪氣色。ハア、何とつめたふ冷る事ではござらぬか。成程今日は冷ます。ケ様にひへる時は。ぼんじやりやはくした手を捕へ。抱付が命でござる。ハ、ア何とござるやら。イヤ爰にかはつた物が落て有る。イヤ夫は是は其元のか。イヤ手前は存せぬ。ハテ何じや。つれない君様参る。こがる、此身よりハテかはつたイヤ女房。お駒。是はそなたに預置。エ、穢はしい。ハテ苦しいない大事にかけて。ハテ。マア預て置と。地目でしらすれば合點して。フシ取納むれば。地こなたに權藏底氣味悪く。うぢくもぢく。詞イヤ權藏殿。上使迎の御案内。イザ先おさきへ。いかにも左様。お先へ参ると。地肩臂いからし。歩いて見ても後がみ。今の狀をと振返れば。詞コレサ野田殿先お出。然らばお先へ参りますと。地行共跡へ振返り。夢に砂道行ごとく。奴参れも底氣味悪く。三十郎に追フシ立られて出て行。フシ跡見送りて。お駒は文を取出し。憎いとは思へ共。上使の取持我夫の。了簡はいかゞぞと。案じ煩ひ居る所へ。裏門の方よりも。奴諸平が聲として。詞合點のいかぬ非人め。サア出しおらぬか。アイ。御赦されて下されませと。逃出る女の其姿。義に體をひつ包み。顔押隠す煩かふり。庭先うろつく有様は。塙放るく山鳥の。フシ獵師に追れしごとくなり。詞ヤア御赦されいとはうろん者。其隠した物はへ出せ。盗出しおらぬかイヤ何にも覺えはござりませぬ。ヤアまだあらがふかどう乞食め。但しは手をかけ引出そふか。イヤコリヤく諸平こは高なが夫は何者。イヤ只今旦那權藏様のお供に後れ参る所。お屋敷の中門に。居

る此非八め。何とやら合點の行ぬ頼がまへと。氣を付ますれば簀の下には。双物を所持してをります。夫故の詮議
 でござります。ハテ非人の身として。双物を所持するとは合點の行ぬ。サア出しおらぬか。イエ／＼左様な者ではご
 ざりませぬ。出さねば儕と立かゝるを。地すらりとぬいたる刀の電光。ハツト諸平、フシ跡すされば。諸地簀かなぐ
 つてつゝと付寄。調隠さるゝだけはと隠しますれど。お目立まする上は是非に及ばぬ。成程刀でござります。ドレ
 其刀は。イヤそれから御らふじませ。葵文字の下坂。二ツ胴に數腕。ずんとよく切ますて。地ござんすると、フシ詰よ
 する。地お駒は聲かけ。詞コリヤ／＼非人の女是へ參れ。諸ハアお久しやお駒様。イヤこりや／＼非人。ついに一目
 も見ぬ非人見苦しい。必鹿相をいふまいぞ。諸ハイ御用がござりまするかな。コリヤ非人。女の身として此屋敷へ忍
 び込。内庭を徘徊すれば咎る筈。何故に此屋敷の。内庭にさまよふぞ。アイ敵。イヤア何と。アノ此刀が買て貰ひた
 さに。ムウ其刀をや。諸三十郎様は上使お迎ひのお留主とやら。其奥方様を頼まして。御上使様に此刀を買て貰ひた
 さに。ムウ御上使は未の下刻に。此屋敷へ八幡より御代參のお下り。其御上使へか。成程左様でござりますると。
 諸地人目を包む。フシ互のあしらひ。詞ハ、ハ、ハ、見れば僅の小脇指。其上所々錆腐つて。血のしたひしなまくら物
 御上使へ買ふとは横道者。地下レ其双物を。取にかゝれば。諸身をかはし。詞鉄耶が劔も持人によると。切かゝれ
 ば。地こなたも心得抜合せ。詞コリヤ女手向ひかと。地拂へば隙さず付入て。詞刀の錆は見苦しけれど。血汐に無念
 のこつたる心は直なる直焼双。切味が御所望ならば。どなた成共どなさん成共。切兼ね此作物。シヤ願の過た女め
 と。地拂ふて切込強氣の諸平。フシたゝみ掛て切付るを。すかさずお駒がなげしの長刀。取より早く肋をかけ。ばら
 りずんとすくひ切。けさになつたる諸平は、フシもろくも息は絶にけり。諸詞イヤ申しお駒様。人目を包參りしも。
 敵一角は痣にて顔を隠すよし。實否を紅さん其篇に。夫辰五郎殿寺澤吉平付添て。此お館の裏門に忍び居る。敵阿波
 十郎兵衛を見出さん爲。それに此諸平をお前のお手に掛られては。ヲ、大事な／＼。其諸平を手に掛しは深い思案

少しも氣遣し給ふな。先達て夫三十郎殿の噂に聞。いかにも私が手廻りの姫に姿をやつし。敵一角に近寄て肌救させ。十郎兵衛といふ實否を糾す迄は。わたしが姫マア／＼是へと。諸フシいふにこなたも。間近く寄り膝と膝。調イヤ申しあづま様。今の賣たいとおつしやる双物は。諸サア是にこそ哀な事の物語。もとは淀屋の新七殿。與茂四郎様より譲受たる葵下坂の脇指。死る今迄辰五郎様を大切に。思ひ込だる忠義の最期。其お内儀のおつる殿も。病中の其上に持病の癪が取詰て。是も其後に敢ない最期。孤の新松を。長次郎のだましすかしての介抱。其いぢらしさはいか計り。地聞てお駒も俱涙。諸互にぬる／＼袖袂。フシつもりし雪も解ぬべし。諸地あづまは重て。詞せめて新七殿の未來の迷ひを晴さすは。ナ此双物で。敵阿波十郎兵衛を。シイ聲が高い。石の物いふ世の中。ドレ。地其脇指と手に取て。詞併敵は大丈夫女のおまへ。殊に其様に愁に沈んで居やんすを。だますに手なしと思ひがけなく眞此様にと。地切てかゝれば。諸四寸のひらき。裾を拂へば。諸ひらりと飛退。手拭掛にてはつしと受留。詞コリヤお駒様何とさしやんす。サイナ。若敵がまつかうせば。諸かう押へて。所をひらいてかう切かけなば。まつ此様にと疊蹴上てフシ飛のく隙。詞あづま様。適見事。油斷を見すましまつかうと。地金の片ざし抜手も見せずしゆり劍に。諸うてばかつしり留たる駒下駄。詞お駒様此手の内では。御奉公は成まいかな。ヲウしつかりと抱たぞ。もはや九ツ一間へ行て用意／＼。諸エ、忝い。マアござんせ。ハア。諸歌あぢに浦行てりはの色か。散か散すかあだなる雪を。けふは表に積る雪。鴛鴦の毛衣かとの衣よ。地程なく出来る麻柄一角。上使の權柄鼻高く片面隠す黒あざに。眼玉きろつく押柄顔。二人は優々打通り。詞ヤア身が家來諸平は。何者が手にかけた。扱は内室お駒殿。見れば刀をさげられしは御邊が手にかけれしか。家來の敵遁さぬぞ。ヤア早まられな子細ぞあらん。女房何と。アイ子細と申すは。不義言掛し慮外者故手討に致しました。何々不義言かけた。其證據は何と／＼。サア申し旦那殿。是を披見なされませ。ドレ。何々つれない君様こがる／＼此身。つれないとは一人旅。こがる／＼此身は蜜柑か柑子か。ドレ中を拜見。ア、これ

これ其狀を明るに及ばぬ。不義の證據に違ひはないしやて／＼憎いやつ。エ、しやて／＼苦々しい。何と言分ござらぬか。ヤア何の言分はちつ共ない。家來共。死骸片付と。地手もりをフシくふも小氣味よし。地上使は一身たばこの煙。夫婦諸共威義を改め。たまのお入に不禮のふるまひ。詞何の／＼。武士の家にはケ様の事は毎度有事。何かは知ぬが兎角大目に御らふじたがよい。ノウ權藏殿。いかにも。しやて／＼にが／＼しい。イヤ申し。最前此一腰を賣たいと女の非人。イヤ女の一人召抱くれよと参りました。ムウして其女は。ハイ。とくと手の内。何かの行義を見定めて。姫に抱ました。ヲ、幸々。賣たいと有る其刀は後の事。御上使のもてなし早う／＼。何様此照月の掛物の目利。其義もとくと。アノ奥の座敷で拜見致そう。御上使には塀を見こしの。淀川筋の雪けしき。暫く是にて御遊覽奥御酒一献すゝみやれ。新参の姫參れ。權藏殿。お先へ參る。先お出なされ。歌逢戀と。あはぬ戀路の肌やは。岩間にさける。雪の曙明早き。誦夫と知せに。あづまが略す。姫風。銚子。盃兩手に持。二人が中に押直り。調サア申し一角様。地御酒一ツとぞ勸れば。地一角盃取上て。調サアつけ。ソナ女は今聞ば新参とな。名は何といふ。アイ大と申します。何大。ハテ扱大事ない器量じやな。ナントお駒殿。けふの馳走は此新参の姫を。身がねまの伽に。誦ヤア推參な盜賊め。現在の親の敵。何敵とは。コレハ／＼慮外者すさりおらふ。是はお客もヲ、かた。堅いお方を敵といふ。姫が言損ひ。イヤ申。此雪けしきのヲ、此寒さ。お看はなく共酒一ツ。其元の様に物利らかなはどうも／＼。權藏がつれない君とは。ハ、ハ、ハ、ドレーツ給ふか。サア御機嫌が直つた。ソレお酌。誦アイと刀を提げ立つを。調ハテ／＼早い。早いとは。ハイサアこれお大／＼早い／＼。御上使のお立は未の刻。まだ餘程間が有る。御馳走するは早い。まだ顔が知ぬ顔が知ぬとは。ハテこれ顔はな。アノ梅のかを。雪が包んでかをナ。かほりが知ぬ。憎てらしい雪じやはいなアと。地紛らす間にフシたいこの調。アレハ何じや。ハイあれはナ。お前様を饗に。夫が羽衣わかを一さしお慰の下稽古。ハテ夫はいかめ馳走。何お駒殿。此やしきには親の敵を狙ふ者の。尻を持とやら土

を持とやら。風の噂に聞ましたが定てござるか。サレバナア。左様の事は存ませぬ。ム、女義なれば御存ない筈。じやが三十郎殿は吞込んで有ふが先さきの敵めは劍術何かぬけめのない大兵。何として叶はぬ事じや譬ていはど彼塗桶をとらまへて。鼈めが龍登。誦ハ、ハ、ハ、其ぬけめなき大兵をと詰寄ば。地刀追取一角が。お大を目かけうぬは吾妻。誦詞イヤあづまとは。誦イヤあづま遊びの舞の曲。地謡に紛らし付入一角。お駒は中を隔の扇。誦あづまはゆく敷裾かい挟み。フシ油断透間もなき風情。地駒が見兼てコレハ。詞左の顔の左の痣の。誦色香もたへ也乙女の裳。左右さくさつさつの。花をかざしの天の羽袖なびくもかへすも舞の袖あづまを隔る敷々に。其名を包む色人は三五夜中の空に又。頻に降来る雪の足。國土に是を施し給ふ。去程に時移つて。天の羽衣。うら風にたな引く。詞三保の松原浮島が原や。足高山や富士の高根。幽に成て天津みそらの。霞に紛れて失にけり。誦二人は聲上ヤアハ何れも。詞阿波の十郎兵衛を見出した合給へと呼はるにぞ。地一角が二王立。詞ヤア女原。上使に向ひ慮外者。家來共アレ討取れと。地呼はる間もなく辰五郎。吉平。新松引連て。鎖鉢巻白装束に身を固め。追取巻てヤアハ今朝より三十郎殿の指圖にて。盜賊の十郎兵衛面を隠して忍ぶ故。先達て中將殿へ願ひを上げ。汝が家來は残らず擲取た。遁れぬ所勝負くハフシ詰かくる。こなたの奥の襖藏放し。三十郎が聲高く。詞淀や宗兵衛と合體したる此權藏先達て瑞見山において長次郎が飯綱の術を以て。宗兵衛が紙入の狀通にて明白たり。主人中將へ願ひを上げ。森山の城下をおびき出さん爲の計略。又照月のかげ地を無事に取返さん爲。科人なれば權藏は此ごとく生捕たり。ヤアハ麻柄一角とは偽り。誠は海賊阿波の十郎兵衛。白狀ひろげと呼はれば。ヤア此一角を海賊とは何を證據にいふまい。最前舞に事寄て。此庭へおびき出したはそなたの其贋痣を見出そう爲。とやかく二人が思案の中。天罰といふ物で降しける雪にソレ。そなたの顔の黒痣は。眞赤な赤贋になつたはいノウお大様。いかに。よう驕様を殺して舟の荷物を盜取わし迄を新町へよう賣たなア。夫故に忠義厚いアノ長次郎にも恨を含み。重々仇有る親の

敵。サア大星由良助良男が娘だ。同じく連添からは姑の敵淀屋辰五郎。家來寺澤吉平新七が子新松。とゝ様の敵勝負。エ、千日に拘た萱が一時に亡びると一々いふて聞さふ。成程大星めが女房は無名島で討殺した。夫から方々經廻つて海賊の大將と成り。去夏瑞見山にて新七をたぶらかし四十兩の金も取た。照月のかけ物で權藏共同類故にて取逃した大盗人め。サア此竹鍔で芋ざしじや覺悟。誑コレ吉平。そなたの志は嬉しいけれ共。助太刀を頼では私が討た功がない。辰五郎様と二人に任しや。コレハくお大様。拙者が爲にはお主の敵成れば。誑ハラ無理にと言やると勘當するが。エ、サア其かはりには新七の敵なれば。新松と三人討ば。ハア、夫は忝い。コリヤ坊主よ。とゝが敵じや油斷すな。ヲ、嬉しうござる。ヤイ泥坊め。卑怯な働しおつたら赦さぬぞと。地傍に寄て吃枳尼天の飯綱の法。フシ印を結んで居たりける。地三十郎お駒も俱に息を詰。床几にかゝる檢便の役。辰五郎あづま新松フシ引連立向へば。地阿波の十郎兵衛白装束に身を堅め。切拔んずうろく眼。既に勝負ぞ始りしが。地三人かよわき腕先に。危き所を長次郎が飯綱の法の助太刀に。強氣の十郎兵衛切伏られ。誑三人上につかゝり。詞親の敵姑の敵。とゝ様の敵と。切伏しは。地天にも上る心地なり。三十郎は仰立。權藏は此儘に。中將殿の差圖を受ん。吉平が忠臣に飯綱の法の奇特。末世に其名を長次郎がふしぎを残す淀屋の末葉。竹の園生の末長く金の鶏勝鬨の豊の藏の忠臣に。朽ぬ巖と書留む

寶曆九年己卯五月十四日

作者通名

若 竹 笛 躬
 豐 竹 應 津
 中 邑 阿 契

難波丸金鶏終

